

新編紫史

一名通俗源氏物語

卷四

為雲 胡顏
乙女 玉簫
初看 胡蝶



新編紫史卷四

松風閣主人 譯

第十九帖 薄雲

此帖は源氏
卅一歳の冬
より卅二歳
の秋まであ
り

源氏勸明石
上移二條院

大井の里にては。冬に成り行くまじ。河上の住居いごと心細を勝りて。明石へ上げ。上の空ある心地のみして明と暮すを。源氏は。

(源) 何時までもかくてはえ過ぎ。かの二條院近き所に思ひ立ち移るひね。

と勸め玉へど。明石へ上げ。たとひ二條院に移りても。辛き所多く。君が

辛き所多く
○後撰集、
宿かへて待
つにも見え
ずなりぬれ
ばつらき所
の多くもあ
るかな
いかにいひ
てり○拾遺
集、恨まて
の後さへ人
のつらから
ばいかにい
ひてか音を
も泣くべき

心を見果てんも。残りなき心地すべきを。いかにいひてか。ふといふやうに思ひ亂れたり。

(源) さらばこの姫君を。かくてばかり打置くは不便のことあり。行末は中宮ふごにも思ふ心あれば。辱ふし。紫、上に聞かせ置きたるに。毎にちかしがれば。彼方に引取りて。暫時見馴はせん。袴着の儀式ふごも。人知れぬ様ならず。打晴れて為成さんご思ふ。

と眞實やかに語らひ玉ふ。明石、上は心の中に。紫、上の養女にせんと思す。ふらんご思ひ渡るごふれば。いと胸潰れぬ。

(明) 姫君をば彼君の御子として。改めてやんごふき方に持て成さ

れ玉ふごも。實の御腹ふらねば。人の漏り聞かんごは。却て修飾ひ難く思われん。

とて姫君を放ち難く思ひたり。

(源) それも道理にはあれど。繼母ふごの後安からぬ方やあらんごは。ふ疑ひ玉ひそ。紫上は年経ぬれど。またかゝる姫君もふきび。物寂しく覺ゆるまに。前齋宮の成長びものし玉ふをさへ。無理に養女に扱ひ申す程ふれば。ましてかく姫君の憎み難く可愛げふる程を。疎略には思ひ放つまごき心は入にふんあるよ。

と紫、上の有様の。其心に思ふやうふるごも語り玉ふ。明石、上は心の

源氏使紫上
養明石姫君

中に。君は昔は。いかばかりの人に心定まり玉ふべきにかあらん。と人傳に
 微聞し御心の。今は餘波ふく紫、上に鎮まり玉へるは。大方の御宿因に
 はあらず。またその紫、上の有様も。許多の人の中に勝れ玉へるにこそはあめ
 れ。と思ひ遣られて。數ふらぬ吾々どもの。並び申すべき身分にもあられを。
 とすむに君が御詞に従ひて。東院ふとに移るひ出ては。紫、上も目覺し
 と思すことあらん。吾身は。こてもかゝても同一事あり。生先遠き姫君も。
 終には紫、上の御心に懸るべきにこそあめれ。然りてふらは。寧實にかく何
 心もふき間にや。彼君に譲り申さまじと思ふ。それとまた手を放ちて後め
 たからんこと。徒然も慰む方なくては。今より後。いかゞ明し暮すべからん。と

尼君勸明石
 上渡姫君於
 源氏

ればまた君も。何につけても邂逅の御立寄りもあらん。ふと様々思ひ亂る、
 にも。身の憂きこと限ふし。母尼君思遣り深き人にて。

(尼) 爲方ふし。見奉らざらんことはいと胸痛かりぬべけれど。終にこの

姫君の御爲に。宜かるべからんことをこそ思はめ。君の浅く思して言ふ
 ことにはあらず。唯何事も申さず打頼み申して。渡し奉り玉ひてよ。外
 戚の分限によりてこそ。帝の皇子も分際々々におはすめれ。この源氏
 の大臣の。世に二ふき御有様あむら。臣下とふりて世に仕へ玉ふは。外
 戚の故大納言の。今一段成り劣り玉ひて。その女の更衣腹と言はれ
 玉ひし差別にこそおはすめれ。まして平人は擬ふべきことにもあらず。ま

心占○孟津抄、かく戀ひんものと

た皇子達大臣の女の御腹といへども。尚今差し對ひたる本臺の劣りたる御腹よりは。世の人も思ひ賤し。親の待遇も。え等しからぬものあり。まして尊き御方々に。かゝる姫君も出生ものし玉は。其方などは。こゝろなく消壓され玉ひふん。分際々々につけて。親にも一節持て侍れぬる人こそ。やがて賤しめられぬ始とはふれ。御袴着ふども。たごひいみじき心を盡すとも。かゝる深山隠れにては。何の光榮かあらん。唯源氏の御心に任せ申し玉ひて。待遇し玉はん有様をも聞き玉へ。

と教ふ賢しき人の心占ふごにも。物問はせふごするにも。おは京へ渡り玉ひては勝るべし。このみ言へば。明石ノ上は思ひ弱りになり。源氏もさやうに

は兼ねて思ひにき心のうらやまをしかりける

思しおがら。明石ノ上の思はん所のいごほしごに。強てもえ言はで。唯御文にて。

(源) 姫君の袴着の事。いかやうにか爲候はん。

と言へる御返事。

(明) 萬の事。かひふき我身に比ひ申しては。姫君の生先も。實にいごほしかるべく覺え候ふを。とりとて殿の内に立交りては。いかに人笑にや候はん。

と申したるを。君はいご哀に思す。さて吉き日ふと取らせ玉ひて。竊に姫君を二條ノ院へ渡さん用意ふご。言ひ捉てせ玉ふ。明石ノ上は放ち申させん

こころは。尚いこ哀に覺ゆれど。姫君の爲に善かるべきことを先^まにせめ。
 ご念^{ねん}じ返^{かへ}す。乳母をも引き別^{わか}れふんこと。明暮^{あけくれ}の物思^{ものおも}はしき。是^{これ}まきは徒^{つれ}
 然^くをも打語^{うちかた}らひて。慰^{なぐさ}め馴^なれつるに。今^{いま}はいこ便^{たす}ふきことをと取り添^そへ。
 いみじく悲^{かな}しく覺^{おぼ}ゆべきこと泣^なく。乳母^{めのと}も

(乳) 然^さるべき縁^{えん}ありてや。明石^{あかし}まで下^{くだ}り。覺^{おぼ}えぬ様^{さま}にて見^み奉^{たてまつ}り初^{はじ}て。年^{とし}
 頃^{ころ}の御心^{おんこころ}ばへの。忘れ難^{がた}く戀^{こひ}しう覺^{おぼ}え候^{まを}ふべきを今^{いま}かく別^{わか}れ奉^{たてまつ}ることも。
 打^{うち}絶^たえ申^{まを}すこころはよもあらじ。終^{つひ}には再^{また}逢^あひ奉^{たてまつ}らんとは頼^{たの}みあじら。暫^{しば}
 時^しにても餘^{よそ}所^{ところ}々^々に思^{おも}の外^{ほか}の交際^{まじりあ}し候^{まを}はんが。心^{こころ}安^{やす}からずも候^{まを}ふか
 ふ。

ふと打^{うち}泣^なきつゝ過^{すぎ}す程^{ほど}に。十二月^{しふげふ}にもふりぬ。雪^{ゆき}霰^{あられ}がらに。明石^{あかし}上^{かみ}は心^{こころ}細^{こま}
 き勝^{まさ}りて。怪^{あや}しく様^{さま}々に物^{もの}思^{おも}ふばかりける身^みかふ。と打^{うち}歎^{なげ}きて。平^{へい}生^{せい}よりも
 かの姫君^{ひめぎみ}を撫^なで修^つひつゝ居^ゐたり。雪^{ゆき}搔^かき暮^くし降^かり積^{つも}る朝^{あした}來^{きた}し方^{かた}行^いく先^{さき}
 のこと。残^{のこ}らず思^{おも}ひ續^つけて。例^{れい}は殊^{こと}に端^{はし}近^{ぢか}なる出^{いで}居^ゐふこともせぬを。水^み際^{ぎは}の
 氷^{こほり}ふと見^み違^{ちが}りて。白^{しろ}き衣^えどもの柔^な和^{やわ}なる數^{あまた}多^た着^きて詠^{かが}めたる様^{さま}体^{たい}。頭^{かしら}つき。
 後^{うしろ}手^てふと限^{かぎ}ふき上^{じやう}臈^{ろう}ご申^{まを}すこともかくこそおはすらめと見^みゆ。さて明石^{あかし}上^{かみ}
 は落^おつ涙^{なみだ}を搔^かい拂^はひて。姫君^{ひめぎみ}を渡^{わた}し奉^{たてまつ}りては。わやうふらん日^ひ。ましていかに
 覺^{おぼ}束^たふからん。と行^い末^{すえ}を思^{おも}ひ違^{ちが}りて。可^あ愛^{うた}げに打^{うち}歎^{なげ}きて。

(明歌) 雪^{ゆき}深^{ふか}き深^{ふか}山の道^{みち}は晴^はれずとも。ふはふみ通^{かよ}へ跡^{あと}絶^たえずして。

と言へば。乳母打泣きて。

(乳歌) 雪間ふさ吉野の山を尋ねても。心の通ふ跡たえめやは。

やうに雪深
き山里なれ
と音信せよ
とて文通へ
に踏通へを
かけたま
雪間なき○
たとひ雪は
深くとも尋
ね奉らんと
あり吉野山
とはもろこ
しの吉野の
山に籠ると
もといへる
歌の類につ

と言ひ慰む。この雪少し解けて。源氏は渡り玉へり。例は君の御渡を待ち申すに。今日は姫君の御迎ふらむと思ふにより。明石、上は人遣ふらず胸打潰れて覺ゆ。さて心に。今日の事は我心一にこそあらめ。されば否び申さん。君は強てやは迎へ玉は。あふ味氣ふ。と覺ゆれど。さては軽々しきやうふり。と迫めて思ひ返す。君は姫君のいと美しげにて前に居玉へるを見玉ふに。疎畧には思ひ難かりける人の宿世かふ。と思す。この春より生す御髮。尾殺さの程にて。ゆるくこめてたく。面つき目つき薫れる程ふ。

かいたるな
り
源氏訪大
井里

言へば更ふり。母明石、上の餘所のものに思ひ遣らん程の心の闇。推量り玉ふに。いと氣の毒ふれば。彼方へ御渡のこと。打返し言ひ明す。明石、上は。

(明) いかに否み申さん。かく口惜しき分際の際ととへ恥しめ玉はず待遇し玉は。

と申すものおびら。念いあへず打泣く氣容。哀あり。姫君は何心もふくて。御車に乗らんことを急ぎ玉ふ。車寄せたる所に。母君自抱き出たり。姫君片言の聲はいと美しくて。母君の袖を執へて乗り玉へ。と引くも。いみじく哀に覺えて。

末遠き○今は別れてい

つ成人の程

を見るへき

とて姫君を

二葉の松に

たどへたり

生ひ初めて

○二人か契

約は深き中

なれば終は

武隈の二本

の松のやう

に立並ひて

姫君を養育

せんとなり

(明歌)

末遠き二葉の松に引き別れ。いつか木高き影を見るべき。こえも言ひ遣らず。いみづく泣けば。源氏はせりやあふ苦しと思して。

(源歌)

生ひ初めし根も深ければ武隈の。松に小松の千世を並べん。長閑に思ひ成し玉へよ。

と慰め玉ふ。明石、上も然ることは思ひ鎮むれど。え堪へざりけり。乳母と

少將とて貴やわふる女房と二人ばかり。御劔尾見やうの物取りて乗る。

雑車によろしき若人女童ふと載せて御迎に参らす。君は道すがら御心

に。後に留りつる明石、上の心苦しさを。いかに罪や得らむと思す。暮れて

二條院におはし着きて。御車寄するより。其邊の花やみに。氣容異ふる

御劔尾見○

女子に劔と

具すること

先例あり尼

兒ははうこ

のやうなる

ものなり三

歳まで用也

明石姫君移

二條院

を。女房ふと田舎びたる心地どもには。はしたかくてや交際はんと思ひつ

れど。西面を殊に修はせ玉ひて。小き御調度ども美しげに整へさせ玉へり。

西の渡殿の北に當たる所を。乳母の局にはし玉へり。姫君は道にて寢玉

ひにけり。車より抱き下されても泣きふごはし玉はず。紫、上の方にて。御菓

子参りふごし玉へど。漸々見廻して。母君の見えぬを求めて。可愛げに打

潜み玉へば。乳母召出て。慰め紛はし申し玉ふ。源氏はかく姫君を引

取りては。山里の徒然。ましていかにと思し遣るはいとほしけれど。明暮

思ふ様に待さつ。見玉ふは。物の相應たる心地し玉ふらん。されど紫、上

の御腹ふらば。思ふこともあるまじき。然る他人の思ふべき瑕ふさ。いとは

明石姫君行
着袴式

却てその紫、上に生ておはせよ。口惜しく思はる。
 姫君は。暫時は人々求めて泣きふらして玉ひしがど。紫、上は大方心安く
 面白き心様なれば。姫君はいと能く附き睦び申し玉へれば。紫、上はいみ
 じく美しき見得たりと思ひけり。他事なく抱き扱ひ弄び申し玉ひて。乳
 母も自然力強く奉仕り馴れにけり。またやんごとふさ人の乳あるものを
 副へて參らせ玉ふ。御袴着は取別て故意と思し急ぐことはなけれど。自
 然氣色特別ふり。その御修飾。難遊の心地して。面白く見ゆ。さて此殿
 には。平生に出入る人々の明暮の差別なれば。御祝賀に參る賓客ごも
 も。却て強に目も立どりき。唯姫君の手繰引き結ひ玉へる胸つきを美し

手繰り着

の式に用ゐ
 るなり古註
 に今世無存
 知人頗秘事
 也とあり後
 世はせぬに
 や

げと添ひて見え玉へる。
 大井の方には。姫君の盡せず戀しきにつけても。いかで渡し奉りけん。ご身
 の急を歎き添へたり。尾君も渡し奉れよ。ご言ひしか。いと涙脆なれ
 ど。かく待し待かれ玉ふを聞くは嬉しかりけり。明石、上は何事をかふか
 く。姫君の許へは訪ひ申し玉はん。唯御附の人々に。乳母より初めて。
 世にふさ色合の衣ごも。思ひ急きてぞ贈り申しける。源氏は。明石、上の
 待遠からんも。されば捨て玉へるよ。ご思はんはんに氣の毒なれば。年の内
 に忍びて大井へ渡り玉へり。かくていと寂しき住居に。明暮の侍き種を
 ぞへ離れ申していろ。ご思ふらんごのいなほしければ。御文ごも斷間

ふく遣す。紫上も今は殊に怨じ申し玉けず。美しき姫君に罪免し申し玉へり。

賀正二條院

年も返りぬ。うらゝかふる空に。世に思ふことふき源氏の御有様は。いごめたく。御殿の磨き改めたる御裝飾に。人々參賀に打集ふめり。大人しき程の人は。七日に御祝賀ふご申し玉ふ。車ふご挽き連れ玉へり。若やかふるは。何ごもふく心地よげに見えたり。つきづくの人も。心の内には思ふいごもやあらん。表面ばかりは誇りかに見ゆる頃ほひふりかし。

西對花散里
有様

東院の西の對。花散里の方も。有様は好ましくあらまほしき様に。侍ふ女房女童の姿ふご。打解けず心遣ひしつゝ過すに。近き所の効には。君は

長閑ふる御暇の間ふごには。ふご這ひ渡りふごし玉へご。故意ご立寄り宿りふごし玉ふやうには見えす。花散里は。唯心様の大様にて。かばかりの宿因ふりける身に。いそあらめ。ご思ひ成しつゝ。世に有り難きまで。後安く長閑にも。し玉へば。君の折節の御心掟ふごも。紫上の御有様に劣る差別も。いごふく待遇し玉ひて。悔り申すべくもあらねば。紫上と同様に人も參り奉仕りて。別當ごも。急らず事執り行ひ。却て亂れたる所ふく。目安き御有様ふり。

櫻の御直衣

君は山里の徒然をも。絶えず思し遣れば。公私の物騒がしき間過して。渡り玉ふごて。常より殊に打假粧し玉ひて。櫻の御直衣に。えふらぬ御衣

○帝の直衣の裏濃き蘇芳なり

引き重ねて。薰物たきしめ。装束き玉ひて。紫、上に御暇申し玉ふ様。隈ふき夕日に。いごいしく清らに見え玉ふを。紫、上は尋常ならず見送り申し玉ふ。姫君いけふく御指貫の裾に懸りて慕ひ申し玉ふ程に。やびて外にも出て玉ひぬければ。源氏は立留りて。いと愛憐と思したり。いろくすわし玉ひて。

(源) 明日歸り來ん。

口誦みて出て玉ふに。紫、上渡殿の口に待ちかけて。女房中將、君して申させ玉ふ。

(紫歌) 舟停むる遠方人のふくばこそ。明日歸り來んせふと待ち見め。

明日歸り來ん ○催馬樂、櫻人その舟と、め、島津田を十町作れる。見て歸

り來んや。そよや、明日歸り來んや。そよや、ことをこそ明日ともいはめ、遠方につまざるせなは、明日もされこじや。そよよ、さあすもさねこじや。そよや、舟停むる○明石上のや

(源歌) 往きて見て明日もせねこんふかくに。遠方人は心おくとも。

と返歌し玉ふ。姫君は何事とも聞分かで。され歩き玉ふを。紫、上げ美しと見玉へば。遠方人の恨めしきも。こよふく思ひ免されにたり。さて明石、上はいかに思ひ越すらん。と我身にしてもいみじく戀しかりぬべきこの様を。と姫君を打目守りつつ。吾懐に入れて。美しげなる御乳を口含め玉ひつ。戯れ居玉へる様。見所多かり。御前ふる人々は。

(女房) いてや。ふごか上の御腹には生ておはしまさる。同くは實の御子ふらましかば。

うなる留む

る人なくば

明日とも待

ためとて明

日歸り來ん

と誦し玉ひ

し故に其催

馬樂により

てよめり

往きて見て

○明石上は

心置くとも

明日歸り來

んどなりさ

ねこんは催

馬樂にある

ふご語らひ合へり

山里にはいと長閑やめに心ばせある氣容に住み成して。家の有様も様

離れて珍しきに。明石、上の氣容ふごは。見る度毎に。貴き方々に劣る差

別、よふからず。容貌用意あらまほしく壯び勝り行くに。君は。但尋常の

様ふる人の女ならば。たごひ種姓は卑しくとも。搔き紛れて。とてわばかり

ふる分際の女も。やむいごさき人の北方にてある類もふきにあらねば。とて

もありぬべきと思ふべきを。父入道の世に似ぬ碎物ふるに。世の外聞こそ紛

れ難く苦しけれ。ふご思す。暫時も飽かぬ程にのみあればにや。心の咎ふら

ず立ち返り玉ふも苦しくて。夢の渡の浮橋かごばかり打歎かれて。箏の

詞にて早く

來んとの意

なり

源氏又訪大

井里

夢の浮橋○

河海抄、世

の中は夢の

渡りの浮橋

か打渡しつ

、物とこそ

おもへ

琴のあるを引き寄せて。かの明石にて小夜深けたりし音も。例の思し出

てらるれば。琵琶をわりふく責め玉へば。明石、上は少し撥き合せたる。源

氏は御心に。いかてかくばかり世に勝れて弾き過しけん。と思さる。姫君の

事ふご委細に語り玉ひつゝおはす。此處はかゝる淋しき所ふれど。かやうに

立ち留り玉ふ折々あれば果ふき菓子。強飲ばかりは食召すこともあり。常

に近き御寺。桂殿ふごに參り紛らはしつゝ。此方におはして。いと真帆に

は亂れ玉はねど。またいと餘所々々しく。はしたなく。普通の様には待遇

し玉はぬふごこそけ。いと寵愛特別には見ゆめれ。明石、上も。かゝる御心

の程を見知り申して。身の程に過ぎたりと思ふばかりの振舞は爲出て

す。はた甚く卑下せざるごとし。君の御心控に持て違ふことあり。いと目
 實くぞありける。さて君のおぼろげに貴き所にてまへ。かくばかりも打解け
 玉ふことふく。氣高き御待遇を。兼て聞き置きたれば。二條院に移るひ。
 近き程に交らひては。却ていと目馴れて。人侮られふることもあらん。選
 近にてかやうに振りはへ渡り玉へるこそ。面目ありてたけき心地もすれ。と思
 ふふるべし。明石にても。入道。此世をば思ひ捨てつるやうに言ひしが。この
 源氏の御心控。有様をゆかしがりて。京へ志はく人通はして。消息し
 つ。或は胸潰ることもあり。又は面起しく嬉しと思ふことも多くぞあ
 りける。

攝政太政大臣覺

其頃葵上の御父太政大臣覺せ玉ひぬ。攝政までもし玉ひて。世の台
 鼎とおはしつる人ふれば。朝廷にも帝を始め。思し歎く。致仕の表奉りて
 暫時引籠り玉へりし間をぞへ。天下の騒動ありし程ふれば。まして悲し
 と思ふ人多かり。源氏の大匠も。いと口惜しく。これまでは萬事の政事を
 推譲り申してこそ。閑暇もありつるを。今は心細く。事繁くも思されて。
 歎きおはす。帝は御齡よりは。ことふく大人々々しく壯びさせ玉へば。源
 氏は世の政事も後めたく思ひ申し玉ふべきにはあらねども。また取立て
 御後見し玉ふべき人もふきを。今はこの世を誰に譲りてかは。閑散ある御
 本意も叶はんと思すに。大臣の覺せ玉ひぬるぞ。いと飽かず口惜し。後の

天變

追善ふぐにも。その子孫にも過ぎてぞ。巨細に吊ひ扱ひ申し玉ひける。
 其年大方世の中騒がしくて。禁中ぞまた。物の怪異ふと繁くて長閑ふ
 らず。天空にも例に違へる月日。星の光見え。妖しき雲のたふまひありと
 ばかり。世の人驚くこと多くて。諸道の勘文ども奉れるにも。怪しく世
 に普通ふらぬ事ども混りたり。内大臣殿ばかりぞ御心の中に煩はしく
 思し知らるることありける。薄雲、女院春の初より悩み渡らせ玉ひて。三
 月にはいと重くふらせ玉ひぬれば。帝行幸ふごあり。帝は故院に別れ奉ら
 せ玉ひし程は。いと幼稚くて。物深くも思されざりしを。今はいみじく
 思し歎きたる御氣色なれば。女院もいと悲しく思召さる。

薄雲女院病

帝觀女院病

(薄) 今年は吾命も必遁るまじき年と思ひ申しつれど。おどろく

しき心地にも候はざりつれば。命の限り知り顔に候はんも。人や。うたて
 いてくくしく思はん。と憚りてぞ。功德のことも。わざと例よりも取別て
 しも候はずふりにける。禁裡に参りて。心閑に昔の御物語も申し奉ら
 んふご思ひ申しふがら。唯夢のやうに現様ふる折少く候ふぞ。口惜し
 く悒鬱くて過ぎ候ひぬる。いよいよ。

いと弱げに申し玉ふ。御齡は卅七にぞおはしける。されどいと若く盛に
 おはします様を。帝は惜しく悲しく見奉らせ玉ふ。とぞ御心に。女院は慎
 ませ玉ふべき御齡ふるに。晴々しからず月頃過とせ玉ふことぞ入歎き渡り

玉ひつるに。御慎ぶごをも常よりも殊にせさせ玉はごりけること。いみじく
 思召したり。女院は唯この頃ぞ驚きて萬事の祈禱ぶごせさせ玉ふ。月頃は
 常の御惱ごばかり打撓みたりつるを。源氏も俄に深く思し入りたり。帝
 は限りあれば程なく還幸せ玉ふも悲しきこと多かり。女院はいと苦しく
 て。はかどくしく物も申させ玉はず。御心に思し續くるに。貴き宿世の
 榮も雙ふ人なく。心の内に飽かず物を思ふことも。人に勝りける身。と思
 し知らる。帝の夢の中にも。源氏の御種ぶごいふことを知らせ玉はぬを。女
 院はさすがに御氣の毒に見奉らせ玉ひて。こればかりぞ。後目なく齟結れ
 たること。思し置かるべき心地し玉ひける。源氏は朝廷の御爲にも。攝

源氏奉訪女
院病

政殿の薨せ玉ひしとへあるに。打續きて。かく女院の崩せ玉ひふんことを。
 人知れず思し歎く。さてこの上にも女院との御交情。人知れぬ哀はまた
 限りふくて。御祈禱ぶご思し寄らぬことなし。年頃思し絶えたりつる御
 交情の筋さへ。今一度申さずありぬるが。いみじく思さるれば。君は女院の
 方に参り。近き御几帳の下に寄りて。御様子ぶごも。然るべき人々に問ひ
 聞き玉へば。親しき人々の限り伺候ひて委細に申す。
 (侍女) 月頃惱ませ玉へる御心地に。御行法を。時の間も撓ませ玉は
 ず爲させ玉ふ御勞の積りの。いと甚く頼れさせ玉へるに。この頃ごふり
 ては。柑子ぶごをさへ。御口に觸れさせ玉はずふりにたれば。頼み所なく

ふらせ玉ひにたるいふも。

と歎く人々多かり。女院は。

(薄) 故院の御遺言に従ひて。内大臣殿。帝の御後見奉仕り玉ふ御志の程。年頃嬉しく思ひ知り候ふこと多かれど。何につけてかは。その御心寄特別ある様をも。一言漏らし申さんごばかり。久しく思ひ候ひけるを。終にその志もふくて過ぎしこそ。今は哀に口惜しう。

と微に言はするも。ほのく聞ゆるに。源氏は御應答も申し遣り玉はず泣き玉ふ様。いといみじ。さて何ごと女院に對ひ奉りては。吾のわうも心弱き様に。と人や思はん。と心の鬼に人目を思し返せど。古よりの御有様

を。今思ひ出すに。大方の世につけてもあたら惜しき人の様を。まして君はいよ〜悲しく思はる。それど心に協ふ業あらねば。女院の御命を引き留め申さん方なく。いふかひなく思はる〜限あし。

(源) はか〜しからぬ身あがらも。昔より帝の御後見奉仕るべきことを。心の達る限りは愚からず思ひ申すに。攝政殿の薨れ玉ひぬるまに。世の中心惚忙しく思ひ申さるに。また君のわくれば。しませば。万事に心亂れ候ひて。世にあらんことも残りなき心地ぞし候ふ。

と申し玉ふ程に。女院は燈火あとの消え入るやうにて。終て玉ひぬれば。源氏はいふかひなく悲しきことを思し歎く。さて女院は貴き御身の分

薄雲女院崩

際ご申す中にも。御心ばへふごの。世の爲にも普くあはれにばはしきして。貴き分際は権門に事寄せて。人の愁あることごとくも。自然打混るを。此君は少しもとやうふるこの亂れなく。人の奉仕ることも。世の困苦とあるべきことをば停め玉ふ。とて功德の方ごとも。人の勸むるに從りて。嚴しう珍しく。名聞がましく施入ふごし玉ふ人ふご。昔の賢しき世にも皆ありけるを。此君はとやうふるごふく。唯從來の寶物得玉ふべき年官年爵。御封の物の然るべき限りして。何事もまひふひさせ玉ひて。寺々ふごへも。人知れず心深き寄進ふご爲置のせ玉へれば。物の哀ふご何ごも思ひ分くまじき山伏ふごまで。惜しみ申す。葬め奉るにも。世の中響きて。悲し

今年ばかり
は○古今集
深草の野邊
の櫻し心あ
らは今年は
かりは墨染
にさけ

入日さす○
我喪中に心
なき雲も物

と思はぬ人ふし。殿上人ふご。いづれも喪服して。おしふべて一色に黒み渡りて。物の光榮ふき春の暮あり。源氏は。二條院の御前の櫻を御覽トても。花の宴の折ふご思し出つ。今年ばかりはご獨言ち玉ひて。人の見咎めつべければ。御念誦堂に籠り居玉ひて。日々吊ひ泣き暮し玉ふ。夕日花やかに射して。山際の木末あらはふるに。雲の薄く渡れるが。鈍色ふるを。悲哀に搔き暮れて。何事も御目留らぬ頃ふれご。いと物あはれに思さる。

(源歌) 入日さす峯にたふびく薄雲は。物思ふ袖に色やまがへる。
人聴かぬ所ふれば。かく詠み玉へごかひふし。四十九日の追善ふご過ぎ

を思ふよや
となり

て。佛事ども鎮まりて。帝物心細く思したり。

この女院の御母后の御世より傳はりて。御祈禱の師にて伺候ひける僧都女院にもいとやんごころよく親しきものに思したりしを。朝廷にも重き御信仰にて。嚴重しき御願ども多く立て、世に賢しき聖僧ふりける。年齒七十ばかりにて。今は終馬の行法せんとして籠りたるが。女院の御事により御吊問に出たるを。内裡より召ありて。常に伺候はせ玉ふ。この頃は尚元のやうに。参り侍はるべき由内大臣殿も。勸め玉へば。

夜居○夜居
僧とて二間
に候する御

(僧) 今は夜居ふど。いと堪へ難く覺え候へど。勅命のいと畏きより。舊き志を添へてぞ伺候ふべき。

持僧をいふ

とて侍ふに。閑ふる曉に。人も近く侍はず。或は退出ふことぬる程に。古代に打咳きつゝ。世の中の事ども奏し申す序に。

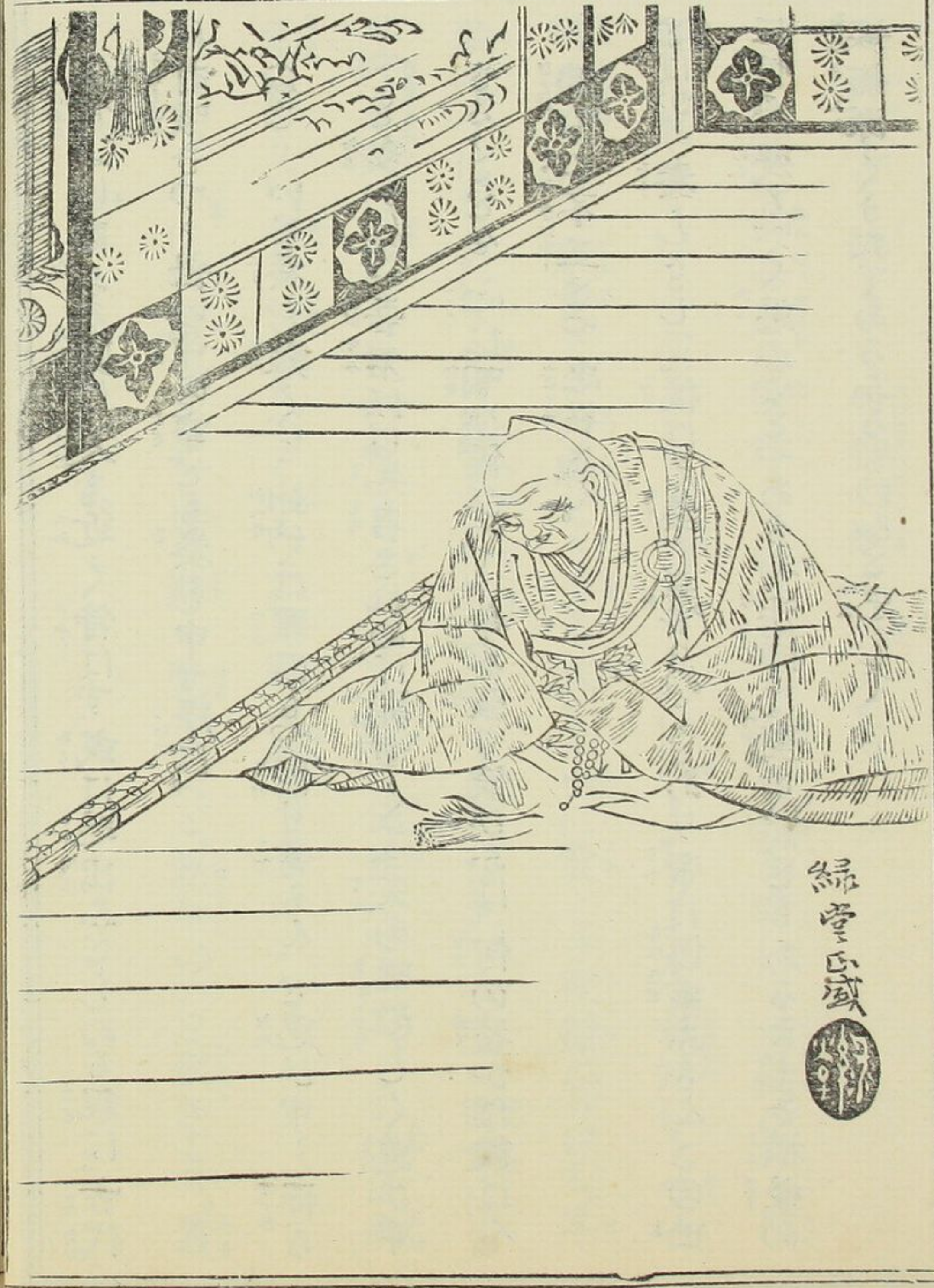
夜居僧竊奏
秘事

(僧) いと奏し難くて。却ては罪にもや罷り當らん。と思ひ申し憚るゝ多かれど。吾君には知召されぬに罪重くて。天の眼恐しく思ひ申し。いと心を。心に咽び候ひつゝ。命を張り候ひふば。何の益かは候はん。佛も心不正とぞ思召せん。

とばかり奏し。後には奏し遣らぬことあり。帝は何事ふらん。この世に恨み残るべく思ふことあらん。法師は聖といへども。あるまじき横様の嫉妬深くうたてあるものぞ思して。

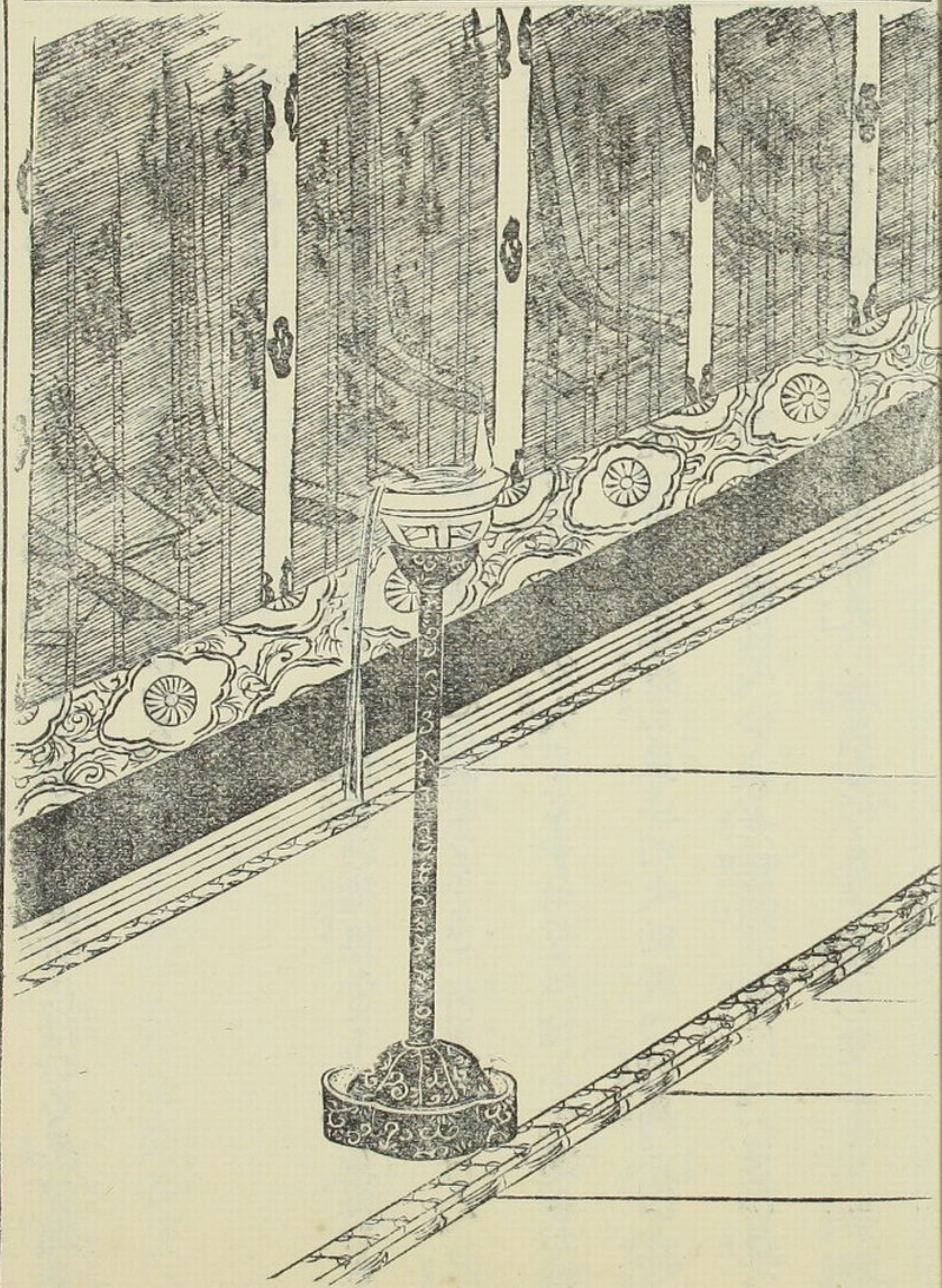
夜居僧
密奏秘
事圖

○薄雲



歸堂正威

三十四



○薄雲

三十五

(帝) 幼稚かりし時より。隔て思ふことなきを。其方にはかく忍び残されたることありけるをぞ。つらく思ひぬる。

と勅はすれば。

(僧) ああ畏。更に佛の諫め護り玉ふ真言の蓋奥をぞへ。隠し留むることなく。弘め奉仕り候ふ。まして心に隈あること。何事か候はん。只今奏せんことは。來し方行く先の大事なることに候ふを。過ぎおはしましに。故院女院。當今世を政ち玉ふ内大臣殿の御爲。凡て却て善からぬことを漏り出て候はん。かゝる老法師の身には。たごひ憂へ候ふことも。何の悔か候はん。佛天の告あるによりて奏し候ふなり。吾君

懷妊れおはしましたりし時より。女院深く思し歎くことありて。御祈禱奉仕らせ玉ふも。その御事をぞ始て知り候ひし。されど委しくは法師の心にえ悟り候はず。事の違目ありて。内大臣殿横様の罪に當り玉ひし時。女院は天の咎かご。いよく怖ぢ思召し。重ねて御祈禱ごも承り候ひしを。内大臣殿も聞召してぞ。又更に事加へて。老僧に御祈禱仰せられて。吾君御位に即きおはしまし。まで。奉仕ることいづも候ひし。その承りし様は。

とて。主上は源氏の御種にまします由を。委しく奏するを帝聞召すに。淺ましく珍かにて。恐しくも悲しくも。様々に御心も亂れけり。暫時御

勅答もふければ。僧都は差過きて奏し出てつるを。逆鱗に思召すにやあらん。煩はしく思ひて。やをら畏りて。退出るを。帝はしこ召し留めて。

(帝) その事心に知らず。過ぎふまじかば。後世の咎あるべかりけること。今まで忍びて口に籠められたりけるをぞ。却て後めたき心ふりと思ひぬる。またこの事を知りて。漏し傳ふる類やあらん。

と勅はず。

(僧) 老僧ご王命婦ごより外には。更にこの事。氣色見たる人候はず。さるにふりてぞ。いと恐しく候ふ。天變頻に示驗し。世の中静謐ならぬ。はこの惟ふ。吾君幼稚く。物の心知召すまじかりつる程こそ。天も捨

て置き候ひけれ。漸々御齡足りたはしまして。何事も辨へさせ玉ふべき時に至りて。咎をも示すあり。萬の事親の御世より始るにこそ候ふ。れ。かやうの天變を。何の罪とも知召さぬが恐しきにより。老僧の心より外に。漏さざと思ひ消してしことをぞ。今更に心より出し候ひぬるにや。

と泣くく。申す程に。夜も明け果てぬれば。退出てぬ。帝は夢のやうにいみじき事を聞召して。色々に思し亂れさせ玉ふ。故院の御爲も後めたく。源氏のかく臣下にて世に仕へ玉ふもあはれに辱かりけること。方々思し惱みて。日高くるまで。御寢所を出てさせ玉はねば。かくましますと聞

源氏參内

き玉ひて。源氏も驚きて參内り玉へるを。帝は御覽するにつけても。いと忍び難く思召されて。御涙の溢れさせ玉ひぬるを。源氏は。帝には大方故母後の宮の御事を。晝夜こふく思召したる頃ふれば。かく泣せ玉ふふめり。と見奉り玉ふ。

桃園式部卿
官覺

その日桃園式部卿官覺せ玉ひぬる由奏するに。帝はいよく世の中の騒がしきことを歎き思したり。かゝる頃ふれば。源氏は里邸にもえ退出て玉はで。つと内裡に伺候ひ玉ふ。志めやひある御物語の序に。

源氏祇候内
裡

(帝) 世は盡さぬるにやあらん。物心細く例ふらぬ心地ばかりとするを。天下もかく長閑ふらぬに。萬事惚忙しくふん。故女院の思さむ所

あるにふりて。これまは世間の事も思ひ憚りつれ。今は女院も此世にまごまごねは。位を避りて。心安き様にも世を過さまほしくそあれ。

と語らひ勅ふ。

(源) それはいごあるまじき御事あり。世の静謐ふらぬには。必政事の直く曲れるにも依り候はず。賢しき世にも善むらぬいごも候ひけり。聖帝の世にも。横様の亂出て來ること。唐土にもその例候ひけり。我皇國にもまじうに候ふ。まして致仕大臣式部卿宮の薨去ふご。道理の年齢ごもの時到りぬるを。思し歎くべきいごにも候はず。

ふと凡て多くの事どもを申し玉ふ。その片端をよに學び書き出すも。ふかくいごと傍痛しや。涼闇ふれば。帝は常よりも。黒き御裝飾に瘦し玉へる御容親。源氏に違ふ所ふし。かく似玉へることは。帝も年頃御鏡にも思し寄ることふれど。僧都の奏聞を聞召し玉ひて後。また巨細に源氏を見奉り玉ひつ。殊にいごあはれに思召さるれば。いかてこの事をかすめ申とばやど思せど。源氏にはそすがにはしたふくも思ひぬべきことふれば。若き御心に。慎ましく。ふともえ打出て申し玉はぬ間は。唯大方の事ごもを。平生より殊に懐しく懇懃に申させ玉ひて。さて打畏り玉へる様に。御氣色いと常にも異なるを。賢き源氏の御目には。奇怪と見奉り玉へ

唐土には云
 〇秦始皇
 晋元帝の類
 なり

帝にはふもやかの御事をいごかく判然と聞召したらんとは。君は夢にも思ざりけり。帝は王命婦に委さし問はまほしく思召せど。女院もやうに忍び玉ひけんことを。今更に知りにけり。と命婦にも思はれまじ。唯源氏にばかり。いかで微聞し申して。先々臣下に列りしもの子の位に即きし例はありけりや。と問ひ聞かんご思せど。更に言ひ出でん序もふければ。いよく御學問をせさせ玉ひつ。様々に和漢の書ども御覽するに。唐土には。顯はれても忍びても。亂りがはしきこといと多かりけり。日本には。そやうの例更に御覽し得る所ふし。たごひあらんにも。かやうに忍びたらんことをば。いかでか傳へ知るやうのあらんとする。一世の源氏。また納

一世の源氏、
 納言大臣に
 なりて云々
 ○この例光
 仁天皇は元
 大納言桓武
 天皇は元中
 務卿光孝天
 皇は元式部
 卿宇多天皇
 は元源氏侍
 従にて何れ
 も位に即け
 り是忠親王
 是真親王兼
 明親王盛明

言大臣にありて。後に更に親王にもあり。位にも即き玉へるも。數多の例
 ありけり。かれば人柄の賢きに言寄せて。ともや源氏に御位譲り申せま
 し。おご万事にぞ思しける。
 秋の司召に源氏の内大臣は。太政大臣にあり玉ふべきこと。内々に定め
 申し玉ふ序にぞ。帝兼ねて思し寄する讓位のこと。竊に漏し申し玉ひ
 けるを。内大臣いごまばゆく恐しく思して。更にあるまじき由を申し返
 し玉ふ。

(源) 故院の御志。數多の皇子達の御中に。臣を取分きて篤く思
 召しおがら。位を譲らせ玉はんことを。思召しよらすおりにけり。されば

親王などは
 いつれも元
 源氏にて親
 王になれり

いひでその御志を改めて。今更に及ばぬ分際には昇り候はん。唯舊の
 故院の御掟のまゝに。朝廷に奉仕りて。今少しの齡重り候へば。世を
 遁れて。長閑なる行法に籠り候ひふんと思ひ申す。

源氏被聽牛
 車
 牛車聽され
 て○御門ま
 て牛をかけ
 て出入する
 を聽ざるな

と平生の御詞に變らず奏し玉へば。帝はいご口惜しくぞ思しける。さて
 源氏は太政大臣にあり玉ふべき定めあれど。思す所ありて。暫時と辭退
 し申しければ。唯御位添ひて。牛車聽されて參内退朝し玉ふを。帝は飽
 かず辱きものに思ひ申し玉ひて。おほ親王にあり玉ふべき由を思し勅は
 すれど。源氏は御心に。天下の御後見し玉ふべき人ふし。權中納言
 大納言にありて右大將兼ねたるを。この大納言の今一段昇りて大臣に

源氏尋問秘
事於王命婦

てもふりたらん後に。何事も譲りてん。さて後にともひくも閑散ふる様に
身を引かんごぞ思しける。さて尚思し廻らすに。故女院の御爲もいとほ
しく。また帝のかく思し惱めるを見奉り玉ふも辱きに。誰がかの秘事を
漏し奏しけん。ご怪しく思さる。かの王命婦は。御匣殿の代りたる所に
移りて。曹子賜りて参りたり。源氏は對面し玉ひて。

(源) かの秘事をもし物の序に。露ばかりにても王上に漏し奏し申
せし、かやもあらん。

玉へ玉へ。

(王) 故宮は。かの秘事。更に懸けても主上の聞召さんことをいみじ

き事に思召して。且は罪獲ることにと。主上の御爲を。尚も思召し
歎きたりし。

と申すにも。源氏は女院の。一方からず心深くおはせし御有様ふと。盡せ
ず戀ひ申せ玉ふ。

齋宮女御下
二條院

齋宮女御は。豫て源氏の思し、も着き御後見にて。やんごころふき御寵
遇あり。御用意有様ふと。思ふ様にあらまほしく見え玉へれば。源氏は
辱きものに待し待き申し玉へり。秋の頃女御は二條院に退出て玉へ
り。寢殿の御修飾。いと輝くばかりに爲玉ひて。源氏は今はこの上もふき
親様に待遇して。抜ひ申し玉ふ。秋の雨いと静に降りて。御前の前裁の。

源氏訪齋宮
女御

いろ／＼亂れたる露の繁きに。君は古の事ども掻き續け思し出てられて。
御袖も濡れつ。女御の御方に渡り玉へり。濃細ふる鈍色の御直衣姿に
て。女院の崩去ふ。世の中の騒がしさに託け玉ひて。御精進ふれば。やが
て珠敷引き隠して。様よく持成し玉へる。盡せず艶めかしき御有様に
て。御簾の内に入り玉ひぬ。女御は御几帳ばかりを隔て。人傳ふらで自
申し玉ふ。さて君は。

(源) 前裁どもこそ残りふく咲き揃ひにけれ。いと物すさまじき年ふ
るに。花は心を遣りて。季節知り顔ふるも。あはれにこそ候へ。

さて柱に倚り居玉へる夕映。いとめてたし。昔の御事ども。かの野宮に立ち
煩ひし曙ぶを。申し出て玉ひて。いと物哀と思したり。女御もかくれば
こい。少し泣き玉ふ氣容。いと可愛げにて。打身動き玉ふ程も。淺まし
く柔和に。艶めきておほは。様あり。几帳を隔てたれば。君は明に見奉らぬ。
そ口惜しけれ。と胸打潰る。うたてあるや。

(源) 過ぎにし方。殊に何も思ひ悩むべきこと。もふして候ひぬ。むかりし
世の中にも。尚我心から好色々々。しきことにつけて。物思の絶えずも
候ひける。わふ。とるまどき。こともの心苦しき。が數多候ひし中。終に
心も解けず。辭結れて止みぬる。こと。二ぞ候ひける。まじり。はかの過ぎ玉
ひにし御母御息所の御事。御息所は拙者の事を。淺ましくのみ思

かくれば○
小町が姉の
歌に、いに
しへの昔の
ことをいと
いしくく
れば袖を露
けかりける

ひ詰めて止み玉ひにしが。長き世の憂はしき節と思ひ申されしを。其
縁によりて。かくまでも君に奉仕り御覽せらるるをぞ。慰めに思ひ申し
成せど。燃えし烟の麝結れけん。尚いふせくこそ思ひ申さるれ。

とて今一は言ひせし玉ひつ。

(又) 中頃世に沈み候ひし程。方々につけて思ひ申せしこと。其後片
端づゝ心に協ひにたり。東院に物する花散里の。便ふくて氣の毒に思
ひ渡り候ひしも。かく移はせては。心安く思ひ成りて候ふ。心は憎む
らぬふど。我も彼も互に見明めて。心もいと爽に候ふ。かく京に立ち返
りて。朝廷の御後見奉仕る喜悅ふどは。そまて心に深く染ます。唯ひや

うふる好色がまじき方は。心に鎮め難くばかり候ふを。かく入内させ
申しつるも。君にはおぼろげに思ひ忍びたる御後見とは。思し知らせ玉
ふらんや。あはれど言はせむば。いかにかひなく候はん。

と少し懸想ばみて言へば。女御はむつわごとく思して。御返答もふければ。

(又) さいりやあふ心憂。

とて。他事に言ひ紛らはし玉ひつ。

(又) 拙者も。今はいかで長閑やかに生ける世の限り思ふこと残さず。
後世の勤行も心に任せて。籠居ふんと思ひ候ふを。何事も此世の思
出にしつべき節の候はぬとぞ。そすがに口惜しく候ひぬべけれ。數ふらぬ

幼き姫○明石の姫君をいふ

幼き姫の候ふを。行々は入内をも爲させ候はん。と心懸け候へど。生ひ先いと間遠ふりや辱へとも。尚我門族を擡げさせ玉ひて。拙者此世に候はずふりふん後も。かの姫を數まへさせ玉へ。

ふど申し玉ふ。女御御返答はいと大様ふるまへ。辛ううて一言ばかりかすめ申し玉へる氣容。いとあつかにしげふらに。君は聞き入れて。こめどこの日の暮るまでおはす。

源氏與齋宮論春花秋葉優劣

(又) 吾家のはかどしき方の企望はとるものにて。年の内に往き替る時々の花紅葉。空の景色につけても。心の慰むべきことも爲候ひにしがふ。春の花の林。秋の野の盛を。とりとへに入争ひ候ひける。その春秋

唐土には○白樂天の詩に逢春不遊樂恐是無心人なほ春花を愛つる唐詩いくらもわるべし
倭言の葉○萬葉集に春はたい花のひとへに咲くばかり物のわはれは秋がまされる

の實にと心寄るばかり。判然ふる品定こそ候はとるふれ。唐土には春花の錦に如くものふしと言ひ候ふめり。倭言の葉には。秋のあはれを取立て思へる。いづれもその時々につけて見るに。目移りて。えこそ花鳥の色をも音をも辨へ候はね。吾狭き垣根の内ふりとも。その折々の心見知るばかり。春の花の木をも植ゑ渡し。秋の草をも掘り移して。徒ふる野邊の虫をも住ませて。君に御覽せさせんと思ひ申すを。その春秋の中。何方にか御心寄せ玉ふべからん。
と申し玉ふに。女御はいと申しにくきと思せど。無下に絶て御返答申し玉はとらんも。うたてあれば。

時々につけ
て○細流抄、
春秋に思ひ
亂れてわき
かねつ時に
つけつゝ移
る心を
えこそ花鳥
の○孟津抄、
花鳥の色を
も音をもい
たつらに物
憂かる身は
過すべらな
り

(齋) 我拙き心には。まましていかゞ思ひ分さ候はん。實にいづこふさ中
に。あやしむ聞きし夕こそ。果ふく消え玉ひにし母御息所の。露のよす
がにも思ひ申されぬべけれ。

とぞげふげに言ひ消すも。いと可愛げふるに。源氏はえ忍び玉はで。

(源歌) 君もさはあはれを交せ人知れず。我身に染むる秋の夕風。忍
び難き折々も候ひしが。

と申し玉ふに。女御にはいかゞ御返答かはあらん。心得ずと思したる御氣
色ふり。とて君はこの序に。御心にえ籠め玉はで。恨み申し玉ふことばもあ
るべし。今少し僻事も爲玉ひつべけれども。女御のいごうたて。と思したる

様に。君も道理に。吾心も若々しく怪しからずと思し返して。打敷き
玉へる様の。物深く艶めかしきも。女御はあかしく心にづきあふと思し
成りぬる。とて女御には。そろそろと引き入り玉ひぬる氣色ふれば。

(源) 浅ましくも疎ませ玉ひぬるか。眞實に心深き人は。かやうに
浅はかには言の葉にも出し候はぬを。よし今より憎ませ玉ふあま。いら
からん。

とて我方に渡り玉ひぬ。打志めりたる源氏の御移香の留りたるを。女御
は疎ましく思はる。女房ども御格子ふご下して。

(女) この御褥の移香。言ひ知らぬものか。いかでかく取り集め。柳

あやし○弄
花抄、いつと
ても戀ひし
からずはあ
らねども秋
の夕はあや
しけかりり
君もさは○
我も内々は
秋と哀と思
ひつるにさ
ては君もさ
やうに思す
かさればあ
はれを交さ
んとていさ

の枝に咲かせたる御有様あらん。あふ思々し。

か心の色
をあらはし
たるなま
つらからん
○河海抄、
つらからん
人の爲には
つらくして
つらきはつ
らきものと
知らせん
柳の枝に○
細流抄、梅
が香と櫻の
枝に匂はせ
て柳の枝に

と申し合へり。源氏は西對に渡り玉ひて。頼にも入り玉はず。甚く詠めて
端近く臥し玉へり。燈籠遠く懸けて。女房ども近く伺候はせて。物語ふ
ど爲させ玉ふ。さて女御の事思ひ出して。かく強ふることに。胸塞がる癖
の尚ありけるよ。吾ながら思し知らる。さて又御心に。この齋宮ふごに心
懸くるは。いと似氣あきことあり。かの藤壺に心通はしたるこそ。恐しく
罪深き方は遙勝りけめど。少時の好色は。また思遣り少き程の過失にて。
神佛も免し玉ひけん。と思し覺すも。ふほ斯道は。年の功に。後安く心深
き方の勝りけるか。と思し知らせ玉ふ。女御は秋のあはれを知り貌に。

源氏に返答申しけるも。悔しく愧じ。御心一に物むつわしく惱まし
げに。爲玉ふを。君はいと健固につれふ。常よりも親がりありき玉ふ。か
くて紫の上に。

(源) 女御の秋に心寄せ玉へりしもあはれに。君の春の曙に心染め玉
へるも。ごわりにはあはれ。時々につけたる木草の花に寄せても。御心留
るばかりの遊ぶご爲てしがあ。私の用務繁忙き身こそ心に協はね。
いかに世を捨て。心に思ふ。爲てしがあ。思へども。唯君の御爲寂
しへ。思ふらん。思ふらん。心苦しけれ。
ふご語らひ申し玉ふ。

源氏訪大井里

山里人もいかに思ふらん。ふと明石、上の方をも絶えず思し遣れど。君は所狭さのみ勝る御身にて。大井の方へ渡り玉ふこといと難し。さて御心に。明石、上げ世の中を味氣ふく憂しと思ひ知る氣色。また京に移らんことを辭み玉へど。おどろかすも思ふべき。心安く立出て。大方ある住居はせむと思へるを。負氣ふことは思すもの。いと氣の毒にて。例の不斷の御念佛に託けて。大井へ渡り玉へり。住み馴るまゝ。いと心凄げふる所の有様に。等閑の人を置きてさへ。愛憐は添ひぬべし。まして明石、上げ。源氏を見奉るにつけても。つらかりける御契の。姫君さへ出て来て。さすむに淺からぬを思ふに。却て慰め難き氣色ふれば。源氏は慰籍め兼ね玉ふ。木いと

繁き中より篝火ごもの影の。遣水の螢に見えまむも面白し。

(源) かつら住居に。これまで浦の漁火ふと見せらまはしければ。いと珍かに

覺えまほし。

の言へい。

(明歌) いさりせし影忘れぬ篝火は。身の浮舟や慕ひ來にけん。

思ふことむかへられ候へ。

と申せば。

(源歌) 淺からぬ下の思を知らねばや。おほ篝火の影は驕げる。誰う

きまの

いさりせし
○明石にて
の物思はや
がて此處の
心盡しに添
ひて來けん
とて憂きこ
との身に離
れぬをいへ

り
 淺からぬ○
 此方の思は
 深きに其方
 は淺く思ひ
 て騒くと奇
 り
 誰うきもの
 ○細流抄、打
 返し思へば
 かちし世の
 中を誰憂き
 ものと知ら
 せそめけん

と打返し恨み玉ふ。大方物静に思さるゝ頃ふれば。嵯峨の御堂の御念
 佛ごもに。御心留りて。例よりは日頃經玉ふにや。明石、上も少し思ひ紛
 れけん。ご言ひ傳へける。

第二十帖 朝顔

此帖は源氏
 卅二歳の秋
 より冬まで
 なり
 父宮○桃園
 式部卿宮に
 て桐壺院の
 皇弟なり
 源氏訪桃園
 宮
 女五宮○桃
 園式部卿宮
 の御妹なり

權齋院は。父宮の御服にて。齋院を下り居玉ひにき。源氏の大匠は。例
 の思と染めつること絶えぬ御癖にて。御吊問ふと繁く申し玉ふ。齋院は
 煩はしかりしことを思せば。御返事も打解けて申し玉はず。君はいと口
 惜しと思し渡る。九月にありて。君は齋院の桃園宮に渡り玉ひぬるを
 聞きて。女五宮の其處にたはすれば。其方の御訪問に託けて參り玉ふ。
 故院のこの皇女達をば。心特別にやんごころよく思ひ申し玉へりしかば。
 源氏は今も親しくつぎくに申し交し玉ふめり。さて女五宮と齋院
 とは。同一寢殿の西東にぞ住み玉ひける。式部卿宮薨れ玉ひて。程もふ

く荒にける心地して。哀に氣容詰めやわふり。女五、宮は源氏に對面し玉ひて。御物語申し玉ふ。いと古めきたる御氣容。咳さがちにたはす。かの大宮はこの宮の姉君にたはすれど。あらまほしく古り難き御有様あるを。この宮は持て離れて。聲ふつかにいぢりて。いと覺え玉へるも然る方あり。

(五) 院の上崩御れ玉ひて。万事心細く覺え候ひつるに。年の積るまじに。いと涙がちにて過し候ふを。この式部卿、宮をへかく打捨て玉へれば。いよ／＼有ひ無ひに此世に留り候ふを。かく立寄り訪はせ玉ふにぞ。世の憂をも忘れしぬべく候ふ。

と申し玉ふ源氏は御心の中に。畏くも年經り玉へるかと思へど。打畏りて

(源) 院崩御れ玉ひて後は。様々につけて同く世のやうにも候はず。拙者覺えぬ罪に當り候ふ。知らぬ世に惑ひ候ひしを。たま／＼朝廷に數まへられ奉りては。また何の政事に取り亂り。暇あくること。年頃も參りて。古の御物語をへ申し奉らぬを。悵鬱く思ひ申し渡りつゝ過し候ふ。

ふと申し玉ふを。

(五) いちよ／＼淺ましく。何方につけても定めふき世を。同く様に

て見過し申す命長その恨めしきこと多く候へど。かくて世に立返り
玉へる。いと嬉しく候ふ。もしありし年頃を。半程見奉りて此世を去り
てはしおば。いかに口惜しからまほし。と覺え候ふ。

と打慄ひ玉ひて。

(又) いと清らに壯び勝り玉ひにけるか。童にもものし玉へりしを見奉
り初めし時。世にかゝる光の出たはしたることを驚かれ候ひしを。時
々見奉るるを忌々しく覺え候ふてふん。帝の上院 ぞいと能く君に
似奉らせ玉へる。と人々申すを。とりとも君には劣り玉ひつらん。とこそ
推側り申し候へ。

と長々と申し玉へば。源氏はかく別段に差對ひては。大方の人は。故意
と譽めの業か。とをわしく思す。

(源) 山賤にふりて。いたく思ひ頼れ候ひし年頃の後。こよふく衰へ
て候ふものを。帝の御容貌は古の世にも雙ふ人ふくやあらん。とこそ有
り難く見奉り候へ。とるをかく仰せらるるは。怪しき御推側にぞ候ふ。

と申し玉ふ。

(五) 時々かく見奉らば。いとこしき命や延び候はん。今日は老も忘
れ憂き世の歎き皆覺めぬる心地ぞし候ふ

と申しても又泣き玉ふ。

三宮○三宮
は葵上の母
君よて源氏
を婿に取れ
り

(又) 姉君三宮羨ましくも君に然るべき御所縁添ひて。親しく見奉り玉ふを羨み候ふ。かの薨せ玉ひぬる式部卿宮も齋院をば君に嫁せ玉はぬを。さやうにこそ悔え玉ふ折々ありしか。

と言ふにぞ。君は少し耳留り玉ふ。

(源) さやうにも侍ひ馴れおまじかば。いかに思ふ様に候はまじ。おろを皆差放たせ玉ひて。

と恨めしげに。齋院に氣色はみ申し玉ひて。さて齋院の方を見遣り玉へれば。枯々ふる前裁の心はへも特別に見渡されて。齋院の長閑やかに詠め玉ふらん御有様容貌も。いごめかしくあはれにて。君はえ念一玉はで。

源氏訪榿齋
院方

鈍色の御簾
○齋院御父
式部卿宮の
服に籠れる
故凡て黒色
を用ゐるな
り

(源) かく此方に侍ひたる序を過し候はんは。志あきやうふるを齋院の御方の御訪ひ申すべかりけり。

とてやびて簀子より西面に渡り玉ふ。日も暮れて暗くありたる程ふれど。鈍色の御簾に。黒き御几帳の透き影あはれに。追風艶めかしく吹き通し。氣容かやうにもあらまじ。簀子にては御氣の毒ふれば。源氏をば南の廂に入れ奉る。女房宣旨對面して御消息申す。

(源) 今更に若々しき心地する御簾の前には。神さびにける年月の勞數へられ候ふに。今は内外も免させ玉ひてんこそ頼み候ひける。

とて齋院の親しく對面し玉はぬを飽かず思したり。

(齋) ありし世は皆夢にふして。今ぞ覺めて果ふきにや。と思ひ定め
 難く候ふに。年月の勞ふは。心静にや定め申さず候ふらん。
 御簾の内より申し出し玉へり。源氏は實にこそ定め難き世あれど。果
 ふきついでにつけても思し續けらる。

人知れす○
 内々君の齋
 院職を罷む
 るを待ちて
 相違はんと
 て數多の無
 情の年月を
 過せりと
 齋院は神

(源歌) 人知れず神のゆるしを待ちしまに。心つれふきを過すか
 今は君も下り居玉へば。何のいそめに託たせ玉はんとする。押あて
 世に煩はしきこそへ候ひし後。様々に思ひ集めしか。かゝる思をば
 人傳ふらで。いかに片端をだに親しく申上げばや。
 強に申し玉ふ御用意ふも。昔よりも今少し艶めかしき氣を添ひ

職なれば神
 のゆるしと
 いひ神さび
 といひいさ
 めなど言寄
 せていふな
 り
 なへて世の
 ○世の中の
 哀はかりを
 言ひ交はし
 玉ふをも神
 は昔誓ひし
 まゝに許し
 玉ふまじき
 として謝絶の

玉ひにけり。さるはいと甚く壯び過し玉へど。ふは若々しくて。大臣ふ
 どの。御位の程には相應ごるめり。

(權歌) ふべて世の哀はかりをふからに。誓ひし、ん、神やいめん。
 とあれば。

(源) あふ心憂。その世の罪は皆科戸の風に任せたま。
 と言ふ愛敬もこの上ふし

(又) 御契を神はいかに候ひけん。
 果ふきことを申すも。真實やかにいと傍痛し。齋院は世づかぬ御有様

は。年月に添ひても物深くばかり引入り玉ひて。御返事をばえ申し玉は

ぬを。君は見奉り惱めり。

(源) 好色々々ときやうにふりぬるを。

ふご浅はひあらず打敷きて起ち玉ふに。

(又) 齡の積りには。面目ふくこそふりぬる業ふりけれ。世に知らぬ癩

れを。今ぞごだに申すべきやうもふく。物疎く待遇し玉ひけるよ。

と少し恨みて出て玉ふ名殘。侍ふ人々所狹きまゝ。例の賞て申し合へ

り。大方の空も面白き程に。木の葉の音ふひにつけても。過ぎしもの哀

取り返しつ。その折々面白くも哀にも。深く見え玉へと御心はへふごも

思ひ出て。女房ごも申す。君は心疾しくて立ち出て玉ひぬる。まゝして寢

詞なり
科戸の風○
風神の名を
級長津彦命
級長戸邊神
といふこれ
も神にこと
よせていふ
なり
御契を○拾
遺集、戀せじ
のミそきと
神はうけす
とか人を忘
るゝ罪ふか
くして

今とごだに

○細流抄に

君か門今々

過ぎ行く出

て見よ戀す

る人のおれ

る姿をどあ

りせめて見

送り玉へと

いふ意をか

すめたるな

り

源氏消息齋

院
見し折の○
齋院に相逢

覺がちに思し續けらる。さて疾く御格子上げさせ玉ひて。朝霧を詠め。枯

れたる花ごもの中に。朝顔のこれかれに蔓ひ纏れ。有か無かに咲きて。色も

殊にかはれるを折らせ玉ひて。齋院に奉らせ玉ふ。その消息に。

(源文) 餘所々々しかりし御待遇に。人様悪き心地し候ひて。後

手もいかに御覽げけん。といごど如く候ふ。されご 見し折の露忘れ

ぬ朝顔の花の盛は過ぎやしぬらん。年頃の積る思も。哀ごばかりは

せりごも思し知るらんや。ごぞ且は思ひ候ふ。

ご申し玉へり。大人び玉へる御文の心はへに。齋院は御返事申さざらんも。

見知らぬやうにや思しれんと思し。侍ふ人々も。御硯取りまかふひて。御

はんとせき

願ふ意なり

齋院に朝顔

奉りしこと

帝木の帖に

あり其頃よ

り心懸け玉

ふなり

秋果て、〇

もはや衰へ

て世に望な

き吾身を推

量せよとな

返事をご申せば。

(桂歌)

秋果て、霧の簾にむすぼれ。あるかふきみにうつる朝顔 我

身に似つかはしき御比喩につけても。いと露けく候ふ。

ごばかりあるは。何の面白き節もふきを。いかふる故にか。君は下にも置き

難く御覽すめり。青鈍の紙のふよびひふるに。墨つきは面白く見ゆめり。

さて贈答の歌ふごは。人の御程書様ふごにつくろはれつ。その當時は難

ふく興ありと見ゆるも。つきごとく学び書かんとするにば。ほつゆむい

ごもあるべければ。さかしらに書き終はしつ。覺束ふきごも多かり。源

氏は御心に。立返り今更に。若々しき御文書さふごも。似合はぬごん

思せご。齋院には尚かく昔より持て離れぬ御氣色あひら。終に許し玉は

ぬを。口惜しく思して過さぬるを思ひつ。え己むまどく思さるれば。更に

立返りて眞實に申し玉ふ。東の對に離れおはして。女房宣旨を迎へつ。

語らひ玉ふ。侍ふ女房ごもの。この君ほごにもあらぬ分際の人にもへ靡き易

げふるものふごは。過失もしつべきまで賞て申せご。齋院はまた若き當時と

つ。いふく思し離れたりしを。今はまして誰もさやうの筋は思ひ懸け玉

ふべき様にもあらぬ御齡にて。果ふき木草につけたる御返事ふごの折過さ

ぬも。軽々しくや取り成せららん。ふご人の口を憚り玉ひつ。打解け玉

ふべき御氣色もふければ。源氏は經り難く同様ふる御心ばへを。世人に變

り珍しくも妬くも思ひ申し玉ふ。

前齋院の權
齋院の前に
居玉ひし齋
院にて源氏
の御妹葵帖
に女三宮と
ある是なり
紫上憂二恨
齋院事一

この事世の中に漏り聞えて。源氏は前齋院に懇切に申し玉へば。女五宮ふごも。よろこと思したり。かくて世間には。齋院と源氏は。似氣あひらぬ御配偶あらん。ふご言ひけるを。紫上は傳聞きて。さやうあらんこともあれば。君はせりとも隔て、隠しは爲玉は。一時は思しけれども。當意に目留めて思へば。君の御氣色ふごも例あらずあぐれたるも心憂く。かの齋院に眞實々々しく思し成らんことを。ふかくにつれなく。戲事に言ひ成しけむよ。ふご思ひ廻す。さて紫上は。齋院と同く皇族の筋には物し玉へ。齋院は君のおぼえ昔より特別にやむことなく思ひ申し

玉ふを。御心ふご彼方に移りふは。はしたなくもあるべきわら。と年頃の御待遇ふごは。立ち雙ふ方なく馴れ來しもの。今更すがに他人に壓し消されんことふご。人知れず思し歎かる。はた君はたこひ掻き絶え名残ふき様には待遇し玉はずとも。いと物果ふき様にて。幼き時より見馴れ玉へる年頃の睦しむれば。心安く思ひ悔り玉ひて。齋院のやうには思さ。ふご紫上は様々に思ひ亂れ玉ふに。大方あることこそ憎からず。掠め成しても打怨ト玉へ。これは君の思ひ大方あらぬ故に。眞實につらしと思へば。却て色にも出し玉はず。源氏は端近く詠めがちに。内裡住繁くあり。其隙の役には。齋院への御文を書き玉へば。紫上は實に世人の言は虚し

かるまどさふめり。氣色をだにひすめ知らし玉へかし。と疎ましくのみ思ひ申し玉ふ。

源氏重訪
桃園宮

冬方。女院の諒闇にて神事ふども停止りて寂々しきに。源氏は齋院の事をつれとぞ思し餘りて。女五宮に例の近づき参り玉ふ。雪打散りて艶ふる黄昏時に。懐しき程に身に馴れたる御衣どもを薰物いよく薰き染め玉ひて。心特別に懸想し暮し玉へれば。心弱からん齋院は。いかゞあらんと見えたり。とて源氏はさすがに紫上にて御暇乞ひ申し玉ふ。

(源) 女五宮の惱ましく爲玉ふるを。訪問ひ申しにぞ参る。

と跪居玉へれば。紫上は見も遣らず。明石の姫君を翫弄び紛はしおはする

側目の。通常からぬを見玉ひて。

(源) 怪しく御氣色の變れる頃か。吾身には罪ふしや。鹽焼き衣の。

あまり目馴れ見立ふく思さるにや。

けて

(又) 彼方に問斷え置くを。またいかゞはせん。

と申し玉へば。

(紫) 馴れ行くこそ。實に憂き事多かりけれ。

とばかりにて。打背向きて伏し玉へるは。君も見捨て、出て玉ふ道。物憂こと。既に女五宮に御消息申してければ。出て玉ひぬ。紫上はかりける事

鹽焼き衣○
細流抄、類
磨のわまの
塩焼き衣なれ
もかば疎く
のそこそあ
りまじりけ
れ
馴れ行くこ
そ○又、あ
れもかばう
き世なれば
や須磨のわ
まの鹽焼き衣
まどはなる

らん

もありける世を今まで衷心ふく過しけるよ。と思ひ續けて伏し玉へり。源氏は喪中ふれば。鈍びたる御衣どもふれど。色合重り好ましく。ふかくに美しく見えて。雪の光に。いみじく艶ふる御姿を。紫、上は見出して。このまゝにて眞實に離れ勝り玉は。いかにせん。と思ひあへず思ひ遣る。君は御先駈ふと思ひやひふる限して。

(源) 内裡より外の歩行は。物憂き程にふりにけりや。桃園の宮の心細き様にてものし玉ふも。年頃は式部卿、宮に譲り申しつるを。今は宮もおはられば。某を頼むと思し言ふも。道理にいとほしければ。ふど。侍ふ人々に言ひ成せど。人々は。

(侍) いてや御好色心の經り難きぞ。あたら御瑕瑾ふめる。軽々しき。いとも出て來ふん。

ふど。喧き合へり。宮の北面の人繁き方ふる御門は。入り玉はんも軽々しければ。西門のいこくしきを。人入れさせ玉ひて。女五宮の方に御消息あれば。宮の方にては。今日はよもや渡り玉は。と思ひけるを。驚きて開けさせ玉ふ。御門守寒げふる氣容にて。急ぎ走り出て來て。頓にもえ開けやらず。この門守より外の男は。またあさふるべし。いほくと引きて。鏡のいと甚く錆びにければ。内にて。

(守) 開かず

と愁ふるを。外にて君は哀と聞召す。さて御心の内に。昨日今日と思す
間に。三十年の彼方にもふりにける世か。かゝるを見つ。假初の宿を
思ひ捨てず。本草の色にも心を移すよと思し知らる。口吟に。

(源歌) いつの間に蓬がもこむすば。雪ふる里と荒し垣根ぞ。

いつの間に
○桃園宮の
荒れたると
見て世の變
遷を觀じた
るなり

門守は門をばや久しく引きざるひ開けて。君は入り玉ふ。かくて宮の
御方に。例の御物語申し玉ふに。宮は古事ども。そこはかどなく打始め
申し盡し玉へど。源氏は御耳も驚ひす睡なきに。宮も欠し玉ひて。

(五) 宵惑をし候へば。物もえ申しやらず。

と言ふ間も。歎息をかいふものによ。聞き知らぬ音すれば。君は喜びふ

から立出て玉はんとするに。またいと古めかしき咳して。参りたる人あり。

(典) 畏けれど。聞召したらん頼み申とするを。世にあるものども。數

まへに玉はぬぞ恨めしや。院の上は祖母殿と笑はせ玉ひし。

ふど名告り出るにぞ。君はこれふん例の源典侍と思し出る。この源典侍と
いひし人は。尾にふりて。この宮の御弟子にて行法ふと聞きしむ。今ま
て世にあらんとも尋ね知り玉はせりつるを。かくと聞き玉ひて。淺ましくふ
りぬ。

(源) その世の事は。皆昔語にありゆきを。遙に思ひ出るも心細き。

今の御詞を真に嬉しき御聲か。親ふしに臥せる旅人。と養育み玉へ

源典侍會源
氏

親なしに○

咲花抄、な
なてるや片
岡山の飯に
餓ゑ、ふせ
る旅人あは
れ親なし
言ひ来しほ
とに○細流
抄、身をう
しといひこ
しほとに今
はまた人の
上とも歎く
べきかな

かし。

とて寄り居玉へる御氣容に。典侍はいと昔思ひ出てつゝ。經り難く艶治
めかしき様に持成して。甚く齒落ちたる口つき思ひ遣らる、聲使ひの。と
すがにあまへて打洒落んとは尚思へり。言ひ来しほにふと云ひ懸るまは
ゆきよ。今しも来る老のやうに思ひ歎くも可笑ふ。君は含笑まれ玉ふも
のふがら。引返へこれも哀あり。とてこの典侍の盛りの頃に。挑みし女御更
衣ども。今は或は一向死亡あり玉ひ。或はかひふくて果あき世に零落へ
玉ふもあるべかめり。薄雲の女院あごの御年齢よ。また四十にも足り玉は
ぞろを。早くも崩御れ玉ひける。あたましほかり思はる、世に年の程。身

の残り寡げとに。心はへふども。物果なく見えし人の。生き留りて。長閑や
かに行法をもとして世を過しけるは。尚凡て定あき世ありと君は思すに。物
哀ふるその御氣色を。典侍は心こさめさに思ひて若やぐ。

(典歌) 年經れとこの契こそ忘れぬ。親のおやとかいひし人言。

と申せば。君は疎ましくて。

(源歌) 身をわけて後を待ち見よこの世にて親を忘るゝためしありやと。

頼もしき契ぞや。今長閑に申をすべさ。

とて起ち玉ひぬ。西面には御格子下したれど。源氏の御出を厭ひがほふ
らんもいかゞ。とて一間二間は下さず。月をこ出て。薄らかに積れる雪の

よからぬ物の世の比喩

○篋日記の支下に擧ぐ又古本の枕草子に、すさまじきもの蠅のけさう、まはすの月夜とありとか
源氏強迫齋院

光に合ひて。ふか〜い面白き夜の様あり。ありつる老婆の心懸想も。よからぬ物の世の比喩ごの聞きし。と思し出でられて。をかしくぞ思われける。君は權齋院に。今宵は眞實やかに申し玉ひて。

(源) 人言憎しふごも。人傳ふらで言はせんを。思ひ斷る節にもせん。ご折入りて責め申し玉へご。齋院は。昔吾も君も若やかに。罪免されたりし世にてさへ。故父宮あごの。君に心寄せ思したりしを。尚あるま〜く耻しと思ひ申して止みにしを。世の末に盛過ぎ。似合はぬ程にて一聲言ひ交さんも。いごまはゆからんと思して。更に動あき御心ふれば。君は淺ましく辛しと思ひ申し玉ふ。さはいへ齋院も。さすがにはしたなく差放ちてお

ごはあらぬ人傳の御返事あご。心疾しきや。夜も甚く閑け行くに。風の氣容烈しくして。まごごにいと物心細く覺ゆれば。君は様よき程に涙押拭ひ玉ひて。

(源歌) つれなきを昔に懲りぬ心ご。人のつらきに添ひてつらけれ。心つから。

ご言ひすとふるを。侍ふ人々。實に傍痛し。ご例の申す。

(權歌) 改めてふにかは見えん人の上にかりご聞きし心かはりを。

昔に變ることば習はず。

ご申し玉へり。君はいふかひふくて。いと眞實やかに怨り申して。このま

つれなきを
○昔からの
つれなきに
懲りぬ吾心
の人のつら
さに添へて
つらしと赤
り
改めて○貞
操を改むる

出^いて玉^{たま}ふもいと若^{わか}々^々しき心^{こゝろ}地^ちし玉^{たま}へば。

(源) いとかく世^よの例^{たがひ}にかりぬべき有^{あり}様^{さま}漏^{もら}し玉^{たま}ふふよ。ゆめく。い

さら川^{がは}ふども馴^{なれ}々^々しや。

とて女房^{にようぼう}宣旨^{のんじ}にうちきめき語^{かた}らひ玉^{たま}へど。心^{こゝろ}知らぬ女房^{にようぼう}どもは。

(女) 何事^{なにごと}にかあらん。あふ辱^{かたじけ}ふ。強^{あぢがち}に情^{なさけ}後^{おくれ}れても待^{まち}遇^ぐし申^{まを}し玉^{たま}ふら

ん。輕^{かろ}忽^{たか}に押^お立^たて。人^{ひと}の心^{こゝろ}を強^{つよ}ふることふどは見^みえ玉^{たま}はぬ御氣色^{みけしき}を御

氣^きの毒^{どく}や。

と言^いふ。齋院^{さいえん}は。實^{じつ}に人^{ひと}の程^{ほど}の。面^{おも}白^{しろ}きにもあはれにも。思^{おも}し知^しらぬにはあ

られど。物思^{ものおも}ひ知^しる様^{さま}に見^みえ奉^{たてまつ}ること。普^{あま}通^との世^よの人^{ひと}の賞^めで申^{まを}すらん列^{つら}に

は人の上に
聞きてもわ
るまじきと
思ふにいか
て吾身に改
められんと
なり
齋院貞操益
堅
いさら川○
古今集犬上
の庄の山な
るいさや川
いさよこた
へて我名も
らすな

思^{おも}ひ成^なされむ。且^{かつ}は輕^{かろ}々^々しき心^{こゝろ}の程^{ほど}も。君^{きみ}の見^み知^しり玉^{たま}ひぬべく耻^{はづか}しげふ

める御有^{おんあり}様^{さま}を。思^{おも}せば。懷^{あつ}かしからん情^{なさけ}も。いとかへふし。されど然^さる筋^{せぢ}ふ

らぬ。大方^{おほかた}の御文^{ごんぶん}の御返事^{ごんかへり}ふどは。打^{うち}絶^たえずればつかあかるまじき程^{ほど}に申

し玉^{たま}ふ。とて御心^{ごんこゝろ}に。人傳^{ひとづて}の御返答^{ごんいっひ}。はしたなからて過^{すべ}してん。かくて世

を遁^{のが}れて。年頃^{としごろ}沈^{しづ}淪^づみつる罪^{つみ}亡^なふばかりの御行法^{ごんぎやうほふ}をばせん。とほ思^{おも}し立て

ど。俄^{たは}にかゝる事^{こと}して持^もて離^{はな}れがほにあらんも。却^{かへり}て今^{いま}めかしきやうに見^みえ

て。君^{きみ}の心^{こゝろ}寄^よりして様^{さま}變^かへたり。ふど人^{ひと}は執^とり成^なさん。ふど世^よ人の口^{くち}惡^{がら}き

を思^{おも}し知^しりしかば。且^{かつ}は待^{まち}ふ人^{ひと}にも打^{うち}解^とけ玉^{たま}はず。甚^{いた}く御心^{ごんこゝろ}づかひし玉

ひつ。漸^{やう}々^々心^{こゝろ}の中^{うち}に。御行法^{ごんぎやうほふ}ばかりをし玉^{たま}ふ。とて齋院^{さいえん}は。御兄弟^{ごんけい}弟^{てい}の君^{きみ}達^{たち}

數多ものし玉へど。御一腹ふらねば。いと疎々しく。宮の内いご微に成り
行くまに。さばかりめてたき源氏の懇懃に御心を盡し申し玉へば。皆人
心を寄せ申すも。一つ心ご見せ。

源氏は強に思し入らるにもあらねど。齋院のつれなき御氣色の憂たきに
負けて止みふんも口惜く。實にまた君の御有様がらの名望特別にわく
もあらまほしく。物を深く思し知り。世の人のごあるかゝる差別も聞き集
め玉ひて。昔よりも數多經勝りて。深く物を思さるれば。今更の御仇氣も。
且は世の誹議を思しふがら。彼人に逢はで空しからんは。いよく人笑
ふるべし。いかにせん。ご御心動きて。二條院に夜離れ重ね玉ふを紫上

紫上源氏

戯れにく
〇河海抄、お
りぬやと心
まがてら相
見ねは戯れ
にくさまて
ず戀しき

は戯れにくはかり思す。かくて忍び玉へど。いかに涙の打溢る折もあから
ん。源氏は

(源) 怪しく列ふらぬ御氣色こそ心得がたけれ。

とて紫上の御髪を掻き遣りつ。いごぼしご思しふる様も。繪に畫かまほ
しき御好偶あり。

(又) 女院崩せ玉ひて後。帝のいと寂々しげにのみ世を思したるも。心
苦しく見奉る。攝政殿もおはせで。政事を見譲る人なき事繁に。ご。
此程の斷問ふごを。君には見習はぬごに思すらんも。道理にあはれふ
れど。今はさりごも心長閑に思せ。成長び玉ひためれど。またいと思ひ遣

りもふく。人の心も見知らぬ様にもとし玉ふこそ可愛げふれ。

ふと言ひて。涙にまろがれたる御額髪。引き修るひ玉へど。紫上げ。いよ
く背面きて物も申し玉はず。

(又) いと甚く若び玉へるは。誰が習はし申したるぞ。

とて常ふき世に。かくまで心を懸くるも。味氣ふの業や。と且は打詠め玉
ふ。

(又) 齋院に果ふし言申すに。もし思し憐むる方もあらんが。それは

いと持て離れたることぞよ。自然見玉ひてん。かの齋院は。昔よりこよあ
く氣遠き御心はへふるを。寂しき折々。たふらふ申し惱ますに。かの

宮も徒然にもとし玉ふ所ふれば。邂逅の御返答ふとし玉へど。眞實々
々しき様にもあらぬを。其方へかくぞあるごしも憂へ申すべきことかは。

必後目なくはあらざと思ひ直し玉へ。

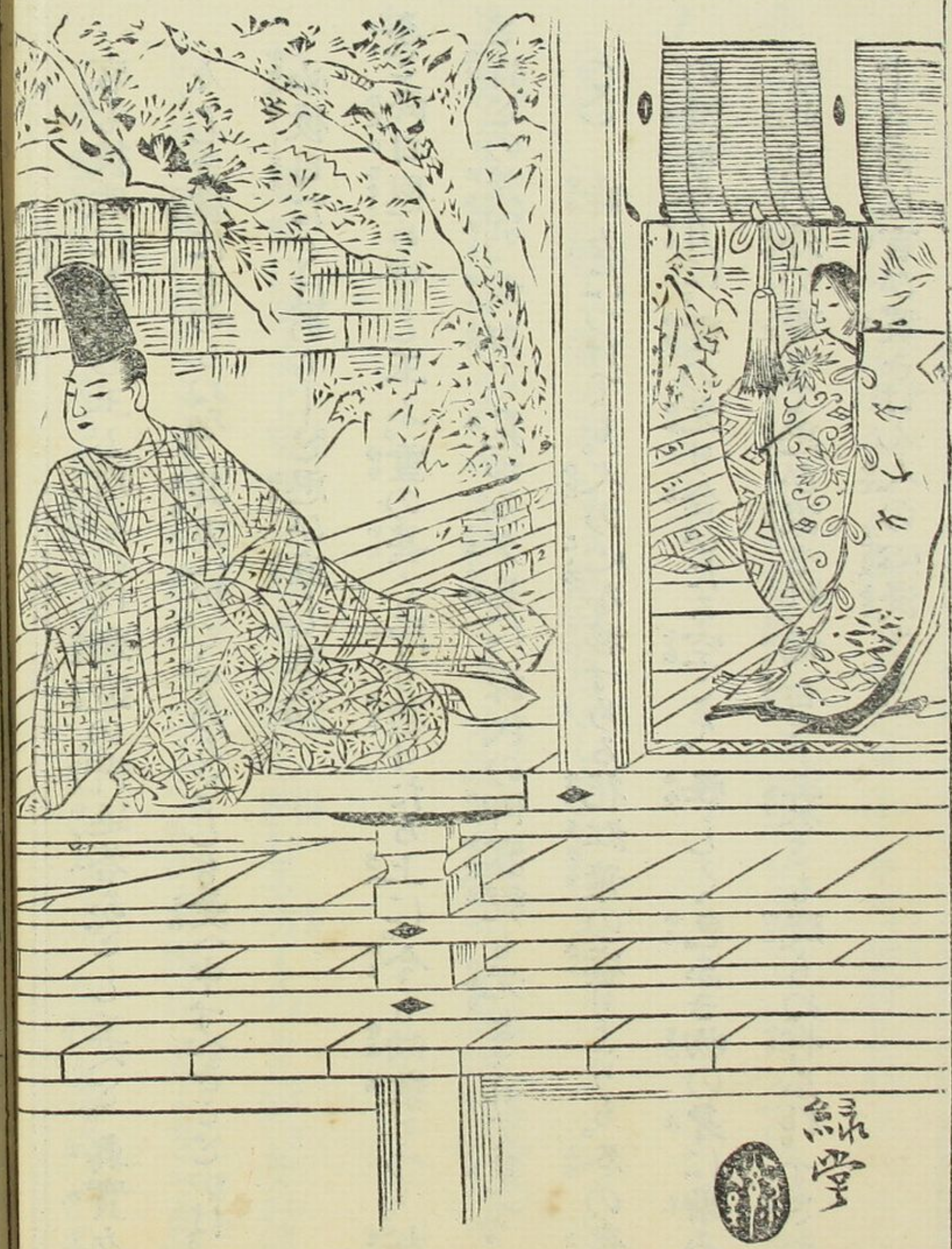
ふと終日慰め申し玉ふ。雪の甚く降り積りたる上に。今も尚散りつ。松
と竹との差別。面白く見ゆる夕暮に。源氏の御容貌も光まそりて見ゆ。

(又) 時々につけても。人の心に移すめる花紅葉の盛りよりも。冬の夜
の澄める月に。雪の光り合ひたる空こそ。怪しく色ふき物の身に染み
て此世の外のこと思ひ流され。面白さも哀れも残らぬ折ふれ。すまさま
いさ例に言ひ置きけん人の心浅せよ。

冬の夜の○
河海抄、い
さかくてと
り明してん
冬の月春の
花にも劣ら
ざりけり

雪遊園

○朝類



九十二

録堂



春を待つ

冬の限と

思ふには

かの月

しもそ

あはれ

なりける



○朝類

九十三

すきやしき
例○童日記
にあはすの
もちの比月
いとあかき
に物語しけ
るを人見て
あぢすさま
じふはすの
月にもある
かなといへ
りければ春
とまつ冬の
限里と思ふ
にはかの月
しもすあは

とて御簾捲き上げさせ玉ふ。月は隈なく差出て。雪ご一色に見え渡され
たるに。萎れたる前裁の蔭告しく。遣水もいと甚く咽びて。池の水も
えも言はず凄さに。童下し雪圍はしとせ玉ふ。美しげふる姿頭つきご
も。月に榮えて。大やかにふりたるが。様々の相亂れ着。帯四度解ふき宿直
姿艶めきたるに。いふかく餘れる髪かみの末。白き庭には。まとして持てはやした
る。いと鮮麗ふり。また小きは。童げて喜び走るに。扇あふぎも落して。打解け
顔がほをわしげふり。いと多く團たまごはさんご力ちからを入るれど。えも推動おしうなわされで詫
ふめり。一方は東の端つぎふごに出で居て。もごわしげに笑ふ。

(源) 一年女院の御前に。雪の山作られたりし。世に經りたることあ

れかりける
女童團雪遊
戯

れど。尚珍たがひしくも果はかなきことを為成し玉へりしことかふ。何の折々に
つけても。世におはせぬは。飽かず口惜しくもあるかふ。女院は拙者そんがしを。
いと氣遠く待遇し玉ひて。精くばしき御有様を見馴し奉りしことほあか
りしがご。御交際の程に。後安うしろやすきものには思おもしたりき。打頼うちたのみ申して
ごある事ことかゝる折につけて。何事なにごとも申し通かよひしに。取立とどてはえとごし
きことも見え玉はざりしがご。いふかひありて思おもふ様に果はかなき事業ことわざをも
為成し玉ひしよ。世にまた然さばかりの類たぐひありふんや。柔なやかに大様おほさまふるも
のふがら。深く物を思おもひ入りたる所の。雙ふたびふくものし玉ひしを。君きみ
そはあはしい。紫むらさの縁故ゆかり。いふかひらすものし玉ふめれど。比ひふれば少せし

煩はしき氣容添ひて。角々しきの進み玉へるや。苦しからん。權、齋院の御心はへは。また様特別にぞ見ゆる。寂しき折には。何とほふくとも申し合せて。我も心遣ひせらるべき邊は。唯この一所や世に残り玉へる。

と言ふ。

(紫) 朧月夜、尚侍こそは。朧々しく由緒々々しき方は。人に勝り玉へれ。淺はかふる筋ふと持て離れ玉へりける人の御心にて。怪しくも浮名のありける。つたむひふ。

と言は

(源) 然。かの君は。艶めかしく容貌美き女の例には。尚引き出つべき

人ぞかし。そう思ふにも。いと惜しく悔しきことの多かるか。まゝして仇氣過ぎたる人の。年積り行くまに。いかに悔しきこと多からん。他人より此上あく實直と思ひし吾へ過ちし。つたむひ。まゝしてかの君は。

ふと言ひて。尚侍の事にも涙少し落し玉ひつ。

(又) かの數にもあらず。恥しめ玉ふ明石、上こそは。身に分際にはや。打過ぎて物の心ふとほあるべけれど。固より受領の女にて。人に異なるべきものあれば。思ひ上れる様をも見消して候ふか。いふかひあき分際の人ばまた見ず。人は勝れたるは難き世ふりや。東院にふむる花散

里の心ばへこそ。振り捨て難く可憂けれ。かゝる人はまた更に世にあらぬものを。然る方につけての心ばせ。人にとりつゝ見初めしより。同じ様に世を慎ましげに思ひて過ぎぬるよ。今とてもまた互に背面くべくもあらず。深くあはれと思ひ候ふ。

ふと昔今の御物語に。夜更け行く。月いよく澄みて静に面白し紫上げ。

(紫歌)

氷閉ち石間の水はちきふやみ。空澄む月の影ぞふりる。

氷閉ち○雷座の体を詠みたるなり

と詠みて外を見出して。少し傾き玉へるほど。似るものふく。美しげふり。髪様面様の。戀ひ申す薄雲、宮の面影に。ふと似てめてたければ。君はいそ

か他に分くる御心も。取り返しつべし。鴛鴦の打鳴きたるに。

(源歌)

かきつめて昔戀ひしき雪もよに。哀を添ふる鴛鴦のうさねわ。

かきつめて
○これも折
ふしの感情
をよとたる
あり

とて内に入り玉ひても。かの宮の御事を思ひつゝ御寝れるに。夢にもふく御容貌ほのかに見奉るを。いみづく恨み玉へる御氣色にて。

(薄)

世に漏れど一言ひしごと。浮名の隠れふかりければ。愧しく苦

しき目を見るにつけても。つらくふん候ふ。

と言ふ。源氏は御返答申すと思すに。覺はる心地して。紫上の。

(紫)

此はふいにこてかくは物し玉ふ。

と起し玉ふに。君は驚きて。夢の名残いみづく口惜しく。胸の置き所ふ

○源氏薄
雲女院

く騒げば。打押へて涙も流れ出にけり。覺めての今もいみじく濡し添へ玉ふ。紫上は。いかなる事にかあらんと思すに。打身動きもせざ。伏し玉へり。君は

(源歌) 解けて寝ぬ寢覺とびしき冬の夜に。むすぼれつる夢の短き。

解けて寝ぬ
○寢ざめさ
びしき長さ
夜に夢の短
きとて今少
し物をも申
し交すへき
にどの意を
合とたり

と詠み玉ひて。ふか〜飽かず悲しと思すに。早く起き玉ひて。宮の御爲とも世に知らせで。所々の御寺に。御誦經ふとせとせ玉ふ。苦しき目見せ玉ふと恨み玉へるも。さぞ思はらんかし。さて宮は行法をし玉ひ萬事に罪輕げふりし御有様ながら。かの秘密の一事にてぞ。この世の濁を濯ぎ玉はらん。と物の心を深く思したるに。いみじく悲しければ。いかにしてか

知邊ふき世界におはすらんを。訪問ひ申しに詣で。沈淪み玉へる罪業に代り申さばや。ふとつく〜と思す。かの宮の御爲に。特更に取立て。何業を爲玉はんは。人咎め申すべし。帝にも御心の鬼に思す所やあらん。と思し色むはごに。阿彌陀佛を心に懸けて念々奉り玉ふ。

(源) 同一蓮にこそは。あき人を慕ふ心に任せても。影見ぬ水の瀬

いぢまらん。

と思すぞ。憂わりけるこや。世に言ふらん。

きか人を○
いかやうに
慕ひ行くも
御在所知
り難しと奇
り

此帖は源氏
卅三歳の夏
より卅五歳
の冬までな
り

源氏消息権
齋院

懸けきやは
○去年まで
齋院にて御
契し玉ひし
を今年は立

第廿一帖 乙女

年更りて。女院の諒闇も過ぎぬれば。世の中色改まりて。更衣の程ふも
今めかしきを。まとして加茂祭の頃は。大方の空の景色。心地よけふるに。
前齋院権姫君はつれづれと詠め玉ふ。御前ふる桂の下風ふつかしきに
つけても。若き女房ごもは。御契の事ふと思ひ出る。こゝいもあるを。大殿源
氏君より。御契の日は。いかに長閑に思さるらん。と訪ひ申させ玉へり。
(源) 今日懸けきやは川瀬の波も立わへり君が御契のふちのやづ
れを。

紫の紙堅文すくよかに。藤の花につけ玉へり。折のあはれふれば。齋院よ

替り藤衣を
改め玉ふこ
と思ひ懸け
さるこよ
と淵に藤を
かけたぞ
藤衣〇父宮
に後れ奉り
しは昨日の
やうなるを
今日ははや
除服の御袂
するとなり

りは御返事あり
(瞳) ふぢころもぎこは昨日と思ふまに。今日はみそぎのせに變る世
を。 はひふく。

ごばかりあるを。源氏は例の目留めて見おはす。齋院の御除服の程ふごに
も。君は美服調にて。宣言の許に。所狭きまで。思し遣れるごごもある
を。齋院は見苦しきごに思し言へ。宣言ごもは。

(宣) をかしやかに氣色ばめる御文ふごのあらばこそ。ごもかくも申し
返さめ。年頃も表向の折々の御訪問ふごは。申し習はし玉ひて。いと
眞實やわふれば。いか言ひ紛らしても。申し返し奉らん。

こて持て煩ふべし。女五宮の御方にも。かやうに折過さず訪ひ申し玉へ
ば。宮は

(五) いごあはれに。此君の昨日今日の乳兒と思しを。かく成長び
て訪ひ玉ふご。容貌のいと清らふるに添へて。心とご。人には特別
に生ひ出て玉へれ。

と譽め申し玉ふを。若き女房ごもは笑ひ申す。宮。齋院に對面し玉ふ折
は。

(五) この大臣のかく懇懇に申し玉ふめるを。何か持て離れ玉ふ。今
始めたる御志にも候はず。故宮も其方の齋院ごふりて。筋異にふり玉

女五宮勸齋
院從源氏

ひて。彼君を聲に見奉り玉はぬ歎息をし玉ひては。これまで思ひ立ち
 しことを。其方の強に持て離れ玉ひしことふ言ひ出てつゝ。常に悔し
 げにこそ思ひしたりし折々ありしか。されど故攝政殿の姫君葵、上。この
 世に存生せられし限は。母君三宮の思ひ玉はんものいほほしむ。
 吾はかく言添へ申す。いふもふかりしあり。今は葵、上も亡あられし
 かは。其方は彼君の本臺にておはせましても。何れかは悪しからまし。
 と打覺え候にも。今は其方も齋院を下り玉ひ。昔に更返りて。かく彼
 君の懇懃に申し玉ふも。然るべき宿因にもあらん。こそ覺え候ふ。
 ふ。いと古代に申し玉ふを。齋院は心づきふこと思ひて。

齋院終不從

源氏若君元服

(禮) 故父宮にも。そやうに心強きものに思はれ奉りて。過ぎ候にこそ。
 今更に復世に靡き候はんも。いと似合はぬこと候ふ。
 と申し玉ひて。耻しげふる御氣色ふれば。宮は強ても申し面向け玉はず。
 侍ふ宮人も。上下皆源氏に心懸け申したれば。齋院は世の中いと後め
 たくばかり思はるれど。かの源氏、君は吾心を盡し。あはれを見せ申して。
 齋院の御氣色の。打揺がんはこそ待ち渡り玉へ。そやうに無理ある様
 に。御心破り申せんふは。思はるべし。
 葵、上の御本腹の若君夕霧、君の御元服のこと思ひ急ぐを。二條院
 にてせんと思ひ。祖母大宮の。いとゆかしげに思ひたるも。道理に氣の

右大將〇頭
中將あり

淺黄の袍に
て〇淺黄は
六位の袍な
りよの君初
め童殿上し

毒ふれば。尚やびてかの三條宮にてせさせ奉り玉ふ。右大將殿を始め
御叔父の殿ばら。皆上達部の貴き勢望にてのみものせば。主人方にも吾
もく。然るべき御祝儀のものども。とりとに奉仕り玉ふ。大方世動
りて。所狭き御急ぎの勢あり。さて父君源氏はこの君を四位にふしてんこ
思し。世の人をもぞあらんと思へるを。またいと幼稚なるほどを。源氏は吾
心に任せたる世にて。しか思ひ遣りもふくしふせんことも。却て目馴れた
ることふり。と思し止めつ。若君は。元服して。淺黄の袍にて殿上に還昇
り玉ふを。大宮は。飽かず淺ましきことおぼしたるぞ。道理にいことほしか
りける。若君は大宮並に父君に御對面ありて。六位に叙任のこと申し

玉ふに。父君は。

たれば六位
に返りて更
に殿上する
なり

(源) 唯今かく強にも。またきに生ひ着かすまゝ候へ。思ふ様あ
りて。暫大學の道に習はせむの本意あるにより。今二三年を徒の年に
思ひ成して。自然朝廷にも奉仕りぬべき程にもふらは。今人ご成り候
ひふん自分は九重の内に生ひ出て候ふて。世の中の有様も知り候は
ず。晝夜御前に侍ひて。幾い果ふき書物ふとも習ひ候ひし。畏き御
手より傳へ候ひしとへ。何事も廣き心を知らぬ程は。文才學ぶにも。琴
笛の調にも。音足らず及ばぬところの多くを候ひける。果ふき親に賢き
子の勝る例はいと難きこと候へば。まことつぎつぎ傳はりつゝ隔たり

行かん程の行先。いと後めたきによりてぞ。思ひ置きて候ふ。貴き家の
 子として官爵心に叶ひ。世の中盛りに驕奢り習ひぬれば。學問おご
 に身を苦めんころは。いと物遠くぞ覺ゆべかめる。遊戯を好みて。心のま
 なる官爵に昇りぬれば。時に従ふ世の人の。下には目まぐるぎをこつ
 追従し。氣色取りつゝ従ふ程は。自自然間と覺えて貴きやうふれど。
 時移り。然るべき人に立ち後れて。世哀ふる季には。人に輕め蔑らるゝ
 に。保る所なきこと候ふ。尚漢學を本としてこそ。和魂の世に用ぬ
 らるゝ方も。強く候ふらめ。下臈にては。差當り心もあさやうに候へど
 も。終の世の柱石とふるべき心。捉を習ひふば。吾此世に候はずありふん

左工門督〇
 右大將別腹
 の弟なり

後も後安かるべきにより。只今は果々しからずあがらも。かくて養育
 み候は。窮りたる大學の衆とて。啜ひ侮る人も。よもや候はざと思ふ。
 おご申し知らせ玉へば。大宮は打敷き玉ひて

(大) 實にかくも思し寄るべかりけるを。かの右大將おごも。餘り引
 違ひたる事あり。と打傾き候ふめるを。この若君の稚心地にも。いと口
 惜しく。右大將左衛門督の子ともおご。我よりは下臈と思ひ恥し
 たりしと。皆各加階し昇りつゝ成長げ合へるに。六位をいと辛しと思
 はれたるが氣の毒に候ふあり。

と申し玉へば。源氏は打笑ひ玉ひて。

(源) いと大人げても恨み候ふよ。いと果ふしや。實にこの兒の年齢にては。内意も心得まらふ。學問ふごして。少し物の心も得候へば。その恨は自然解け候ひ。

若君行命字式
字命くること
〇禮記に
己冠而字之
成人之道也
とあり大學
に入るもの
必字を命ず
菅原道真字
と菅三三善

と申し玉ふ。さて若君に字命くることは。東院にてし玉ふ。その式場に東の對を修はれたり。上達部殿上人珍しく不審しきことして。我も我もと集ひ参りたり。博士ごも。おひく。臆しぬべし。

(源) 命字式。憚る所なく。例あらんに任せて。幼子ありて。慰むるにふく。嚴重しく行へ。

と仰せ玉へば博士ごもは。強つれなく思ひ成して。家より外に借り求め

清行字を三
輝といふが
如し

たる装束ごもの。身体に打合はず頑固しき姿かごをも耻なく。面持聲使むべし。しく持成しつ。座に就き並びたる。作法より始め。見も知らぬ様ごも。若き君達は。え堪へず含笑まれぬ。されば物笑ふごすまじく。年老いて鎮まれる限を。ご撰り出して。瓶子ごも執らせ玉へれど。筋異かりける。儒道の交際にて。右大將民部卿ごの慎みてあふく。盃取るを。儒者ごもは。淺ましく咎め出つ。制す。

(儒) 凡垣下饗甚非常に候ひ玉ふ。かくばかり高官の分限をも知らずしてや。朝廷に奉仕り玉ふ。甚愚ふり。ふごいふに。人々皆え堪へず。綻びて笑ひぬれば。

垣下饗〇大
饗など人数
の外の人の
交りたるを
垣下の公達

といふ即儒
者の外の人
にて藝に預
るものど垣
下養とはい
ふなり
鳴高し〇鳴
とは凡て喧
しきまどを
さしていふ
風俗歌に鳴
高しや鳴高
し大宮近く
で鳴高しと
あり

(又) 鳴高し。鳴止まん。甚非常あり。座を引きて立ち玉びふん。

ふん。嚇し言ふもいとをかし。大學の道見習ひ玉はぬ人々は。珍しく興
ありと思ひ。はたこの道より出て立ち玉へる上達部ふんは。爲たり顔に打
合笑みふんしつ。源氏のかゝる方様を思し好みて。若君をば其道に入
れむと志し玉ふび。めでたきこと。限なく難有く思ひ申したり。儒者ど
もはいとく物言ふことを制す。無禮ふりとても咎む。わく喧しく罵り
居る顔ども。夜に入りては。却て今少し搦馬ふる火影に。猿樂がまし
く詫しげに。人様悪げふるふん様々にて。いと普通ふらず様異なる作法
ありけり。源氏は

(源) 博士ごものいごあれ。頑固ふる身にては。假粧してふわくに

作法に惑はふん。

と言ひて。御簾の内に隠れてを御覽下ける。員數定まれる式場に就き餘
りて。送り退出る大學の衆ごもあるを。君は聞召して。釣殿の方に召し
止めて。特に祿ふご賜はせけり。作法終て退出る博士才人ごも召して。
またく文作らせ玉ふ。上達部殿上人も。然るべき限をば皆留め侍はせ
玉ふ。博士の人々は四韻。只の人々は源氏を始め奉りて絶句作り玉ふ。興
ある題の文字撰りて。文章博士これを奉る。四月末にて短き頃の夜ふ
れば。明け終てそやびて詩を講ずる。左中弁講奉仕る。容貌いと清げふる

才人〇秀才
をいふ學位
など
四韻〇律詩
あり

窓の螢、枝の雪〇晋の車胤螢を聚めて書を讀む孫康雪に映して書を讀むよと晋書并に孫子世録に見えたり

若宮入大學

人の聲使ひ物々しく。神とびて讀み上げたる聲。いと面白し。この左中井は名望心特別なる博士ありけり。さて若君はかかる貴き家に生れて。世界の榮華にのみ戯れ玉ふべき御身を持ちて。窓の螢を睦び。枝の雪を馴し玉ふ志の勝れたる様を。万の事によそへ擬へて。心々に作り集めたる。句毎に面白く。唐土にも持て渡り傳へまほしげふる世の文どもあり。こそ聞き候ひぬ。其頃世に賞て動りける源氏の御詩は更あり。親めきあはれふる意こへ勝れたるを。涙落して誦し騒ぎしごと。女子のえ知らぬことをまねふは。悪きことを。うたてあれば。書き漏しつ。

若君は大學に入學といふことせさせ玉ひて。即この東院の内に御曹司

入學〇學令に凡學生在學各以長幼爲序初入學皆行束脩之禮於其師各布一端とあり

作りて。眞實やかに學才深き所に預け申し玉ひてぞ。學問せさせ玉ひける。かくて若君は。大宮の御許にもおどく。詣て玉はず。これは大宮晝夜慈愛みて。何時までも乳兒のやうにのみ待遇し申し玉へれば。彼許にてはえ物習ひ玉は。ごてかく静ふる所に籠め奉り玉へるふりけり。されど月に三度はかりを。かの御許に參り玉へ。ごぞ許し申し玉ひける。さて若君はつと籠り居玉ひて。悒鬱さまに。父殿をつらくも思しおはします。かく心を苦までも。高き位に昇り。世に用ゐらるゝ人はかくやはある。ご思ひ申し玉へ。若君は大方の人柄。眞實やかに仇めきたる所ふくおはすれば。いと能く念じて。いかて然るべき書ごも疾く讀み終て。交際も。世にも出

寮試〇大學
寮の試験な
り史記の難
問五條の中
三條に通す
るを及第と
なす

てたらんと思ひて。唯四五月の内に。史記ふといふ書物は読み終て玉ひ
てげり。源氏は今は寮試受けさせんとて。まづ我御前にて試験せさせ玉ふ。
例の右大將。左大弁。式部。大輔。左中弁ふごばかりして。御師の大内
記を召して。史記の難き巻々。寮試受けんに。博士の返と問ふべき節々
を引き出て。一わたり讀ませ奉り玉ふに。達らぬ隈なく。方々に通はし
讀み玉へる様。爪印残らず。淺ましきまで世にあり難ければ。然るべき天性
にこそおほしけれ。と誰もく涙落しぬ。右大將はまして。

(右) 故大臣尚世にたはせましかば。いかに喜び玉はん。

と申し出て涙を泣く。源氏も心強くもえ持成し玉はず。

(源) 親の子に劣ること頑固ふり。と人の上にて見聞き候ひしを。この

兒大人ふるに。親の立ち代り癡れ行くこと。吾はまた幾何ふらぬ齡ふ
びら。かゝる世にこそ候ひけれ。

ふと言ひて涙押拭ひ玉ふを見る御師大内記の心地。嬉しく面目ありと
思へり。大將。内記に盃させば。内記は甚く酔ひ癡れて居る顔つき。いと瘦
々あり。さてこの大内記は。世の儼物にて。學才の程よりは用ゐられず。すげ
ふくて身貧しくふんありけるを。源氏には御覽得る所ありて。かく取
別き召寄せたるふりけり。内記は身に餘るまで君の御愛顧を蒙りて。この
若君の御徳に。忽身を替へたると思へば。まして行く先は。立並ふべき人ふ

若君受察試

き出頭ぞあらんかし。

冠者君夕霧察試に大學に參り玉ふ日は。寮門に上達部の車ども數知らず集ひたり。大方世に殘りたる人あらざと見えたるに。二ふく持て侍われて。修飾はれ入り玉へる御様。實にかゝる學生の交際には。絶えず貴に美しげふり。例の賤き儒者どもの立ち交りつゝ來居たるに。若君學生の座の末に就き玉ひて。卒しと思すぞいと道理ふるや。此處にてもまた制し罵るものどもありて。目覺しけれど。若君は少しも臆せず。試験の書物讀み果て玉ひつ。昔覺えて大學の榮ゆる頃ふれば。上中下の人。吾もく。此道に志し集れば。いよく世中に學才ありて。はかどくとき人多くふんあ

文人擬生〇
文人は文章
生にて擬生
は擬文章生
として文章生
に准するも
のなと

りける。若君は文人擬生ふといふふる。こゝもより打始め迅速に爲果て玉へれば。偏に心に入れて師も弟子もいと勵まし玉ふ。源氏にも作文繁く。博士才人ども所得たり。凡て何事につけても。諸道の才の程顯る。世にふんありける。

弘徽殿〇右
大將の女な
り
兵部卿宮〇

かくて内裡には后立ち玉ふべきを。齋宮、女御をこそは。故太后宮薄雲も御後見と譲り申し玉ひしかば。源大臣も事託け玉ふ。源氏の打頻り皇后に居玉はんこと。世の人許し申さず。弘徽殿のまづ人より先に入内し玉ひしも皇后にふり玉ふべきにや。いかゞ。あご内々に弘徽殿齋宮の兩方に心寄せ申す人々。覺束ふがり申す。兵部卿宮と申し。今は式部

紫上の御父にて薄雲女院の御兄なり

梅壺女御立后

源内大臣任太政大臣藤右大將任内大臣

卿にて。この御時には。まして帝の外伯父にて。やむいふ御勢望にておはするが御女。本意ありて入内し玉へり。同事王女御にて伺候ひ玉ふを。これは同じくは當代の御外戚にて。親しくおはすべきにこそ。母后のねはしまさぬ御代りの後見に。事守せて似つかはしむるべく。いりいりに思ひ争ひたれど。尚梅壺女御。齋宮。皇后に立ち玉ひぬ。秋好中宮と申す。御幸福のわく引違ひ勝れ玉へりけるを。世人驚き申す。源氏は太政大臣に昇り玉ひて。右大將ぞ内大臣にありぬ。源氏は世の中の事ども。政ち玉ふべく。この内大臣に譲り申し玉ふ。内大臣は。人柄いと硬直に。さらしくして。心用ども賢くものとして。學問を取立てし

内府奉頭女君於大宮

玉ひければ。かの勲塞には負け玉ひしが。公事に賢く。腹々に御子ども十餘人成長びつものし玉ふも。次々に成り出てつ。源氏に劣らず榮えたる御家の内あり。女は弘徽殿女御と。今一所ぞおはしける。これは王孫腹にて。貴なる筋は弘徽殿にも劣るまじけれど。その母君。按察大納言の北方にありて。差對ひたる子どもの。數多くありければ。この女君をそれに任せて。繼父に譲らんこと。いとあへふし。とて内大臣は。母の許より取放ちて。祖母大宮にぞ預け申し玉へりける。さて父内府は。この女君を姉女御よりは。いとよく思ひ取し玉へれど。人品容貌といふ美しくぞおはしける。大宮の方にて。冠者君と一所に生ひ出て玉ひしが

冠者君夕霧
戀慕女君雲
井雁

と。各十歳に餘り玉ひて。後は居室別所にて。冠者、君とは睦しき中ふれど。男子には打解くまどきものふり。と父内府申し玉ひて。氣遠くふりにたるを。冠者、君は稚心地に。戀しく思ふことふきにしもあらねば。果ふき花紅葉につけても。遊の追従をも。懇懇に纏はれ歩きて。志を見せ申し玉へば。女君はいみじく思ひ交して。今も判然に相見ても耻ち申し玉はず。御後見の乳母ども。若き御心地ふれば何かは。年頃見馴れ玉へる御好偶を俄にもいかに持て離しはしたため申さん。と見るに。女君こそ何心もふく幼稚くおはすれど。男君こそは。さこそ物氣ふき程と見聞ゆれ。負ふ氣ふくいひふる御交情にありけん。さて互に餘所々に

ふりては。二人はこれをぞ静心ふく思ふべき。二人ともまた片生ふる手跡の。生ひ先美しきにて書き交し玉へる艶書どもの。心効くて。注意もせず。自然落散る折あるを。女君の方の女房どもは。ほのどく知れるもありけれど。かやうの事ありと。何かは誰にも申さん。見匿しつゝあるべし。

所々の大饗どもも果て。世の中の御急ぎもふく。長閑にふりぬる頃。時雨として萩の上風もたふらぬ夕暮に。大宮の御方に内大臣右大將參り玉ひて。女君渡し申し玉ひて。御琴ふと弾かせ奉り玉ふ。大宮は諸の音楽の上手にねはすれば。いづれも傳授へさせ玉ふ。

(内) 琵琶こそ婦人の弾きたるに。悪きやうふれど愛らしきものに候へ。

大饗○大臣
に任じたる
時行ふ饗應
なり源氏太
政大臣に任
じ右大將内
大臣に任し
ゝかバ所々
にて大饗行

ひしなり
歌の上風○
孟津抄秋の
なほ夕まぐ
れまろた
ならぬ歌の
上風歌の下
露
内大臣參大
宮

今の世に真誠しく傳へたる人。おどく候はずふりにたり。

と何の親王。これの源氏ふと敷へて。

(又) 婦人の中には。源大臣の山里に籠め置き玉へる明石上こそ。い
と上手と聞き候へ。音楽の上手の後裔には候へど。末葉にふりて。山賤に
て年經たる人。いひてさやうにも弾き勝れけん。かの大臣。かの琵琶のこ
こを。いと心特別にこそ思て言ふ折々候へ。別事よりは音楽の方の才
は。尚廣く合奏せ。彼此に通はし候ふこそ畏けれ。獨修にて上手とふ
りけんこそ珍しきことなれ。

ふと言ひて。やびて宮に琵琶を勸誘し申し玉へば。

(大) 柱さす。うめくしくふりにけりや。

と言へ。面白く弾き玉ふ。

(又) かの明石。上げ。幸福に打添へて。尚怪しうめてたかりける人ふり
や。甥源の世に持たらぬ女子を設けさせ奉りて。身に添へても養育ひ居
ならず。やむことふき紫。上に譲れる心掟。事も無かるべき人ふりこそ聞
き候ふ。

ふと。且御物語申し玉ふ。

(内) 婦人は唯心ばせよりこそ。世に用ぬらるるものに候ひけれ。
ふと人の上ふと言ひ出て。

(又) 女女御を。怪しうはあらず。何事も人に劣りては生ひ出でずかしと思ひ候ひしがど。思はぬ齋宮に壓されぬる宿世にぞ。世は思の外なるものと思ひ候ひぬる。さればこの女君をたに。いかに皇后にもして見成し候はん。春宮の御元服。只今のことにふりぬるを。と人知れず思ひ志したるを。かういふ明石上のやうなる幸福人の腹の。皇后後補こそまた生ひ續ぎぬれば。それに立ち雙はんに。まして競争ふ人あり難くや。

と打歎き玉へば。

(大) ふどむらうもあらん。此家に皇后にふるべき人の出てものし玉は

で止むやうあらざ。と故大臣の思ひ玉ひて女御弘徽殿の御事をも。居起

急ぎ玉ひしものを。今に世におはせまじかば。かく人に超らるゝこともあ

からんし。

ふど。此事にてぞ。源氏の大臣を恨めしげに思ひ申し玉へる。女君の有様のいと幼小に美しくして。琴の琴弾き玉ふを。御髪の下り場。髪つきふどの貴に艶めかしきを。内大臣。熟視り玉へば。女君耻らひて。少し側視玉へる傍目。面つき美しげにて。取由の手つき。いみじく造作りたるもの。心地するを。大宮も限なく愛憐と思したり。撥合ふと弾きすまびて。琴を押遣り玉ひつ。内大臣和琴引き寄せて。律の調のふか。今めきたるを。然る上

取由〇箏を
弾く時左の
手にて緒を
押ふるをい
ふ

手の亂れて撥い弾き玉へる。いと面白し。庭前の梢葉はろくくと残らぬに。老女達ふ。此處彼處の几帳の後に頭を集へたり。

(内) 風力蓋寡し。

と打誦して。

(又) 琴の手ふらね。怪しく物哀ふる夕か。尚あそばさるや。

と申して。秋風樂に撥き合せて。唱歌し玉へる聲。いと面白ければ。皆様々に。大臣をもいとつとくと思ひ申す程に。いと感添へんにやあらむ。冠者君參り玉へり。内大臣。

(内) さ此方に。

風力〇文
選豪士賦序
に落葉俟微
聽以傾風之
力蓋寡蓋嘗
遭雅門而泣
琴之感以未
とあり

と導きて。女君は几帳隔で入れ奉りぬ。

(又) おどく対面も賜はらぬわ。おどく御學問に。強に御心碎き玉ふ。才學の身に餘りたるも味氣ふさ業と。御父大臣も思し知れる。いふるを。かく控て申し玉ふ子細あらんとは。思ひ候ひながら。う學問にのみ籠りおはすことぞ心苦しく候ふ。

と申して。

(又) 時々他業し玉へ。笛の音にも古き道は傳はるものあり。

とて御笛奉り玉ふ。冠者君は。いと若くをわしげふる音に吹き立て。いみづく面白ければ。内府は御琴どもをば暫時中止て。拍子靜に打鳴ら

古き道〇移
風易俗莫善
於樂

萩が花摺〇
惟馬樂に衣
がへせんや
我さぬは野
原篠原萩が
花摺とあり

し

(内) 萩が花摺。

ふと語ひ玉ふ。

(又) 御父大臣も。わやうの御樂遊に心留め玉ひて。煩忙しき御政事どもをば。適れ玉ふありけり。實に味氣なき世に。心の行く業をしてこそ。過し候ひあまほしけれ。

ふと言ひて。御盃參り。御湯漬菓物ふと。誰もく食召す。女君は彼方に渡し奉りぬ。冠者君は強て氣遠く待し。御琴の音ばかりをも聽かせ奉らう。今はいふふく隔て申し玉ふを。近く奉仕る大宮の御方の老

内府分離若
君與女君

女

(老) いとはしきものありぬべき世なるにこそあれ。

と私語さけり。内府歸り出て玉ひぬるやうにて。忍びてある女房に物言ふこと立返りけるを。やをら掻い細りて出て玉ふ道に。女房も前のやうなる私語をするに。怪しくありて。御耳留めて聞き玉へば。吾身の上をぞいふ。

(女) 殿は自賢がり玉へど。人の親よ。おのつから愚痴あることこそ出て來べかめれ。子を知るは親に如かずといふは。空言ふめり。

ふと言ひてぞ。膝突きしるふ。内府は心中に淺ましくもあるひふさればよ。若君と女君との交情。兼て思ひ寄らぬにはあらねど。幼稚き年輩に打撓

内府聽後言

みて見捨て置きしが。世は憂きものにもありけるか。と氣色を明白に心得玉へど音もせいで出て玉ひぬ。御車の先駈追ふ聲の。嚴重しきにぞ女房

(女) 殿は。今こそ出てせ玉ひけれ。いづれの隈におはしましつらん。今さへかゝる仇事こそ止み玉はね。

と言ひ合へる。かの私語せし老女どもは。

(老) いと香ばしき香の。打よめき出るは。冠者、君のおはしましつるこそ思ひつれ。あふ氣味悪や。かの後言。殿や聞召しつらん。面倒ふる御心を。

と詫び合へり。さて内府は道すがら心中に。冠者、君を聲に取らんといと口惜しく悪しきことにはあらねど。餘り近き縁にて。珍しげなき配偶に。世の人と思ひ言ふべきこと。また源氏の強ひて齋院を取立て。女御を壓鎮め玉ふもつらき。この女君の邂逅に后に立つ折もやあらんこそ思ひつれ。いと妬くもあることかと思す。内府と源相國との御中の。大方は昔も今もいと善くおはしおがら。かゝる権柄の方にては。互に挑み申し玉ひし名残も思ひ出て心憂ければ。寢覺がらにて明し玉ふ。大宮も二人が氣色は御覽すらんものを。冠者、君は世にふく慈愛し玉ふ御孫にて。何事もそれに任せて見玉ふらん。と老女どもの言ひし氣色を。内府は目

覺しく妬しと思すに。御心動きて。少し雄抜しく角々とき御心には。鎮め難し。

二日ばかり置きて。内府はまた大宮の御方に參り玉へり。頻に參り玉ふ時は。宮もいと御心ゆき。嬉しきものに思したり。さて宮は尾額引き修ひ。美麗しき小袿ふと着添へ玉ひて。吾子ふがらも耻しげにおはする人様ふれば。内府は打解けずぞ見奉る。さて内府御氣色悪しくて。

内府以女君
事恨大宮

(内) 此處に待ふもはしたふく。人々いかに見候はん。心置かれにたり。某はわくしき身に候はねど。世に候はん限り。御目離れず御覽せられ。覺束ふき隔心ふくことぞ思ひ候へ。女君の善からぬことしてける

より。母上をも恨めしと思ひ申させつべきことの出て来るを。かくも思ひ候はざと且は思ひ候へど。尚鎮め難く覺え候ひふん。

と涙押拭ひ玉ふに。大宮は假粧し玉へる御顔の色違ひて。御目も大にふりぬ。

(大) いかにやうある事にてか。今更の齡の末に。心置きては思さるらん。

と申し玉ふも。あすびにいなほしけれが。

(内) 頼もしき御蔭に幼稚き者預け奉り置きて。自分は親ふがらも。却て幼稚くより見もつかず。女御ふどのまづ目に近き内裡の交際を。いはかしくしからぬを見歎き營みつ。この女君ばかりは。そりとも人に成

させ玉ひてん。と母上に預け奉りて。只管頼み候ひつるに。思はずふるこ
 との出て來候ひければ。いと口惜しくぞ候ふ。大臣も若君も。誠に天下
 無雙の有識にはものせらるめれど。親しき中にて。かく婚姻あるは。世
 人の聞き思ふ所も。あはしくときやうに候ふ。かゝる親しき中の嫁娶
 は。何ばかりの分際にもあらぬ交際にてまへ。善からぬことに爲候ふを。か
 の冠者、君の御爲にも。いと片輪ふるこごり。差離れたる外様よりも
 のするこそ。珍しくも今めかしう持成されて面白けれ。縁睦むらけがま
 とき様にて。御父大臣も聞き思ふ所候ひふん。然るにてもかゝる事ふん
 ある。と大臣に知らせ玉ひて。大臣の特更に持成し。少し道を立られ

てこそ。更めても參らさめ。幼稚き人々の心に任せて。宮の御覽に放ち
 けるを。心憂く思ひ候ふ。

と申し玉ふも。大宮は夢にも知り玉はぬことふれば。淺ましく思して。

(大) 實にかう言ふも道理ふれど。この二人が下の心ぞ。懸けても知り
 候はざりける。實にいと口惜しきことば。此方にこそまよして歎くべく候
 へ。せらるをこの母をば。この二人と諸共に罪を負せ玉ふは。恨めしきこと
 に候ふ。この女君預り奉りし時より。心特別に思ひ候ひて。其方に思
 し達らぬことをも。つとめて勝れたる様に。持成さんこそ。人知れず思
 ひ候へ。また幼稚きことを。孫を思ふ心の間に惑ひて。二人が吾心から。

婚姻を急ぎものせんとは。思ひ寄らぬこと候ふ。とても誰かはかゝる事は申しけん。善からぬ人の言につきて。きはしく思し言ふも。味氣なく。證據なき虚言にて。人の御名や汚れん。

と申し玉へば。

(内) 何の浮きたる言にか候はん。伺候ふ女房ごも。且は皆譏り笑ふ。かめるものをいと口惜しく心安からず思ひ候はるるも。

とて起ち玉ひぬ。かの事知れる老女達は。いみじく御氣の毒に思ふ。一夜の後言せし女房ごもは。まして心地も違ひて。何の爲にか。かゝる睦物語はしけん。と思ひ歎き合へり。女君は何心もあつておはするに。内府は差覗

き玉へれば。いと可愛げふる様をあはれに見玉ふ。

(内) 若き人といひながら。心幼くものし玉ひけるを知らず。いとかゝ人並々にもせんと思ひける吾こそ勝りて果ふけれ。

とて御乳母ごも罪おみ玉ふに。乳母ごもは。申上げん方もふし。

内府罰女君
乳母

(乳) かやうの事は。限なき聖帝の御愛女も。おのつから過つ例。昔物語にもあめれど。多くは氣色を知り傳ふる媒人ありてこそ。然るべきにはあらめ。この御兩人が問は。朝暮立交り玉ひて。年頃睦しくおはしましつるを。何かは幼稚き程を。宮の御持成より差過しても相隔て申せせん。と打解けて過しつるを。一昨年頃よりは。氣遠き御待遇にありて

候ふめるに。若き人とても好色たるものは。這ひ紛れふと世つぎまじき事もおはすべからるを。御兩人は。夢にも亂れたる所おはしませざるやうなれば。更に思ひ寄りけりけるまじ。

と己が同志語合ひて歎く。

(内) よし暫時かゝる事世に漏らさず。隠れあるまじき事なれば。心にかく心を遣りて。あらぬ虚言をい言ひ成されよ。女君をば今吾方に渡し奉りてん。宮の御心のいづつらきあり。其方達は。ありともいふれ。かこも思はざりけん。

乳母廻内府

と言へば。乳母どもは。大宮の御爲にはいごほしき中にも。吾等が爲には。い

と嬉しくも言ふ事思ひて。

(乳) あふいみじや。按察、大納言殿の北方に聞き玉はん。いづれへ思ひ候へば。めでたきにも冠者、君のやうなる平人の筋は。何の珍しき事にも思ひ懸け候はん。女御皇后にあり玉ふことを願ひ候へ。

ふと内府に詣ひ申す。女君はいと幼稚げなる様にて。父内府の。萬事に申し玉ふ事も。いひあるべきにもあらねば。内府は打泣きて。

(内) いかにしてか。この女君徒にあり玉ふまじき業はすべからん。

と忍びて乳母のさるべき同志に言ひて。大宮をばかり恨み申し玉ふ。宮は二人とも吾孫なれば。いづれもいづれも思す中にも。特に男君の御鍾愛は

勝れ玉ふにやあらん。男君の女君に思ひ寄りし心のありけるも。ふかく
 に嬉しく思はるるに。内府の情なく事の外のやうに思ひ言はるるを。ふどか
 さうもあるべき。元來内府はこの女君をば甚く思ひ捨て置き玉ひて。かく
 まて侍わんとも思ひ立ざりしを。我がかく持成し初めたればこそ。内府は
 俄に春宮へ參らせんことを思ひ懸けたためれ。この企望取放して平人に
 添ふ宿因あらば。この男君より外に勝るべき人やはある。男君の容貌有様
 より始めて。これに等しき人のあるべきかは。この男君の爲には。かの女君よ
 りも尚勝りて。皇女にても降し娶すべきこそ思へ。とて宮は吾男君を鍾
 愛しむ志の勝ればにや。内府を恨しく思ひ申し玉ふ。宮のかく思す御

心の中を見せ奉りたらば。内府はましていかにも恨み申し玉はん。

かく騒がるらんとも知らず。冠者、君は大宮に參り玉へり。これまでは一夜
 も人目繁くて。思ふことも女君にえ申さずふりにしければ。平生よりもあ
 はれに戀しく覺え玉ひて。かくは夕方にはしたるふるべし。大宮は例はい
 ひ知らず打笑みて待ち喜び玉ふを。今日は眞實なちて物語ふと申し玉
 ふ序に。

(大) 其方の御事により。内大臣の怨どてもものし玉ひにしければ。いと
 そいごはしき。其方はゆかしげなき事をとも思ひ初め玉ひて。この祖母
 に物思はせ玉ひつべきが心苦しき事なり。かくも申せど思へど。内大

大宮説諭冠
 者君夕霧

臣の恨み玉ふことも知り玉はでは。いかに思へば。かくは申し候ふ。
 と申し玉へば。冠者、君は心に懸れる。その筋ふれば。ふと思ひ寄りの。
 て面赤みて。

(冠) 何事にか候はん。大學寮に籠り候ひにし後。ともひくも人に交
 る折ふければ。内府は恨み玉ふべきことも候は下。とぞ思ひ候ふ。
 として。いと耻しと思へる氣色を。宮はあはれに氣の毒にて。

(大) よし今よりと入用意し玉へ。
 とばかりにて。他事に言ひ成し玉ひつ。冠者、君は女君の方へ艶書ふと通
 はんかの。いと難きおめりの思ふに。いと歎かし。宮より物ぶと參らすれ

冠者君竊訪
女君

雲井の雁も
 ○細流抄霧
 深き雲井の
 雁も吾がこ
 とや暗せず
 物の悲しう
 るらん

ど。更に食召とて。寢玉へるやうふれど。心も空にて。人々寢鎮まる程に。
 女君の方ふる中障子を引けど。例は特に鎖固めふともせぬを。今宵はつ
 と鎖して人の音もせず。いと心細く覺えて。障子に倚り懸りて居玉へる
 に。女君も目を覺して。風の音の。竹に待ち取られてうちそめくに。雁の
 鳴き渡る聲の。ほのかに聞ゆるに。稚き心地にも。とかく思ひ亂るにや。

(女) 雲井の雁も吾が如や。
 と獨言り玉ふ氣容。若く可愛げあり。冠者、君はいみじく心もこふけれ
 ば。

(夕) これ開かせ玉へ。小侍従は待ふや。

言へば。音もせず。この小侍従といへるは。女君の乳母子なり。女君は獨
 言を。男君の聞き玉ひけるも耻しめて。あいふく顔を夜具に引き入れ玉
 へ。あはれは知らぬにしもあらぬ憎きや。乳母達ふ。近く臥して打
 身動ぐも苦しければ。二人は互に音もせず。

(夕歌) 小夜中に友よびわたる雁音に。うたて吹き添ふ萩の上風

小夜中に〇
 深夜雁の音
 に萩の上風
 さへ吹き添
 ひて物哀し
 となり
 身に染まけ
 るかな〇細
 流抄吹きよ

身に染みけるか。と思ひ續けて。宮の御前に返りて歎きぢらふるも。御
 目覺めてや聽かせ玉ふらん。ご慎まししく身動き臥し玉へり。さてあいふく
 物耻しめて。吾曹司に早く起き出で。御艶文書き玉へれど。小侍従に
 もえ逢ひ玉はず。女君の方にもえ往かず。胸潰れて淺まししく覺え玉ふ。ま

れは身にも
 染みける萩
 風を色なき
 ものと思ひ
 けるかな
 女君雲井雁
 心情

男君は云々
 〇夕霧は當
 時十二歳に
 て女君より
 二歳程少き
 なり

た女君は人々に騒がれ玉ひしことばかり耻しめて。我身やいかゞあらん。
 人やいかゞ思はんとも深く思ひ入れず。美しく可愛げにて。女房ごもの
 吾が二人が事ふ。打語らふさまふ。聞きて。疎ましくも思ひ離れざり
 けり。またかく隔て騒がるべきこと。思はざりけるを。御後見ごもも。い
 みどく諫め申せば。艶文もえ通はし玉はず。成長びたる人は。かやうの間
 を。また相逢ふべき隙をも作り出づらんを。男君は女君より。今少し物果
 ふき年齢の程にて。かやうの事もえせで。唯いご口惜しことばかり思ふ。内府
 は過日のまにて。其後大宮へは参り玉はず。宮をいごつらしと思ひ申し
 玉ふ。それご北方には。かゝるごふんある。ご氣色も見せ玉はず。唯大方

いと機嫌むづかしき御氣色にて。

(内) 秋好、中宮の裝飾特別にて參り玉へるに。吾弘、徽殿、女御の世の中思ひ濕りてものし玉ふを。心苦しく胸痛きに。退出でせ奉りて。心安く打休息ませ奉らん。中宮には壓され玉へど。御寵愛はとすかに劣らず。上局につご伺候はせ玉ふて。帝の夜晝おはしますれば。侍ふ女房ども。心緩びせず。苦しくのみ打詫ふめるに。

と言ひて。俄に退出せ奉り玉ふ。帝は御暇も聽され難きを。内府は腹立て。帝はふふくに思召したるを。強て里邸に迎へ下し玉ふ。

内府退宮弘
徽殿女御

(内) 徒然に思されんを。妹君此方へ渡して。諸共に遊戯をもし玉へ。

妹君は宮に預け奉りたる。後安けれど。いと差過ぎて成長げたる男君立交りて。自然氣近きも似合はぬ程にふりにければ。此方に渡し申すべし。

内府強迎雲
井雁

と申して。女君をば俄に引取り申し玉ふ。大宮はいとあいふと思して。

(大) 獨ものしたる葵、上げ。亡ありて後。いと寂しく心細かりしに。嬉しくもこの女君を得て。生ける限りの侍き物と思ひて。明暮につけて。老のむづかしきも慰めんと思ひつれ。ふごしたる事あり。思の外へ隔心ありて思し成すも。いとつらくぞ候ふ。

と申し玉へば。内府打畏りて。

(内) 心に飽かず思ひ候ふことは。さやうにぞ思ひ候ふと申せばかりに候ふ。深く隔て思ひ奉ることはいかでか候はん。内裡に侍ふ女御が。世中恨めしげにて。此頃退出で候ふに。いと徒然に思ひて屈し候へば。氣の毒に見ゆるを。女君と諸共に。遊戯をもして慰めよと思ひ候ひてぞ。暫時彼方に渡し候ふにて。養育人とぞせ玉へるを。疎畧にはよも思ひ申とせざ。

と申し玉へば。大宮は御心に。内府はかく思し立ちにたれば。留め申すとも思し返すべき御心あらぬに。いと飽かず口惜しく思われて。

(大) 人の心こそ。憂きものにはあれ。かく幼き二人が心ごもに。我に

隔て、かやうの事思し寄り玉ふこと。疎ましかりけることよ。それも幼き程のことふれば又さもあるべきこといそあれ。たゞ内府の物を深く知り玉ひふがら。我を怨とて。かく女君をさへ引取り玉ふことこそ。心得がたけれ。彼處にては。此處より後安きことあらと。

冠者君參大
宮
左少將〇以
下皆内府の
子にて大宮

と打泣きつゝ言ふ。折しも冠者君參り玉へり。さて君はもし女君に逢ふべきいと、かの隙もやある。と此頃は繫くほのめき玉ふありけり。内府の御車のあれば。心の鬼にはしたふくて。やをら隠れて吾曹子に入り玉へり。内府の君達。左少將。少納言。兵衛。佐。侍従。大夫。ふといふも。皆大宮には參り集ひなれど。御簾の内は許し玉はず。左衛門。督。權中納言ふとい

の森なま

も。内府とは別腹ふれど。故父殿の御待遇のまゝに。今も大宮の方へ参り奉仕るごと。懇切ふれば。その御子ごも。様々参り玉へど。この冠者、君に似る容顔ふく見ゆ。されば大宮の御志も。他に擬ふものふく思したるを。唯この女君をぞ氣近く可愛きものに思し侍きて。御傍去らず。美しきものに思したりつるを。かくて引き別れ渡り玉ひふんが。いと物寂しと思す。内府は

(内) 今の間内裡に参り候ふて。夕方迎に参り候はん。

とて出て玉ひぬ。とて御心に。かくあり初めたる二人が事を。平穩に言ひ成して。さてもさてもあつちを思せし。尚いと心疾ましければ。男君

の官位ふれど。少し物々しくふりふんに。片輪ふらず見成して。その分際志操の深と浅との趣をも見定めて。とて女君を許すとも。今更なるやうに待遇として。さあめ。制し諫むとも。只今の程は。一所にては幼き心のまゝに。見苦しく。さあめ。宮もよも強に制し言ふ。さあめ。と思せば。女御の徒然に託けて。大宮にも北方にも。大様に言ひ成して。女君をば吾方に引き取り玉ふふりけり。宮よりは。女君の方へ御文あり。

(大) 父大臣こそ恨みもし玉はめ。君はとりとも志の程も知り玉ふらん。此方へ渡りて見え玉へ。

と申し玉へれば。女君はいと美しげに引き修ひて渡り玉へり。年は十四に

大宮召雲井
雁膳別

ふんおはしける。片成に見え玉へ。いと大人めかしく。志めやかに美しき
様し玉へり。

(大) 其方をば傍避らず。明暮の翫弄ものに思ひ申しつるを。かく手
放しては。寂しくもあらべきか。残り少き齡の程にて。御有様を見果
つまじきこと。命をこそ惜しく思ひつれ。今更に吾を見捨て。移ひ
玉ふ所や何邊からんと思へば。いと哀あり。

とて泣き玉ふ。女君は。彼君の事より。かゝることをおしりける。と耻しき
ことを思へば。顔も撞げ玉はで。唯泣きにのみ泣き玉ふ。冠者 君の御乳母。
宰相 君出て来て。

(宰) 姫君をば。吾君と同一君こそ頼み申させつれ。口惜しくも彼
方へ渡らせ玉ふことよ。たゞひ殿は別所へ思し成ることおはしますことよ。
必とやうに思し靡かせ玉ふ。

ふと諫め申せば。女君はいよく耻しと思して。物もえ言はず。宮は乳
母に。

(大) いでむつかしきことを申され。人の御宿因々々の。いと定め
難し。

か言ふ。

(宰) いでや。宮には。吾君を物氣ふこと侮り申させ玉ふに候ふめり。

乳母宰相君
蝶介夕霧雲
并雁

さりとも實に吾君や。他人に劣り申させ玉ふ。と聞召し合せよ。

と生心疾しきまに言ふ。冠者君物の後に入り居て。女君を見玉ふに。人の咎めんに等閑の時こそ苦しかりけれ。いと心細くて。涙押拭ひつゝおはする氣色を宰相いと氣の毒に見て。大宮にさかしく申し謀りて。夕間暮の人のまよひに。二人の君に對面せさせ奉れり。互に物耻しく胸潰れて。物も言はず泣き玉ふ。

(夕) 内大臣の御心の。いとつらければ。さばあれ思ひ止みふんと思へど。戀しうねはせんこそわりあひるべけれ。何ぞて少し間際ありぬべかりつる日頃餘所に相隔てつらん。

と言ふ様も。いと若く哀げふれば。

(女) 妾もさういふはあらめ。

と言ふ。

(冠) 戀しうねは思ひふんや。

と言へば。女君少し首肯き玉ふ様も。幼稚げふり。御燈參り。内府退出で玉ふ氣容。言甚く追ひ騷ぐ御先駈の聲に。女房達。

(女房) そとや

おど怖ら騷げは。女君はいと恐しと思して慄ひ玉ふ。男君はとも騷びれば。只管若しくもふく思ひ成りて。女君をば放し申し玉はず。女君の

乳母参りて求め奉るに。この氣色を見て。あふ心づきあや。實に宮には知
り玉はぬ。いかに思ふに。いかに思ふに。

(乳) いでや憂かりけ。世かふ。殿の思し言ふこと。更にも聞かず。大
納言殿察にも。いかに聞かせ玉はん。源氏の御子のめてたき御勢望ふ
りとも。姫君の婚姻の始に。六位の契縁は

と咳くも微聞ゆ。この乳母。たゞ二人の居る屏風の後に尋ね来て歎くふ
りけり。男君は我をば位ふこと。はしたふむふりけりと思すに。世中恨め
しければ。あはれも少し醒る心地して。目覺し。

紅の〇袖の

(夕) かれ聞き玉へ。紅の涙に深き袖の色を。あふみどり言ひ絞

るべき。耻しや。

と言へば。女君。

淺緑も涙の
紅に染めて
色深しとて
六位の耻し
さをよめて
いへり
いろ／＼に
〇かくさま
／＼に人に
言ひ駭かる
／＼はいかに
ありそめた
る中の契ず
どの意なり
雲井雁移内
府家

(女) いろ／＼に身の憂きは。この知らるは。いかに染めける中の衣ぞ。
と言ひ果てぬに。内府内に入り玉へり。女君はわりふくて。吾方に渡りぬ。
男君は。獨跡に立ち留りたる心地も。いと人様悪く胸塞りて。吾方に
入り臥し玉ひぬ。御車三輛ばかりにて。女君は内府の方へ。忍やかに急ぎ
出で玉ふ氣容を。男君は聞くも静心ふければ。宮の御前より参り玉へど
あれど。寝たる様にて動きもし玉はず。涙のみ止らねば。歎き明して。霜
のいと白きに。急ぎ歸り玉ふ。泣き腫したる目つきも。人に見えんが耻し

きに。大宮また召し纏すべかめれば。心安き所にて。かくは急ぎ出て玉ふりけり。道の程。人遣りあらず心細く思ひ續くるに。空の景色も甚く曇りて。また暗かりけり。

(夕) 霜氷うたて結べる明ぐれの。空わきくらしふる涙かふ。

霜氷〇空も
我袖も同じ
襟に涙にか
さくらすど
なま
源氏奉五節
五節〇五節
とは毎年十
一月舞姫を
奉る節會な

大殿源氏には。今年五節を奉り玉ふ。何ばかりの御急ぎあらねど。童女の装束ふご節日近くふりぬて。急ぎ爲させ玉ふ。東院には。曉參の夜の人々。装束せさせ玉ふ。殿には大方の用意の事ども。中宮よりも童女下使の料までえあらで奉り玉へり。過ぎにし年。女院の涼間にて。五節ふご停りしが。寂しかりし積も取添へ。人の心も。平生よりも花やかに思ふべ

り大嘗會は
五人新嘗會
は四人毎年
行はるゝは
即新嘗會に
て公卿より
二人殿上人
受領より二
人を奉る此
處公卿二人
は按察大納
言左衛督殿
上人受領二
人は良清惟
光なりさて
惟光のは源

かめる年ふれば。所々五節の用意相挑みて。いこいみどく萬事を盡し玉ふ聞あり。その五節の舞姫。按察大納言。左衛門督。良清今は近江守にて左中辨ふるを奉りける。さて舞姫は。皆禁中に留めさせ玉ひて。宮仕すべく救命ふる年ふれば。娘を各奉り玉ふ。殿の舞姫は。惟光朝臣の攝津守にて左京大夫兼ねたる娘。容貌ふごいと美しげふる聞あるを召す。惟光迷惑に思ひたれど。人々。

人(々) 大納言の外腹の娘を奉らるふるに。朝臣の愛娘。出し立てたらん。何の耻かあるべき。

と諫むれば。惟光詫びて。同どくは其儘宮仕せとすべく思ひ捉てたり。舞

氏の方にて
 したて、奉
 るなり花鳥
 餘情に十一
 月中五日舞
 姫参入即帳
 臺出御寅日
 御前試卯日
 童女御覽辰
 日節會舞姫
 進舞とわ
 り
 源氏召舞姫
 爲五節温習

の演習ふごは。里にていと能く爲立て。傳ふご親しく身に添ふべきは。いみじく撰り整へて。其日の夕告げて参らせたり。殿にも御方々の童女下使の勝れたるを。と御覽一比べ撰り出てらる。心地ごもは。分際々々につけていと面起しげふり。帝の御前に召して御覽せん下稽古に。殿の御前を渡らせて。と定め玉ふ。撰び玉ふ中には。いづれも棄つべくもあらす。こりごとくふる童女の様体容貌を。思し煩ひて。今一所の料を。これより更に奉らばや。ふご煩ひ玉ふ。容貌は暫差置き。唯持成用意によりて。撰り入りける。若君大學、君夕女君、雲井雁の事により。胸のみ塞りて。物ふごも見入れられず。甚く屈して。書物も讀まで詠め臥し玉へるを。

大學君竊視
 舞姫

もし心もや慰む。と立出て紛れ歩き玉ふ様容貌は。めてなく美しげにて。静やかに艶めき玉へれば。若き女房ふごは。いと美しと見奉る。この男君。紫上の御方には。御簾の前には。物近くも寄り待し玉はず。父殿の御心掟。いかに思すにかありけん。疎々しければ。女房達ふごも。随ひて氣遠さを今日は物の紛れに入り立ち玉へるふめり。舞姫侍き下して。妻戸の間に屏風ふご建て。假初の修飾あるに。男君やをら寄りて覗き玉へば。惟光の女惱ましげにて。物に副ひ伏したり。唯かの女君の程に見えて。今少し丈高く。様体ふごの。事更び美しき所は勝りてとへ見ゆ。夜の聞ければ。委細には見えぬ。程の能く似て。いと思ひ出でらる。様

りの舞姫

天にます〇舞姫も我領する心を違ふてなどな豊岡姫の宮人とは天人にて天津乙女になすらへ

に。心の移るにはおけれど。普通にもあらて。衣の裾を引き鳴らし玉ふ。女は何心もおく奇怪と思ふに。

(夕歌) 天にます豊岡姫の宮人も。吾こころぞす注連を忘るふ。 瑞

離の

と言ふぞ。突然ありける。若く美しき聲ふれど。誰ともえ思ひ成されず。生むつかしきに。假粧し添ふとて。騒ぎつる後見ども。近く寄りて人騒がしくふれば。男君は口惜しくて立去り玉ひぬ。六位の心疾ましければ。内裡へ参り玉ふこともせず。物憂かり玉ふを。五節に託けて。直衣ふご様變れる色聴されて。参内し玉ふ。幼稚に清ふる物ふがら。またきに

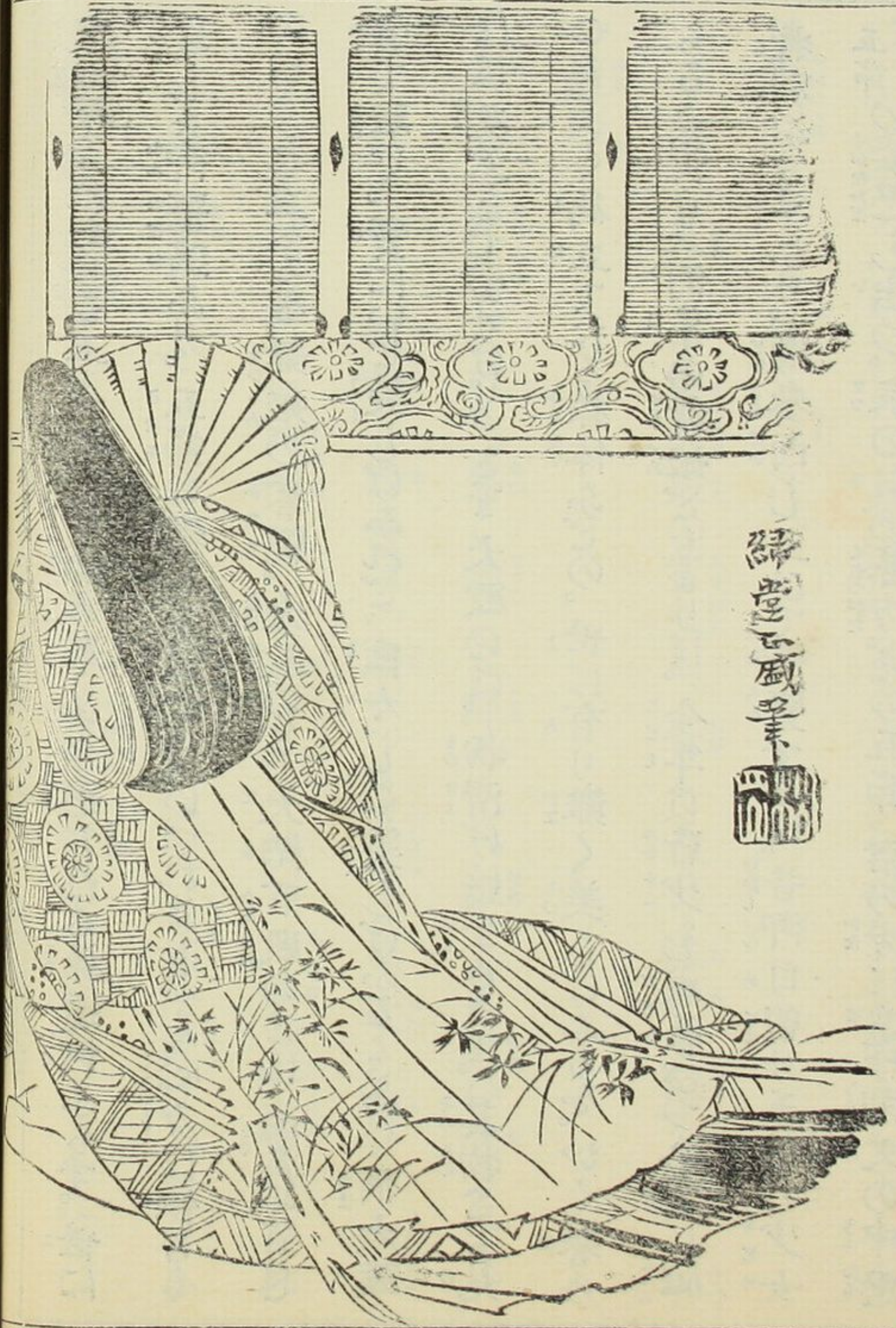
はあらず天にます豊岡姫の神のまてぐらとあり

瑞籬の〇河海抄、乙女子が袖ふる山のまつがきを久しき世より思ひろめてさ。大學君聴色参内

成長てこれありき玉ふ。帝より始め奉りて。思したる様通例あらず。世に珍しき御寵遇あり。五節の参入る儀式は。いづれともおく心々に似るものふくし玉へるを。舞姫の容貌。大殿のご。大納言殿のごは。勝れたりご賞て騒ぐ。實にいご美しげふれど。巨々しく美しげふるごは。猶大殿には及ぶまじかりけり。さて大殿のは。物清げに今めきて。其物とも見ゆまじく爲立てたる様体ふごの。世に有り難く美しげふるを。かく譽めらるふめり。例年の舞姫ごもよりは。今年は皆少し成長びつ。實に心特別ふる年ふり。殿参内し玉ひて御覽するに。昔御目留り玉ひし少女五節の姿思し出つ。辰の日の暮方。その五節、君の方に遣す御文の中思

五節舞圖

○乙女



歸堂五風筆
印

百六十八

通照

天津風

雲の通路

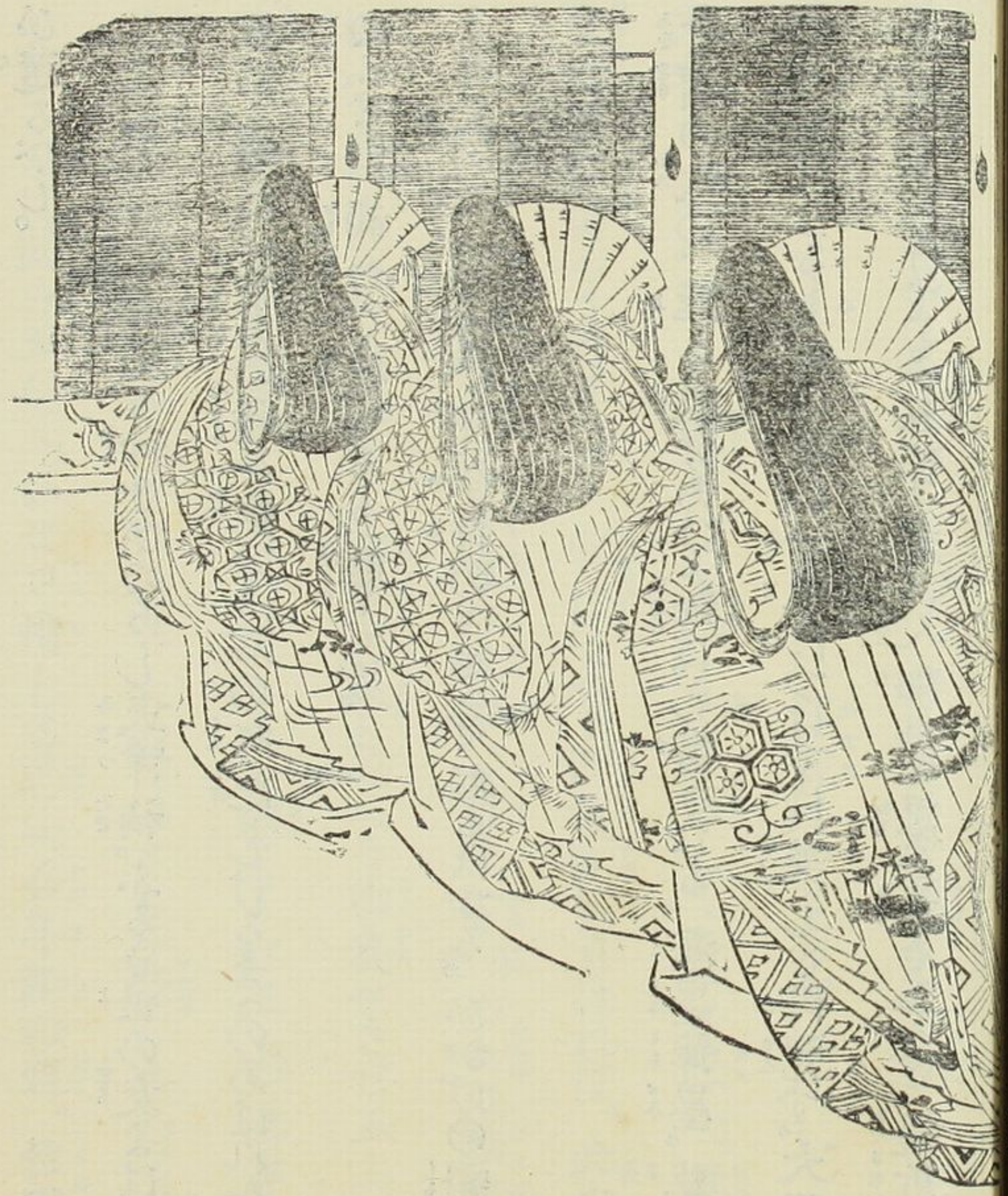
吹き

閉ちよ

乙女の姿

あはし

留めむ



○乙女

百六十九

昔御目留り

玉ひし少女

〇太宰大貳

の女なり

源氏消息五

節君

乙女兒も〇

吾も年經ぬ

れば其方も

年ふりしな

らんどなり

かけていへ

は〇君に逢

ひ奉りしも

思へば今日

てりけわに

ひ遣るべし。

(源歌)

乙女兒も神さびぬらし天津袖。ふるき世の友よはひ經ねれば。

五節、君は。年月の積を數へて。君の打思しけるまゝのあはれを。忍び玉は

ぬこの。面白く覺ゆるも。耻しや。

(五歌)

かけていへば今日のこころをわはゆる。ひかげの霜の袖に解け

しも。

青摺の紙の。能く取りあへて紛はし書きたる。濃墨薄墨。草書がちに打

混せ亂れたるも。君は人の分限につけては。美しと御覽ず。大學、君も人の

目留るにつけても。五節、君に人知れず思ひ歩き玉へど。邊近くだに寄せ

るとなり日
影に蘿をう
けたり舞姫
は蘿の蔓を
頭にかくる
など
舞姫退出

唐崎の祓除
云々〇五節
の前後に齋
する例なり

す。いとけぞやかに待遇したれば。男君はまた雅く物慎ましき程の心に

は。歎かしくて止みぬ。惟光の女は。容貌はいと男君の心につきて。かの女

君雲井、雁の。つらき慰めにも代り見る業してんやと思ふ。舞姫はやがて

皆内裏に留めさせ玉ひて。宮仕すべき御氣色ありければ。此度は退出て

させて近江守良の女は。唐崎の祓除。攝津守惟光の女は難波の祓除。と

挑みて退出でぬ。大納言も事更に參らすべき由奏せさせ玉ふ。左衛門督

其人ふらぬを奉りて咎ありけれど。それも留めさせ玉ふ。攝津守のば。典

侍の関きたるに。と申させたれば。大殿は。せもや勞らましと思したるを。

大學、君は聞き玉ひて。いと口惜しと思ふ。吾年齢の程。位階ふど。かく

大學君召惟
光子問其妹
舞姫事

物げふからずば。戀ひ見てまほしものを。此方に思ふ心ありとだに知られずして已みふんことよ。と故意のことにはあらねど。雲井君の事に打添へて。涙催まる、折々あり。この女の兄の童殿上するが。常にこの大學君の方に參り奉仕るを。例よりも懐しく語らひ玉ひて。

(夕) 妹の五節は。何時か内裡には參る。

と問ひ玉ふ

(兄) 今年こそは聞き候へ。

と申す。

(夕) 顔のいと美かりしかば。すがるにこそ戀しけれ。汝が常に見るら

んも羨まじきを。吾にまた見せてんや。

と言へば。

(兄) いひでかきは候はん。心に任せてもえ見候はず。男兄弟とて。近くも寄せ候はねば。いひでか君達には御覽せさせん。

と申す。

(夕) さらば文をだに傳へ玉へ。

とて。女への御文賜へり。兄は後々かやうのことは思むものを。と迷惑がれど。男君は迫めて言へば。氣の毒にて持て往ぬ。女は年の程よりは。洒落てやありけん。男君の御文を。美しと見けり。縁の薄葉の好まじき重なる

大學君遣文
惟光女

に手跡はまたいと若けれど。生ひ先見えて。いと美しげに。

(夕歌) ひかげにも著かりけりや乙女子が。天の羽袖にかけし心は。

とあり。兄妹にて見る程に。父主ふと寄り來たり。二人は恐しく呆れて。

え引き隠せず。

(惟) 何ぞの文ぞ。

とて手に取るに。二人は顔赤みて居たり。父は善からぬ業しけりと憎めば。兄遁げて往くを。呼び寄せて。

(又) 誰がのぞ

と問へば。

ひかけにも
○舞の日に
我心を懸け
たるを忘れ
りやとなり

(兄) 殿の冠者、君の。志かど言ひて賜へる。

と言へば。父は餘波ふく打笑みて。

(惟) いかに美しき君の御洒落心ふらん。汝等は同年ふれど。いふかひ

ふく果あかるふり。

ふと。男君を譽めて。妻にも見す。

(惟) この君達の。吾娘を。少し人数にも思しぬべからまじければ。禁中

の宮仕よりは。若君に奉りてまじし。殿の御心掟を見るに。一旦見初め

玉ひてん人を。御心には忘れ玉ふまじきこと。いと頼もしけれ。されば

已も明石の人道の例にもふらまじし。

源氏預大學
君於花散里

ふ言へど。妻も兄も事むつかしきに。皆急ぎ立ちにけり。大學君はこの女
へ艶書をだいた遣り玉はず。これより立ち勝る雲井君の方のこのみ。心
に懸りて程経るまに。わりなく戀しき影面に。また相見てやと思ふより
外のこのふし。大宮の御許へもあいなく心憂くて參り玉はず。女君のおは
せし方。年頃遊び馴れし所ばかり思ひ出てること勝れば。三條の里
邸へあかしく憂く覺え玉ひつ。また東院に籠り居玉へり。父殿は
この男君をかの西對ふる花散里の方に預け玉ひける。

(源) 大宮の御齒の。残り少げふるを。此世におはせすふりふん後も。
かくこの兒の幻稚き程より。見馴はして後見おぼせ。

濱木綿〇河
海抄に三熊
野の浦の濱
木綿百重な
る心は思へ

ご申し玉へば。花散里は唯君の言ふまの御心にて。懐しく愛憐に思ひ
扱ひ奉り玉ふ。さて大學君は。花散里を微にふご見奉るにも。御心に容
親の美しからずもおはしけるのみ。かゝる人をも父君は思ひ捨て玉はごり
けり。ふご吾が強につらく思ふ雲井雁の容親を心に懸け比べて。戀しご
思ふも味氣ふしや。それご心ばへのかやうに柔和らん人をこそ相思はめ
ご思ふ。また差對ひては。御容親の見るかひあからんも。いとほしげふり。か
くて年經玉ひにけれど。父君のとやうある御容親。御心ご見玉ふて。濱
木綿ばかりの隔差隠しつ。ふにくれご待遇し紛はし玉ふめるも宜ふり
けり。ご思ふ心の中ご耻しかりける。大宮は出家して。形親殊異におは

とたゝに違
はぬかもと
あり濱水綿
は葉の薄く
重なるもの
なれば薄く
隔つる意に
いふな里
大宮爲大學
君調元日装
束

しませぬ。またいと清らにおはし。此處にも彼處にも。容貌美きものとは
かり目馴れ玉へるを。花散里は元より勝れどりける御容貌の稍盛過ぎた
る心地して身も瘦々に。御髪寡ふるふどが。かく誇らはしきふりけり。

年の暮には。正月の御装束ふど。大宮は唯この大學、君一人の御事を。
他に混るゝふどく急ぎ玉ふ。幾襲も清らに仕立て玉へるを。男君は見るも
物憂くばかり覺ゆれば。

(夕) 元日ふどには。必しも内裡に參るまじう思ひ候ふに。何にかく
装束を急がせ玉ふらん。

と申し玉へば。

(大) ふどてか然もあらん。老い類れたらん人のやうにも言ふことかあ。
と言ふに。

(夕) また老いねど。何とふく類れたる心地ぞするよ。

と獨言ぢて。打涙催み居玉へり。宮は御心の中に。彼女君のことを思ふ
あらん。といと氣の毒にて打潜み玉ひぬ。

(大) 男子は口惜しき分際の人にてさへ。心を高くこそ使ふかれ。かく
餘り締めやかにふものし玉ひそ。何もかう詠めむちに思ひ入れ玉ふべき。
忌々しうぞ覺ゆる。

と言ふ。

(タ) 何れはさやうに思ひ入れ候はん。唯六位ふご人の輕蔑り候ふめれば。これも暫時のいふらば思ひ候へど。内裡へ參るも何ふかく物憂く候ふ。故祖父大臣世におはしませませしひば。戯にても人には輕蔑られ候はせらまじ。父君物隔ての親におはすれど。いと氣遠く差放ちて思したれば。おはしませ邊に容易くも參り馴れ候はず。唯東院にてばかりぞ御前近く侍ふ。西對の御方里花散ころ。兒をば愛憐にものし玉へ。親今一所おはしませませしひば。何事をか思ひ候はませ。とて涙の落つるを。紛らはし玉へる氣色。いみじくあはれふるに。宮はいかゞおろ〜ん泣き玉ひて。

(大) 母親に後るゝ人は。分際々々につけてもばかりこそ哀ふれど。自然宿因々々に入と成り立ちぬれば。疎畧に思ふ人もふき業あるを。何事も思ひ入れぬ様にてものし玉へ。故大臣今暫だに世におはせませしひ。限なき蔭には今の父大臣も同ト事と頼み申せど。思ふに協はぬことの多かるか。内大臣の心はへも。普通の人にはあらず。と世人も賞て言ふふれども。其心はへの昔に變ることのみ勝り行くに。命長をも恨めしく。生ひ先遠き其方をへ。いとわかにてもかく世を思ひおめり玉へれば。いとぞ万事恨めしき世ある。いと泣き居玉ふ。

良房の大臣云々○良房は忠仁公なり白馬と覽るの例物に見えず但宇治關白彼の例を以て之を覽しといへば其例ありしと見えたり忠仁公は准三宮なれば諸院宮の例によりて白馬を引

元日にも大殿は御外出ふければ。長閑やかにておはします。良房の大臣と申しけるが。古の例に擬へて。白馬の節會の日は。内裡の儀式うつして。昔の例よりも事添へて。嚴重しき御有様あり。

二月の廿餘日に。帝朱雀院に朝覲あり。花盛はまたしき程ふれど三月は故女院の御忌月あり。早く開けたる櫻の色も。いと面白ければ。院にも御用意特別に修ひ磨かせ玉ひ。行幸に奉仕り玉ふ親王公卿達より始め。心遣ひし玉へり。人々皆青色に櫻重を着たり。帝は赤色の御衣着玉へり。召ありて源大臣參り玉ふ。帝と同じ赤色を着玉へれば。いよ一物と輝きて見えまがはせ玉ふ。人々の装束用意。平常よりも異ふ

かせしなるべし
帝朝覲朱雀院
赤色の御衣
○西宮記に
内宴之日、
臣下皆翹
塵、主上服
御赤色而
第一上卿
服同色之
袍是又例
也、とあり
○放鳥の試

り。院もいと清らに壯び勝らせ玉ふて。御様用意ふ。艶めきたる方にすくませ玉へり。今日は故意との文人も召さず。唯その才賢しと聞えたる學生十人を召す。式部省の試験の題を擬へて。勅題賜ふ。臆病の者どもは。四邊畏きに物も覺えず。繫がぬ舟に乗りて。池に放れ出で。いと爲方ふげふり。日漸々下りて。樂の舟ども漕ぎ舞ひて。調子ども奏する程の。山風の響き。面白く吹き合せたるに。大學、君は苦しき學問の道からず。かく音楽ばかりふごしても。交らひ遊びぬべきものを。と世の中恨めしく覺え玉ひけり。春鶯囀舞ふ程に。昔の花の宴の程思し出で。院、上。
(院) またまがはかりのいと見てんや。

とて池の中
島に放ちて
詩を作らす
るなり

鶯の〇今日
の春鶯轉は
かはらねど
席はうはれ
りどて桐壺
帝のましま
さぬをいへ
り

九重を〇仙
洞に居ては
今日の行幸
にて始て春

と宣はするにつけて。源大臣當時のこと哀に思し續けらる。舞ひ終つる程に。大臣。院に御盃奉り玉ふ。

(源歌) 鶯の轉づる春は昔にて。むつれし花の蔭ぞかはれる。

院上。

(院歌) 九重を霞へたつる住家にも。春を告げくる鶯の聲。

帥宮と申し。今は兵部卿にて。今上に御盃奉り玉ふ。

(兵歌) 古を吹き傳へたる笛竹の。轉づる鳥の音をへかはらぬ。

鮮明に奏し成し玉へる用意。時にめてたし。帝御盃採らせ玉ひて。

(帝歌) 鶯の昔を戀ひて轉づるは。木傳ふ花の色やあせたる。

を知るとな

帥宮〇源氏
君の弟なりし
古の〇唐堯
よりの禮樂
を其ま、傳
へて今にか
はらずとて
御代を祝し
たるなり春
鶯轉は唐樂
なり
鶯の〇吾御
代の何事も
古の帝王に

と勅はする御有様。こよなく由緒々々しくおはします。これは御私様に

内々のことふれば。多人にも巡盃せずやふりにけん。また書き落としてける

にやあらん。樂所遠くて覺束ふければ。御前に御琴も召す。兵部卿、宮

は琵琶。内大臣は和琴。箏の御琴は院の御前に參りて。琴は例の源大

臣賜り玉ふ。さるいみじき上手の勝れたる御手遣ごも盡し玉へるは。譬

へん方ふし。唱歌の殿上人數多伺候ふ。あふ尊遊びて。月に櫻人。月朧

朦に差出て。面白き程に。中島の邊に。此處彼處篝火ごも燈として。御

遊は止みぬ。夜更けぬれど。帝は弘徽殿太后、宮おはします方を。避きて

訪ひ申させ玉はごらんも情ふければ。還幸の序に渡らせ玉ふ。源大臣も諸

及はぬ由と
卑下して勅
へるなり」
あな尊云々
〇安名尊
櫻人と共に
催馬樂の曲
なり
帝親弘徽殿
太后

共に伺候ひ玉ふ。太后待ち悦び玉ひて。御對面あり。いと甚く年經り玉
ひにける御氣容にも。帝は故母后薄雲を思ひ出て申し玉ひて。かく世に長
くおはします類もおはしけるものを。と口惜しく思す。

(太后) 今ばかり經りぬる齡に萬の事忘れ候ひにけるを。いと辱く此
方に渡りおはしましたるにぞ。更に昔の御世のこと思ひ出でられ候ふ。
と打泣き玉ふ。

(帝) 然るべき御蔭ごもに。後れ候ひて後。春の差別も思ひ分き候はぬ
を。今日は慰め候ひぬる。またく御訪ひ申し奉らん。

と申し玉ふ。大臣も然るべき様に聞き玉ひて。

(源) 今日序に候へば。其内事更に伺候ひて。

ふと申し玉ふ。長閑やかあらで還幸らせ玉ふ盛響にも。太后の尚胸打搔
ぎて。いかに思し出るらん。源氏の世を保ち玉ふべき宿因は。終に打消せ
れぬものにはあらざりけれ。と古を悔え思す。朧月夜、尚侍も。長閑やかに思
し出るに。哀あること多かり。源氏とは今もさるべき折。風の序にも文ごも
ほのめき通はし玉ふと絶えざるべし。太后は朝廷に奏せさせ玉ふことあ
る時々ぞ。御給の年官年壽。ふにくれのこと觸れつ。御心に協はぬ時
ぞ。命長くてもかゝる世の季を見ること。昔に取り返さばはしく。萬事を
思し憤りける。老い持ておはするまに。心悪をも勝りて。院も御機嫌を

進士〇普通の家より出たる學士を進士といひ儒者の家より出たるを秀才といふ大學君得爵任侍從

源氏營造六條院前坊〇六條

取り苦しく。堪へ難くぞ思ひ申し玉ひける。かくて大學君その日の文美しく作り玉ひて。進士に成り玉ひぬ。學生の中には。年積れる賢きものごもを撰らせ玉ひしがごも。及第の人纒に三人ぞありける。さて君は秋の司召に。爵得て侍從にあり玉ひぬ。雲井、雁の御事心に忘るゝ時ふけれど。父内府の切に守り申し玉ふもつらければ。わりあくてふご對面もし玉はず。御消息ばかり然りぬべき便に申し玉ひて。二人互に心苦しき御交情あり。

大殿。閑靜ふる御住居を。同じくは廣く見所ありて。此處彼處にて覺束ふき山里人ふごをも集へ住ませんの御心にて。六條京極邊に前坊の

御息所の夫宮なり
式部卿宮〇
紫上の父宮
なり
紫上欲行父宮五十賀
御年滿〇五十の賀を手滿の賀といふ

古宮の邊を。四町を占めて營造らせ玉ふ。式部卿宮。明年ぞ五十にあり玉ふべきを。紫上は御賀の事思し儲くるに。大臣は兼ねて相善からぬ御間ふれど。こればかりは實に過し難きごもふりと思して。せやうの御急ぎも。同じくは珍ならん御家居にてせん。と造作を急がせ玉ふ。年返りては。まとしてこの御急ぎのこと。御年滿のこと。樂人舞人の定ふごを。御心に入れて營み玉ふ。經佛法事の日の裝束。祿ごもふごをぞ。紫上は急がせ玉ひける。花散里の御方にも。別けて用意し玉ふごもあり。さて紫上と花散里とは。御交際いごみやびかに申し交してぞ過し玉ひける。世の中響き動れる御急ぎふるを。式部卿宮にも聞召して。源氏は

かの女御の云々〇乙に中宮を立

年頃世の中には仁怒き御心ふれど。宮の方をば、生憎に情なく。事に觸れてはしたふめ。宮人をも更に勞り玉はず。憂はしきこのみ多かるに。宮はつらしと思ひ置き玉ふこととはありけめ。いと口惜しくも辛くも思しけるを。源氏のかく數多關係ひ玉へる人々多かる中に。紫上のみ取別きたる御寵愛勝れて。世に心にくめてたき事に思ひ侍われ玉へる御宿因をぞ。宮は我家までは匂ひ來れど。面目に思すに。またかく此世に餘るまで。御賀の事響かし營み玉ふは。覺えぬ齡の末の盛にもありぬべきかふと喜び玉ふを。北方は心ゆかず妬しとばかり思したり。かの女御の御交際の程ふごにも。大臣の御用意なきやうふるを。いよく恨めしと思

つる時源氏例に違ひて齋宮女御を立て式部卿宮の女御と執り持たざることあり六條院成

ひ染み玉へるふるべし。八月には六條院造り果て、移徙り玉ふ。坤の町は中宮好の御故宮ふれば。中宮ぞやびておはしますべし。巽の町は殿并に紫上おはすべき所ふり。良の町は花散里。乾の町は明石上の御方。と思し捉てさせ玉へり。元ありける池山をも。便あしき所ふるをば崩し替へて。水の趣山の捉を改めて。御方々の志願の心はへを。様々に作らせ玉へり。南東は山高く。春の花の木。數を盡して植ゑ。池の様面白く勝れて。御前近き前栽に。五葉。紅梅。櫻。藤。山吹。岩躑躅ふごやうの。春の翫弄を。故意とは植ゑて。秋の前栽をば。むらく。微に混せたり。中宮の御町をば。舊の山に紅葉の色濃かるべき植木どもを栽ゑ。泉水遠く澄ま

苦膳〇牡丹
なりといふ
説あり

し。遣水の音勝るべき岩を立て、作り加へ。瀧落して。秋の野を遙に作り
たる。其頃に合ひて。盛に咲き亂れたり。嵯峨の大井の邊の野山。無徳
に消壓せられたる秋ふり。北の東は。涼しげふる泉ありて。夏の蔭にふれり。
御前近き前栽。異竹。下風涼しむるべく。木高き森のやうふる木ども。樹
深く面白く。山里めきて。卯花垣根。事更に爲渡して。昔覺ゆる花橋。
雙麥。蕃薇。苦膳ふごやうの。花の種々を栽ゑて。春秋の木草。その中に
打混せたり。東面は別けて馬場殿造り。埒結ひて。五月の御遊所にて。
水の邊に菖蒲栽ゑ茂らせて。向に御廐して。世にふき上馬どもを調へ立
てさせ玉へり。西の町は北面築き分けて。御藏町あり。隔ての垣に。松の

紫上花散里
移新殿

木繁く。雪を弄ばん便によせたり。冬の初。朝霜の結ぶべき菊の籬。吾は
顔ふる柞原。をきく名も知らぬ深山木どもの。木深きふごを移し植ゑ
たり。彼岸の頃に移徙り玉ふ。皆一度に定めさせ玉ひしがご。さては騷
がしきやうふりて。中宮は少し延べさせ玉ふ。例の大様に氣色ばまぬ花
散里ぞ。其夜紫、上に添ひて移るひ玉ふ。紫、上の方の春の御修飾は。此
頃に合はれど。いご心特別あり。さて紫、上げ御車十五輛。御先驅。四
位五位がらにて。六位の殿上人ふごは。然るべき限りを撰らせ玉へり。御
儀式も世の誹謗もやと思して。いご程にはあらず。事省き玉へ
れば。何事もおそろしく。厳重しきごはふし。今一方の花散里の

中宮大學君
移新殿

御氣色も、をどく、敗し玉はで。侍從、君、大學君、夕霧、漆ひて、其方は持て侍
 き玉へば。實にかうもあるべきことありけり。見えたり。女房の曹司町ども。
 宛々の細分ぞ。大方の事よりもめてたかりける。五六日過ぎて。中宮新
 殿に退出でさせ玉ふ。御儀式凡て事省き玉ふといへ。いと所狭き御様
 あり。御幸福の勝れ玉へりけるをばさるものにて。御有様の心にくく重かに
 おはしませば。世に重く思はれ玉へること。勝れておはしませける。この
 町々の中の隔には。屏ども廊ぶとを。どかく往き通はして。何處も氣近
 く面白きあはひに爲成し玉へり。九月にふれば。紅葉むらくく色着きて。
 中宮の御前えも言はず面白し。風打吹きたる夕暮に。御匣の蓋に。色

中宮消息紫
-上

心から〇春
 を心に染め
 玉ふとも紅
 葉の面白き
 をも御覽せ
 よどなり
 風に散る〇

々の花紅葉をこき混せて。中宮より紫、上に奉らせ玉へり。大やある女
 童の濃き袖。紫莞の織物重ねて。赤朽葉の羅の干衫。いと甚く馴れて
 廊渡殿の反橋を渡りて參る。端正しき氣色ふれど。女童の美しきをぞ。
 思し捨てどりける。然る貴き所に待ひ馴れたれば。持成有様。外には似ず
 好ましく美し。御消息には。

(秋歌) 心から春待つ園は吾宿の。紅葉を風のつてにだに見よ。
 ごあり。若き女房達。御使者を持てはやす様ども。いとをかし。御返事は。い
 の御匣の蓋に。苔敷き岩ぶと置きて。五葉の枝に。

(紫歌)

風に散る紅葉は、輕し春の色を。岩根の松にかけたこそ見め。

紅葉ははり
なくて岩根
の松の春色
に及はずど
なり

と書き附け玉へり。この岩根の松も。巨細に見れば。えふらぬ作事どもあり
けり。かく取り敢へず思ひ寄り玉へる由緒々々しきふとを。中宮は面白
と御覽す。御前ふる女房達も賞て合へり。大臣は紫上に。

(源)

この紅葉の御消息。いと妬げふめり。春の花盛に。この御返答は
申し玉へ。この頃紅葉を言ひ腐せんは。龍田姫の思はんこともあるを。暫
時差退きて。花の蔭に立隠れてこそ。強き言は出て来め。

明石上移新
殿

と申し玉ふも。いと若やかに盡せぬ御有様の。見所多かるに。いと思ふ様
ふる御住居にて。申し通はし玉ふ。明石上の方は。かく方々の御移徙
定まりて。数ふらぬ人はいつとふく紛らはせんと思して。十月にぞ新殿に

は渡りける。御修飾。事の有様も。花散里ふごにも劣らずして渡し玉
姫君の御爲を思せば。大方の作法も。差別こふあひらず。いと物々しく
遇せ玉へり。

第廿二帖 玉葛

此帖は玉葛君の生立より二十歳まで即源氏卅五歳の冬までなり

右近仕二條院

年月隔たりぬれど。源氏は御心に飽かざりし夕顔をつめ忘れ玉はず。心々ふる人の有様どもを見重ね玉ふにつけても。尚世にあらましかば。と哀に口惜しくのみ思し出づ。女房右近は何の人数ふらねど。尚その形見と見玉ひて。可愛きものに思したれば。老女達の數に奉仕り馴れたり。須磨の御徒居の程に。紫上の御方に昏人々申し渡し玉ひし程より。右近も其方に伺候ふ。紫上は右近を。心善く搔い潜めたるものに思したれど。右近は心の中には。故君顔今にばし玉はましかば。明石の御方はかりの。御寵愛には劣り玉はせらままし。殿の。さこそ深き御志あかりける

吾名漏すな
○引歌紅葉
賀の帖に出
つ
夕顔乳母夫
為太宰少貳
夕顔遺孤玉
葛君下筑紫

だに。賤し溢さず取り締め玉ふ御心長をふりければ。紫、上のやうなるやむ
ごふさ列にいそはあらざらめぞ。この新殿移徙の敷の中には。交らひ玉
ひふまし。と思ふに。飽かず悲しくぞ思ひける。かの西の京に留りし若君
をへ行邊も知らず。偏に物を思ひ包み。また今更にかひふさごよりて
吾名漏すふご口禁め玉ひしを憚り申して。尋ね音づれても申せざる程に。
故君の御乳母の夫。大宰少貳にありて。筑紫へ赴きければ。乳母も諸共
に下りにけり。かの姫君の四歳にふる年ぞ。筑紫へは往きける。乳母ごもは。
母君の行邊を知らんご。万の神佛に祈り申して。夜晝泣き戀ひて。然るべ
き所々を尋ね申しけれど。終にえ聞き出でず。さらばいかはせん。若君を

だにこそは御形見に見奉らめ。賤しき身に添へ奉りて。遙ある所におはせ
ん。この悲しきごふさを。父君頭中にはのめかさんと思ひけれど。然るべき
便もふさ程に。母君のおはしけん方も知らず。とて父君の尋ね問ひ玉は
いかゞ答へ申さん。また姫君のよくも父君を見馴れ玉はぬに。其許に留め
奉り玉はんも後めたかるべし。はた父君のかくご知りながら。率て下りねご
許し玉ふさにもあらず。ふご乳母を始め各自語ひ合せて。姫君のいと美
しく只今から氣高く清らふる御様を。特別ふる修飾ふさ船に載せて漕
ぎ出る程は。いと哀にぞ覺えける。姫君は幼き心地に。母君を忘れず。折々
に。母君の御許へ往くのひ。問ひ玉ふにつけて。乳母ごもは涙絶ゆる時ふ

返る波○引
歌類磨の帖
に出つ

舟人も○吾
は故君を慕
ひ奉るに舟

く。少貳の女どもも。思ひ焦るゝを。船路にては。泣くこと忌々し。と且は
諫めけり。海上面白き所々を見つゝ。故君の若うおはせしものを。かゝる海
路をも見せ奉るものにもがふ。世におはせまじければ。我等はかく遠き所には
下らざらまし。と京の方を思ひ遣らるゝに。返る波も羨しく心細きに。舟
子どもの荒々しき聲にて。

(舟) 心哀しくも遠く來にゆるかふ。

と謠ふを聞くまに。女は姉妹二人差對ひて泣きけり。

(姉歌) 舟人も誰を戀ふとか大島の。うらがふしげに聲のなきも。

(妹歌) 來し方も行邊も知らぬ沖に出て。あはれいつくに君を戀ふ

らん。

人はまた誰
を戀ふなら
んどあり大
島は筑前國
なり
來し方も○
方角も知ら
ぬ沖に出て
ゝ行邊も知
らぬ故君を
戀ふとなり
鄙の別○引
歌類磨の帖
に出つ
金岬○葛葉
集に千早振

鄙の別に。各自心を遣りていひける。金岬を過ぎて。吾は忘れずふ。常
住の言種にありて。筑紫に到り着きては。まして都の遙なる程を思ひ遣り
て少貳夫婦どもは戀ひ泣きて。この若君を待きものにて明し暮す。乳母
は夕顔ノ君の夢ふごいと邂逅に見え玉ふ時ふごもあり。かの某院にて
見えたる同一様ふる妖女ふご。其身に添ひて見え玉へば。覺ての名残も
心地悪しく惱みふごしければ。君にはいよく世に亡くふり玉ひにける
ふめり。と思ひ成るも。いみじくばかり悲しけり。
少貳任畢て。上洛りふんとするに。路も遙けき程に。特別なる勢ふきもの

うねのミさ
きを過ぐれ
とも吾は忘
れずしらの
すべ神とあ
り金岬は筑
前國なり
少貳任畢

は。どかく猶豫ひつ。早速にも出て立たぬ間に。少貳重き病にかかりて死
ふんとする心地にも。この姫君の十歳ばかりにもふり玉へる様の。忌々し
きまで美しげなるを見奉りて。

(少) 吾へ君を打捨て奉りて。いかふる様に流落れ玉はんとすらん。
賤しき所に生ひ出て玉ふも辱く思ひ申せど。いつか京に率て奉りて。
父君其他然るべき人々にも知らせ奉らんにも。都は廣き所ふればいと
心安かるべしと思ひ急ぎつるを。この筑紫に居あむらに命堪へずふり
るいふも。

後めたがるを。男子三人あるに。

少貳遺言其
子歸洛玉葛

少貳卒

(少) 唯この姫君を。京に率て奉るべきことを思へよ。我身の孝養をば
ふ思ひぞ。

遺言しける。さてこの姫君をば中將の御子とは。館の人にも知らせず。
唯乳母の孫として侍くべき縁故あるとぞ言ひ成しければ。人に見せず限
ふく侍き申す程に。少貳俄に卒せぬれば。乳母は哀に心細くも。唯歸洛
の用意をすれど。この少貳の中惡しかりける國の人多くあふして。うごま
かづまに怖ら憚りて。乳母は我にもあらず年を過すに。姫君成長び玉ふ
まに。母君よりも勝りて清らに。父君の系をへ加はればにやあらん。品高
く美しげあり。心はせ大様に。かくあらまほしくものし玉ふ。好色たる田

令人どもは聞き附けつ。心懸け消息したがるものいと多かり。乳母は忌々しく目覺しくおぼゆれば。誰にもく聞き入れず。

(乳) 容貌ふどは。そつもありぬべけれど。いみじき片輪の少女あれば。人にも見せて尻にあして。吾一代の限りは。かくて持たらん。

と方々へ言ひ散したれば。田舎人どもは。

(田) 故少貳の孫は。片輪にぞあふる。可惜ものを。

と言ふ。乳母聞くも忌々しく。

(乳) いかにまににして。都に率て奉りて。父君に知らせ奉らん。姫君の幼稚さ程を。父君はいと可愛しと思ひ申し玉へりしかば。今まで見馴れ

奉らずとも。疎略には思ひ捨て申し玉は。

少貳男女縁附鏡紫

年星〇當年の星を祭るあり一説に又年三として年に三度精進するを毛いふそれは

ふと言ひ歎く。さて姫君の幸福を。神佛に願を立てて念じける。かくて吾女ども。男子ども。所につけたる所縁出て来て住み着にけり。心の中には。歸洛のこゝを急ぎ思へど。かく子供ども此地にて在り附きぬれば。京の事は彌遠ぞかるやうに隔たり行く。姫君は物思し知るまに。世をいと憂きものに思して。年星ふど爲玉ふ。廿歳許にふり玉ふまに。生ひ調りて。田舎にはいと惜しくめてたし。この住む所は。肥前國とぞいひける。其邊にも。いとよか由緒ある人は。まづこの少貳の孫の有様を聞き傳へて片輪と言ひ成しても。尚絶えず音信来るも。いといみじく耳喧しきまで

正五九の三月なり
 少貳卒後一家移肥前國肥前國○少貳は太宰府の官人なれば是まては筑前に居りしなり
 大夫監○太宰大監なり相當六位なれと一旦從五位下に叙しぬれば太

ぞありける。大夫、監とて。肥後國に族廣くて。彼處につけては名望ありて。勢嚴めしき武士ありけり。猛惡き心の中に。いさゝか好色たる心の混りて。容貌ある女を集めて見んと思ひける。この女君を聞き附けて。

(監) いみじき片輪ありとも。我は人に見隠し持たらん。

いと懇切に言ひ懸るを。乳母は氣味惡く思ひて

(乳) 孫はいかにわることを聞かで。尻にふりふんとす。

と言はせたりければ。監はいよく危がりて押してこの肥前國に越え來ぬ。かの三人の子息を呼び取りて。

(監) かの女。我思ふ様にありふは。其方達も。同一心に勢を交すべき。

大夫監とはいふなり
 大夫監請求玉葛
 少貳子二人
 從大夫監

語ふに。第二人は從ひにけり。さて二人は。

(二人) 最初こそ。暫時は姫君の爲には。似氣なく哀と思ひ申しけれ。よく思へば各吾身の寄所と頼むに。監はいと頼もしき人あり。この監に惡しくせられては。この近き世界には。いかに居住れふんや。姫君は貴き人の御系といふとも。親君に數まへられ奉らで世に知られず。何のひかはあらん。この監のかく懇切に思ひ申し玉へること。今は御幸福なれ。然るべき宿因にてこそは。かゝる世界にも今までなほしましけめ。遁げ隠れ玉ふとも。何のこれに増すことかはあらん。監の負けぬ魂に怒りふは。爲難き仇事とも爲てん。

少貳嫡子豊
後介奉父遺
言

と言ひ威せば。母乳母ふごは。いごいみどと聞きて。太郎ふる豊後、介ぞ
(豊) それは尚いと退々しく。あるまじきことふり。故父少貳の遺言
ひしごもあり。ごかく構へて京に上し奉りてん。

太夫監消息
玉葛

と言ふ。姉妹ごもも泣き惑ひて。御母君の世にかひあくて。流落へ玉ひて。
行邊とへ知らぬ代りに。この姫君を入並々にして見奉らんごご思ふに。
さる恐しき武士の中に交り玉ひふんごご。ご思ひ歎くをも知らず。監は
我身はいご名望高き身と思ひて。豊書ふご書きて。姫君の許に越す。手
跡ふご拙げふく書きて。唐織の色紙を香ばしき香入れ染めつ。面白く
書きたりご思ひたる詞ぞ。いと濁たりける。自分もこの家の次郎を語り取

太夫監自來
少貳家

秋ならねど
も〇引歌簿
雲の帖に出
つ

りて。二人打連れて。少貳の家に來たり。年三十歳ばかりふる男の。丈高
く物々しく太りて醜げふけれど。思ひ成し疎ましく荒らわふる舉動。見
るも忌々しく覺ゆ。色合心よげに。聲甚く枯れて囁り居たり。懸想人は
夜に隠れたるを。こ夜這ごはいひけれ。様替へたる春の夕暮ふり。秋ならね
ごもあやしかりけりご見ゆ。少貳方にては。大夫の心を破らごて。乳母
出て逢ふ。

乳母親面會
太夫監

(監) 故少貳殿の。いと情び。さらしくものし玉ひしを。いかでか
相語らひ申さんご思ひ候ひしがごも。然る志をも見せ申さず候ひし程
に。いと悲しく亡れ玉ひしを。其代りに姫君に奉仕るべくご志を勵

まして。今日はいと只管に強ひて伺候ひつる。このおはしますらん姫君。系統特別に承れば。いと辱ふし。唯拙者等が私の君と思ひ申して。頂にぞ捧げ奉るべき。祖母殿乳も溢々におはしますげあるは。我方に善いらぬ妻ども數多持ちて候ふを。聞召し疎むらん。そりども彼等を同輩には爲候ひふんや。吾君をば本臺の位よりは賤し奉らざるものをや。おどいと善き様に言ひ續く。乳母は。

(乳) いかに仰に從はせらん。それぞかく言ふを。いと幸福ありと思ひ候へど孫女は宿世拙き人によ候はん。思ひ憚ること候ふて。自分はいかでの人に御覽せられん。ご人知れず。歎き候めれば。某も氣の毒に見煩

ひ候ひぬる。

と言ふ。

(監) 更にお思し憚りぞ。天下に目潰れ足折れ玉へりとも拙者は必直し止め奉りてん。國內の神佛は。己にぞ靡き玉へる。

ふと誇り居たり。其日はかりに迎へ奉らんといふに。

(乳) 當月は季の終あり

ふと田合びたることを言ひ適る。監下りて往く際に。歌詠まほしかりければ。稍久しく思ひ廻して。

(監歌) 君にもとし心違は松浦ふる。鏡の神をかけて盟はん。この和

乳母依違監
請求
君にもし○
其方に違心
なりらんこ
と鏡明神に
盟誓せんと

なり鏡明神
は肥前松浦
郡に鎮座す

歌は随分善く奉仕りたりとぞ思ひ候ふ。

と打笑みたるも世馴れず初々しや。乳母は我にもあらず呆れたれば返歌
すべくも思はれぬ。娘ごもに詠ますれば。

(娘) 私はまして物も覺えず。

とて同じく呆れ居たれば。母はいと久しくふるに。思ひ煩ひて心に打思
ひけるまゝに。

(乳歌) 年を経て祈る心の違ひおぼ。鏡の神をつらしごとや見ん。

と慄はし出でたるを。

(監) いでやはいかに思さるゝ。

年を経て○
姫君の幸福
を祈るに其
心を違ひ玉
は、神を恨

むとて監に
獲られざら
んとを願ひ
たるなり

姉妹説明母
返歌

と聞き答めて。不意に寄り來たる氣容に。乳母はおびえて。顔色もふくふ
りぬ。娘達は。物も覺えずとはいへど。心強く笑ひて。

(娘) かの姫君の。様異にもとし玉ふを。其方の心の契約に引き違ひ
候へば。つらく思はれんを。尚老耄たる祖母君の。神かけて申し僻め玉
ふふめりや。

と返歌の心を説き聞かすを。

(監) おん。おん。おん。

と願きて。

(又) 面白き御口調いふ。拙者等田舎びたりといふ名こそ候へ。口惜

しき民には候はず。都の人々も何ばかりあらん。何事も皆知りて候ふ。ふと思し侮りぞ

とて。又歌詠まんと思へれども。出来ぬにやありけん。往ぬめり。乳母は次郎がかの監に語ひ取られたるも。いと恐しく心憂くて。兄の豊後介に上洛のいこと責むれば。

(豊) いかにばとやう奉仕るべからん。相談すべき人もなし。たまぐの兄弟は。某の。この監に同心せぬとて。中違ひにたり。この監に仇まれては。いさゝかの身動きせんも。所狭くあるべき。さるを今更上洛りては却て姫君の爲に悪しき目をや見ん。

乳母請求上
洛於豊後介

豊後介奉玉
葛竊脱國

と思ひ煩ひにたれど。姫君の。人知れず覺えたる様の。いと氣の毒にて。生きたらうと思ひ沈み玉へるも。道理と覺ゆれば。何より大事と思ひ構へて。出て立つ。妹達も。年頃經ぬる寄邊を棄て。この御供に出て立つ。末の妹の貴君といひしは今は兵部君といふぞ。姫君に添ひて。夜遁げ出て、船に乗りける。大夫、監は。四月の廿日の程に。日撰りて迎に來んとする程に。姫君はわくて急ぎ遁ぐるふりけり。姉御許は。縁附きたる先にて。子ぶと多くふりて。え出て立たず。互に別惜みて。相見んことの難きを思ふに。妹は年經つる故郷とて。特に見捨て難きこともなし。唯松浦の宮の前の汀渚と。かの姉御許に別るをぞ。顧盼せられて悲しかりけり。とて兵部、

君は。

浮島を○我

はいつくま

ても浮きた

る身とて島

の名をうり

ていへり

行先も○行

末とても風

波に任せて

浮きたる身

なりとなり

響灘○響灘

は袖中抄に

は播磨とし

三光院御説

名寄には備

前とせり

憂さよとに

○胸の響に

却て灘響も

覺えず過く

るどなり

河尻○攝津

國なり

(兵歌)

浮島を漕ぎ離れても行方やいづく泊りと知らずもあるか。

(姫歌)

行先も見えぬ浪路に舟出して。風に任する身を浮きたれ。

とて。いと果なき心地して俯伏に伏し玉へり。かく遁げぬる由を。自然世

に言ひ出て傳へば。監が負けぬ魂にて追ひ來ふと思ふに。心も惑ひて。輕

舸といひて。様異に構へたる船に乗りければ。思ふ方の順風とへ進みて。危

きまて走り上りぬ。響灘もふたらかに過ぎぬ。海賊の舟にやあらん。小き舟

の飛ぶやうにて來るふといふものあり。海賊の無情ふらんよりは。かの恐し

き人の追ひ來るものと思ふに爲方なし。

(姫歌) 憂さよとに胸のみ騒ぐ響には。ひびきの灘も障らざりけり。

河尻といふ所に近づきぬといふにぞ。少し生き出る心地する。例の舟子ど

も。

(舟) 唐泊より河尻押す程は。

と謠ふ聲の情あさも哀に聲や。豊後、介も哀に懐しく謠ひすとびて。

(豊) いと愛しき妻子も打忘れぬ。

とて妻子のことを思へば。實にぞ皆田舎に打捨てける。いかふかりぬらん。は

かどしき身の補助と思ふ郎等どもは。皆此方へ率て來にけり。監の我

を惡しと思ひて。妻子ともを追ひ惑はして。いかに爲成すらん。と思ふに。曩には心稚くも願せて出にけるかふ。と今は少し心の留りてぞ。淺まきさいを思ひ續くるに。心弱く打歎かれぬ。

(豊) 胡地妻兒虚弃捐

と誦するを。兵部君聞きて。實に怪しの業や。年頃従ひ來つる夫の心にも。かく俄に其心に違ひて遁げ出でにしを。いかに思ふらん。と様々思ひ續ける。京に上りても。其所と往き着くべき故郷もふし。知れる人といひ寄るべき頼もしき人も覺えず。唯この姫君の一人の御爲により。許多の年月住み馴れつる世界を離れて。浮べる波風に漂ひて思ひ廻す方ふし。この

胡地云々〇
白氏文集に
原源郷井不
得見胡地妻
兒虚弃捐あり

豊後介入京
家九條

姫君をも。何の心當もふく。いかに爲成し奉らんとするぞ。と呆れて覺ゆれど。いかにばせんとて。まづ急ぎ京に入りぬ。九條に。昔乳母の相知れける人の残りたるを。訪ひ出て。其宿を占め置きて。都の内といへども。はかばかしき人の住みたる邊にもあらず。賤しき市女商人の中にて。悒鬱せく世の中を思ひつ。秋にも成り行くまに。來し方行く先悲しきこと多かり。豊後介といふ頼もしき男も。唯水鳥の陸に惑へる心地して。徒然に習はぬ有様の便ふさを思ふに。築紫に還らんにもばしたふく。心稚く出て立ちにけるを思ふに。従ひ來りし郎等ども。類に觸れて遁げ去り。元の國に歸り散りぬ。都にもかくて住み着くべきやうもなきを。母乳

母明暮歎さいとしがれば。豊後介は。

(豊) 何か。この身はいと安く候ふ。姫君一人の御身に替へ奉りて何地もく罷り失せふんに答あるまじ。我等いみじき勢にふりても。我君を監のやうふる田舎武士に放流かし奉りては。何心地かせまじ。

と語り慰めて。

豊後介勸玉
葛新請神佛
八幡宮○男
山八幡宮な
り筑前の箱
崎社も八幡
なり又肥前

(又) 神佛こそは。然るべき方にも姫君を導き奉り玉はめ。近き所に八幡の宮と申すは。筑紫にても参り祈り申し玉ひし。松浦箱崎同社ふり。かの國を離れ玉ふとも。多くの願立て申し玉ひき。今無事に都に還りて。かくぞ御靈驗を得て罷り上洛りたる。早く御禮申し玉へ。

の松浦社は
神功皇后の
御鏡を祀れ
ばつまり八
幡と一体を
り
玉葛參詣八
幡宮
五師○寺社
に五師として
五人の僧あ
りこれは八
幡宮の五師
なり
唐土にさへ
○唐僖宗の

とて八幡に參詣でさせ奉る。其邊知れる人に言ひ尋ねて。五師とて。早く親少貳の語りひし大徳の残れるを呼び寄せて。八幡に詣でさせ奉る。それにつぎては。佛の御中には。初瀬ぞ。日の本の内には新ふる靈驗現し玉ふ。と唐土にさへ聞え渡りてあるふるを。まして姫君は遠き國の境に年經玉ふといへども。我國の内にはこそあれ。されば吾君をばまして恵み玉ひてん。とてまた初瀬に出し奉る。故意と徒歩より行くこと定めたり。女君は習はぬ心地にいと詫しく苦しけれど。人のいふまに。物も覺えず歩み玉ふ。とて心中に。いかふる罪深き身にて。かゝる世に流落ふらん。吾親世に亡くふり玉へりとも。我を哀れと思せば。おはすらん所に誘ひ玉へ。もし世におは

右馬頭夫人
長谷寺の觀
音に祈請し
て顔の醜を
治せしよと
縁起に見え
たり
王葛參詣長
谷寺
椿市〇大和
國にて長谷
寺の近所な
り

せば御顔見せ玉へ。と佛を念じつ。早く離れ奉りて。ありけん母君の容貌
をさへ覺えれば。唯親おはせまじければ。こばかり悲しさを歎き渡り玉へるに。
かく差當りて身のわりふさまに。取り返しいみ下う哀しく覺えつ。辛
うして四日といふ己の時ばかりに。生ける心地もせで。漸椿市といふ所に
往き着き玉へり。歩むともふく。とわくつくるひたれど。足の裏動かれず詫
しければ。爲方ふくて。この椿市に休息み玉ふ。この頼もし人ふる豊後、
介と。弓矢持たる人二人。さては下の者童ふと三四人。女房達ある限
り三人。壺装束して。下婢めくもの。老いたる下女二人ばかりとぞある。い
と微に忍びたり。御燈明のことふと。此處にて用意ふとする程に。日暮れ

ぬ。家主人の法師。人々宿し奉らんとする所に出で来て。

(法) 何人のものし玉ふぞ。他の御容を宿し奉らんとせしものを。わ
る賤しき女どもの。心に任せて。ふとわくは宿し玉ふぞ。

右近詣初瀬

と腹立つを。女君どもは目覺しく聞か程に。實にその容ふる人々來ぬ。
これも皆徒歩よりふるべし。上等しき女房二人附き從へる下人どもぞ男
女數多わめる。馬四五匹引かせて。いみじく忍び癩したれど。清げふる男
どもふともあり。法師はその人々を。強ひて此處に宿さまほしくして。心
に任せて頭搔き歩く。女君どもは。わくを見るに氣の毒ふれど。また宿替へ
んも。様悪しく煩はしければ。人々は奥に入り外に隠しふとして。後の

衆は片方に寄りぬ。軟障ふと引隔て、女君はおはします。この後より来る人も、耻しげもふし。甚く掻い潜めて、互に心遣ひしたり。さてこの人は、かの世と共に久しく戀ひ泣く女房右近ふりけり。年月に添へてはしたふき交際の。つきふく成り行く身を思ひ悩みて。この長谷寺にぞ。度々参詣でける。常に参詣に馴れたれば。容易く構へたりけれど。徒歩より歩み堪へ難くて。物に倚り伏したるに。かの豊後介。隣の軟障の下に寄り来て。参りしものふるべし。折敷手つから執りて。

(豊) これは姫君の御前に進らせ玉へ。御臺ふと打具はで。いと傍痛し。

といふを聞くに。右近。吾同輩の人にはあらどと思ひて。物の狭間より覗けば。この男の顔。兼て見し心地す。それぞ誰とほえ覺えず。いと若かりし程を見しに。今は太り黒みて瘦れたれば。多くの年経たる目には。ふとも見分かわふりけり。

(豊) 三條よ。此處に召す。

と呼ばれて出て来る女を見れば。また見し人ふり。故夕顔君の御方に。下人ふれど。久しく奉仕り馴れて。かの隠れ玉へりし五條邊の御住家まで。随ひ居りしものふりけり。と見成して。いみじく夢のやうふり。主と覺しき人は。いとあかしけれど。物に隠れて見ゆべくもあらず。思ひ詫びてこの

女めに問とはん。兵藤太ひょうとうだ豊後ぶんご 介すけ といひし人もかの男おとこにこそあらめ。また姫君ひめぎみもおはするにや。と思おもひ寄よるに。いと心こころもこふくて。この中なか隔へだたる三條さんじょうを呼よばすれど。食物くひものに心こころ入れて。頓とんにも来こず。いと憎にくしと思おもゆるも。卒爾すつぜんふりや。漸々やうやうにして。三條出さんじょういで。

(三) 呼よび玉たまふは誰人たれびとにか。覺おぼえずこそ候まをへ。筑紫つくしの國くにに。二十年はたとせばかり。經へにたる下衆げぞの身みを。知しらせ玉たまふべき京人きやうびとよ。人達ひたがひにや候まをはん。とて寄より来きたり。田舎あぢかびたる搔練かぢわりに。絹きぬぶと着きて。いと甚いたく太よりにけり。我わが齡としもいと久ひさしく覺おぼえて耻はづかしけれ。

(右) ふは差さ覗のぞき玉たまへ。我われをば見み知りたりや。

とて顔かほを差出さしたり。三條手さんじょうてを拍うちて。

(三) 吾御許わがみこもとにこそおはしましけれ。あふ嬉うれしきも嬉うれし。何處いづこより参まゐり玉たまひたるぞ。主君うしぎみ顔かほはおはしますや。

と。いとおそろしく泣なく。右近みかぢは若者わかぢにて見馴みなれし世よを思おもひ出いるに。隔へだて来きにける年月としつき數かずへられて。いと哀あはれあり。

(右) まづ乳母ちちむ、君きみはおはすや。若君わかぎみはいかに成なり玉たまひにし。貴君あでぎみこそ申しは。

とて。主君うしぎみの御事おんことは。果はかなき終馬すまを思おもふに。あいふくも言いひ騒さわがれんとて。口くちに懸かけても思おも々々しく言いひ出いでず。

玉葛 近 玉葛 近 右

(三) 皆にはします。若君も大人にふりておはします。まづ祖母殿にか
く申さん。

とて入りぬ。女君を始め。皆驚きて。

(乳) 夢の心地もするわふ。いごつらく言はん方なく思ひ申す人に。
對面しむべきか。うら。

とてこの隔障に寄り來たり。氣遠く隔てつる屏風めくもの。餘波なく押
開けて。まづ互に言ひ遣るべき方なく泣き交す。乳母はた。

(乳) 吾君はいかに成り玉ひにし。數多の年頃。夢にてもおはします。
ん所を見んと大願を立つれど。遙ふる世界にて。風の音にもその御消

息をえ聞き傳へ奉らぬを。いみじう悲しと思ふに。老の身のかく残り
留りたるも。いご心憂けれど。打捨て奉り玉へる若君の。可憂くあはれ
にておはしますを。冥途の羈絆に持て煩ひ申してぞ瞬き候ふ。

と言ひ續くれば。右近は昔主君終馬の折の。いふかひふりしことよりも。
今は却て返答へん方なく煩はしと思へど。とてあるべきにあらねば。

(右) いでや申してもかひなし。御方は早く亡せ玉ひにき。

といふまに。乳母も三條も右近も。三人あがら咽せ返り。いごむつかしく
迫き兼ねたり。人々日暮れぬ。とて御堂へ急ぎ立ちて。御燈明の用意ごも
したため出て、急がせば。三人はあかくいご心惚忙しくて立ち別る。

右近も諸共に參らばやといへど。互に供の人の怪しと思ふべければ。この豊後、介にも事の様を言ひ知らせあへず。さて乳母どもは最初こそ心置もしたれ元は互に知り合ひたる中ふれば。我も人も特に耻しくはあらで。皆宿を下り立ちぬ。右近は人知れず目留めて見るに中に。姫君あらん。美しげふる後手の。いと甚く瘦れて。卯月の單衣めく着籠め玉へる髪の透き影。いと惜しくめてたく見ゆ。心苦しく悲しと見奉る。少し足馴れたる人は。疾く御堂に着にけり。人々は。この姫君を持て煩ひ申しつ。初夜行ふ程に。女君は漸御堂に上り玉へる。いと騒がしく人詰で込みて罵る。右近が局は佛の右の方に近き間にとしたり。女君は今日初ての參詣ふれ

ば御祈禱師もまた志の深からねばにやあらん。西の間に遠かりけるを。右近は

(右) 尚此方におはしませ。

と尋ね交して言ひたれば。乳母は豊後、介に。かうくと言ひ合せて。男どもをば留めて。姫君を右近の方に移し奉る。

(右) 妾わく賤しき身ふれど。當今の大殿に侍ひ候へば。かく微ふる道にても。狼籍はしきと候は。と頼み候へば。心安く此處にまします。田舎びたる人をば。かやうの所には。良からぬ生者どもの。輕蔑はしうするも。畏多きことあり。

右近

二毛どの

おのたち

とを

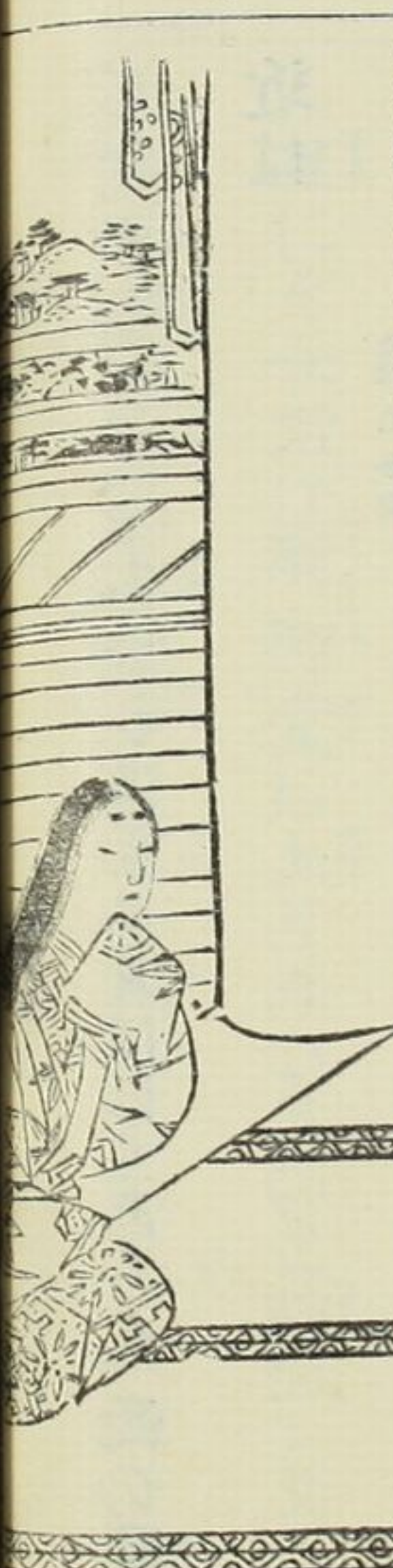
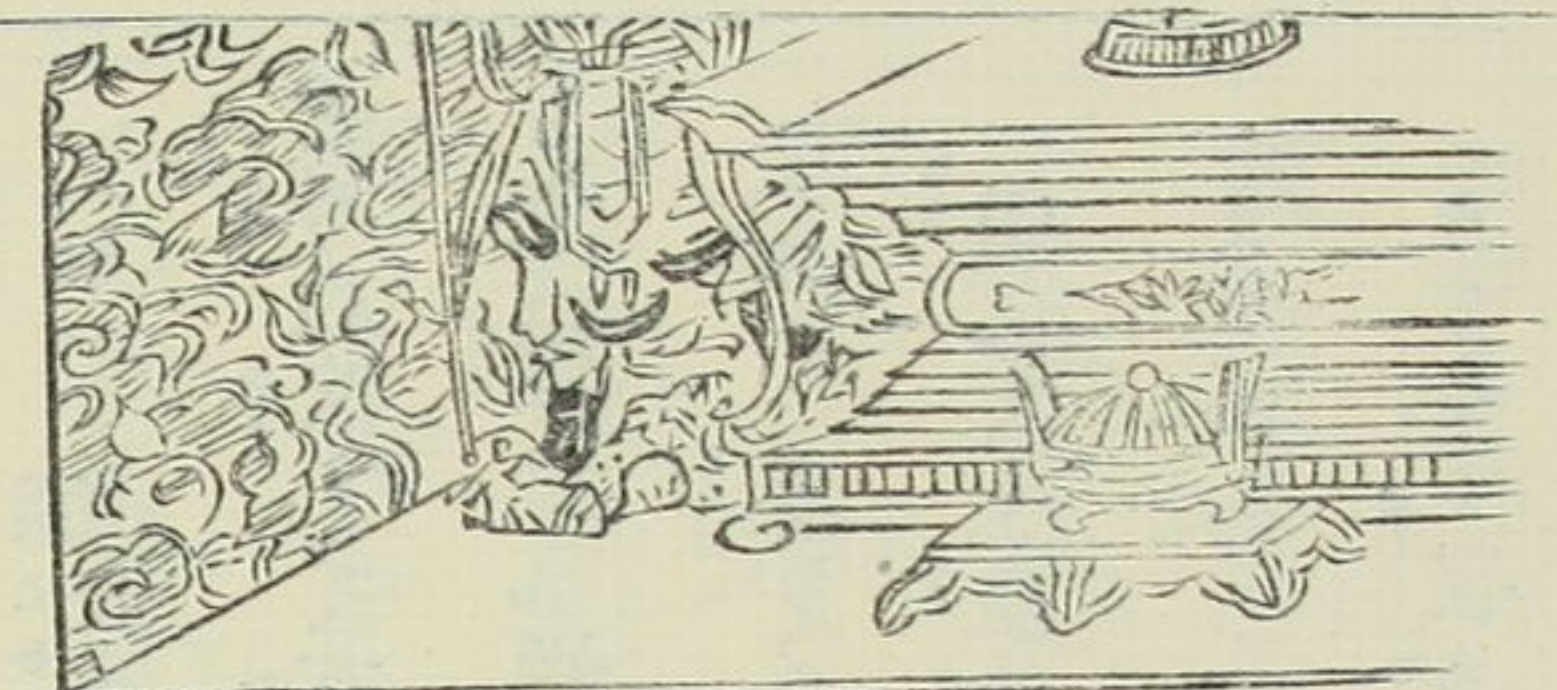
尋ねすは

布留川の

邊に

君を

見ましや



玉葛

初瀬川

はやくの

ことは

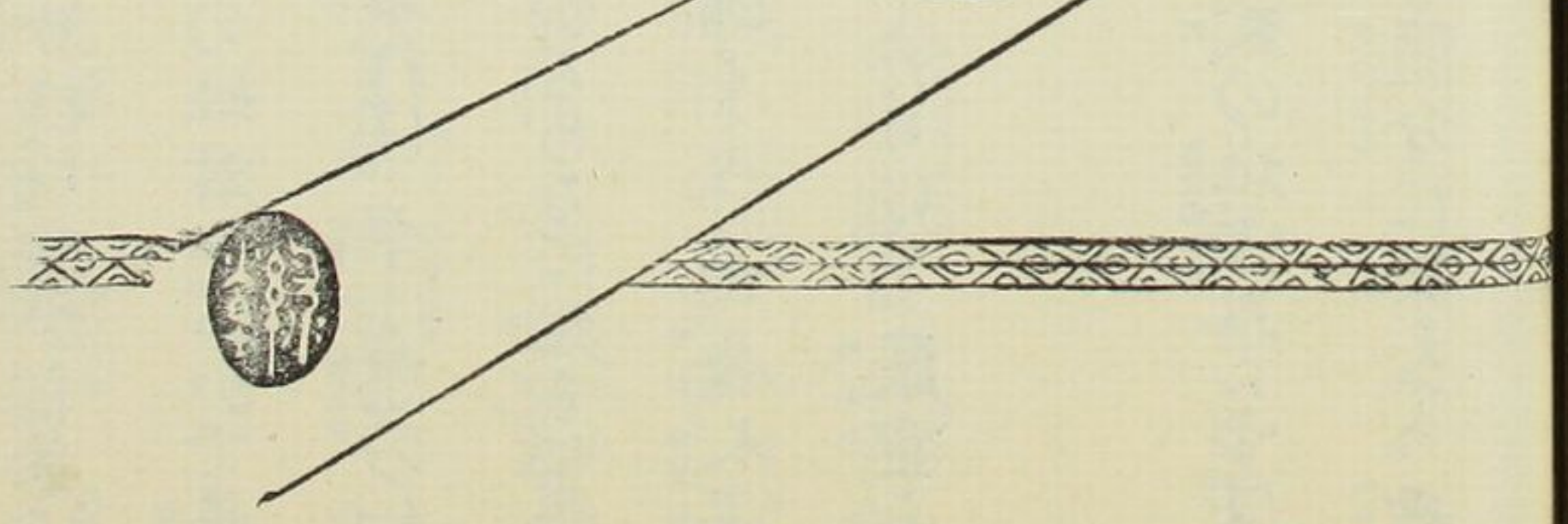
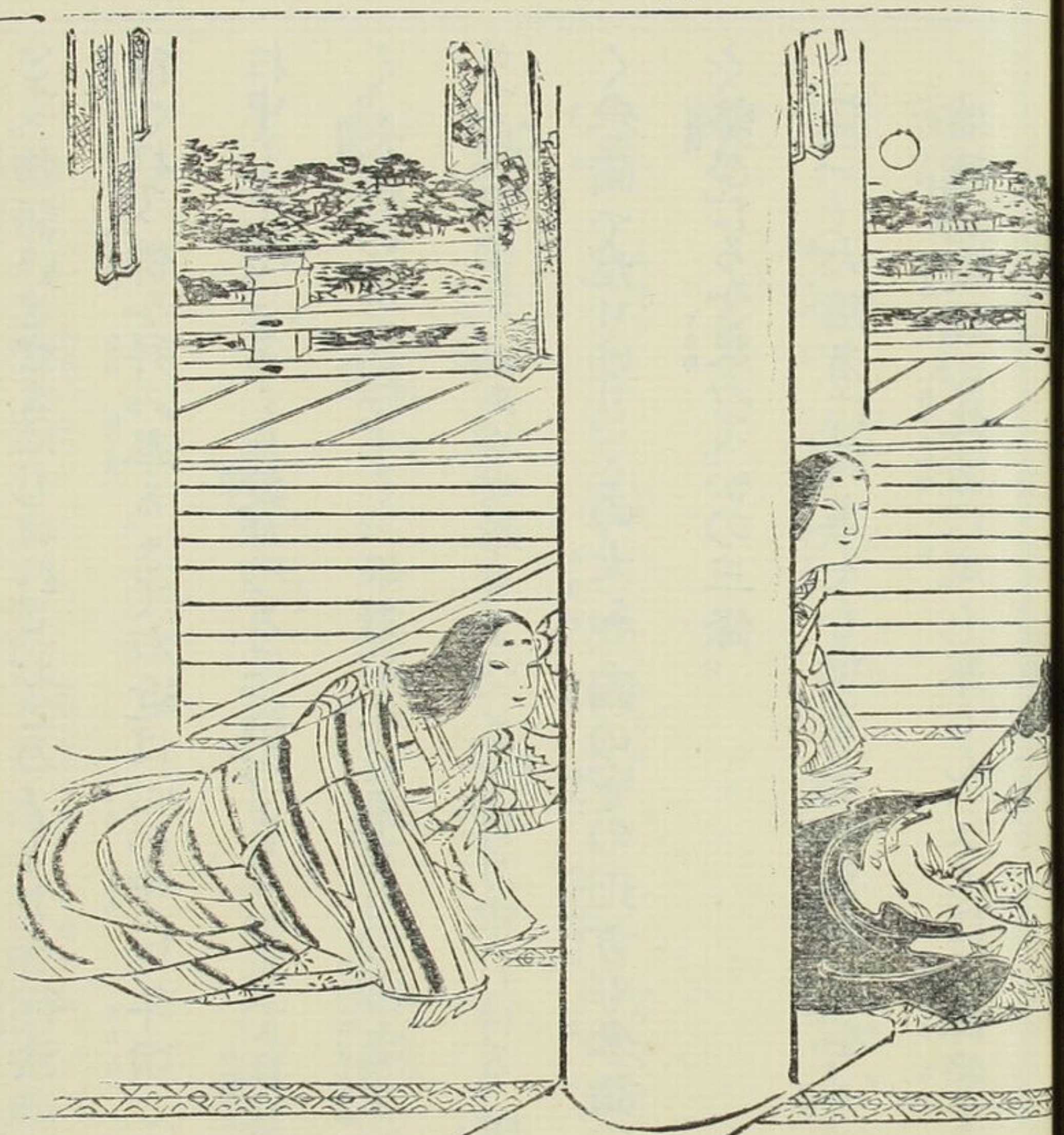
知らねども

今日の

逢瀬に

身さへ

なかれぬ



さて。物語いこそまほしけれど。おそろくしき行法の紛れに。騒がしきに
 催されて。佛を拜み奉る。さて右近は心の中に。年頃この姫君を。いかで尋
 ね申してん。と申し渡りつるに。かづくかくて見奉れば。今は思の如
 く。大殿の君の同トく。姫君を尋ね奉らん。御志深かるめるに。知らせ奉
 りて。姫君の幸福あらせ奉り玉へ。ふご祈り申しける。國々より田舎人多
 く參詣でたりけり。この大和國の守の北方も參詣でたりけり。嚴重し
 く勢ひたるを羨みて。かの三條。

(三) 大悲者には。事々も申せり。唯吾姫君を。大貳の北方あらずば。
 當國の受領の北方に成し奉らん。さらば三條等も隨分に榮えて。禮

賽は奉仕らん。

と額に手を當て。念入りに居る。右近は。いと思々しくも言ふことか
 ら聞きて。

(右) 其方はいと甚く。と田舎びけれ。御父頭。中將殿は。昔の御
 勢望を。いかにおはし。思ひ玉ふか。まして今は。天下を御心に
 懸け玉へる内大臣にて。いかばかり嚴かし。御中ふるに。その姫君をし
 も。受領の妻にて。種姓定りて。おはしませよ。は。いかふる御祈言よ。
 かくば。

(三) あふ喧。置き玉へ。その大臣達も。暫時置き玉へ。大貳の御館の北

清水の御寺
〇筑前國寺

方の清水の御寺の觀世音寺に參詣り玉ひし勢は。帝の御幸に劣るべきや。あふ氣味悪や。

玉葛參籠御堂

とて尚更に手を引き放たず。拜み入りて居る。女君は三日參籠らんと志し玉へり。右近はさうも思はざりけれど。かゝる序に姫君にも長閑に物申してん。とて參籠るべき由大徳呼びて言ふ。御燈文ふと書きたる心ばへふと。大徳はくだとしく辨知へければ。例の事にて書く。

藤原瑠璃君
〇頭中將の子故に藤原といふ瑠璃君とは玉葛

(右) 例の藤原瑠璃君といふが御爲に奉る。能く祈禱し申し玉へ。其人此頃ぞ見奉り出てたる。其願も果し奉るべし。

といふ。乳母ふとは。聞くも哀ふり。大徳は。

の幼名なるべし

(大) 法師いと賢きことか。撓みふく祈禱し申し候ふ效驗にこそ候へ。

といふ。いと騒がしく終夜行法ふふり。かくて明けぬれば。御堂より相知れる大徳の坊に下りぬ。右近ごもは。物語心安くしてあるべし。姫君の甚く瘠れ玉へる耻しげに思したる様。いとめてたく見ゆ。

玉葛以下
大徳坊

(右) これまで身に覺えぬ高貴き交際をして。多くの人をぞ見集むれど。紫上の御方の御容貌に似る人おはせざとぞ。年頃見奉るを。また生ひ出で玉ふ明石の姫君の御様。いと道理にめてたくおはします。かれは侍き奉り玉ふ様も雙びおめるに。これはかう瘠れ玉へる様の。かの

二方にも劣り玉ふまじく見え玉ふは。世に有り難くぞある。大殿。父、帝の御時より。許多の女御皇后。それより下は残りなく見奉り集め玉へる御目にも。今上の御母后薄雲、女院と申し。かの明石の姫君の御容貌をぞ。美人とは。これをいふにやあらんと覺ゆる。と申し玉ひしを見奉り並ぶるに。かの女院の宮をば知り申さず。明石の姫君は清らにおはしませむ。また片成にて。生ひ先ぞ推側られ玉ふ。紫上の御方の御容貌は。尚誰か雙び玉はんぞ見奉る。殿も勝れたりと思したるを。言に出しては何かは屈指の中には申し玉はん。たゞ我に雙び玉へるこそ君は負氣ふけれ。とぞ戯れ申し玉ひしこそありしを見奉るに。命

頂を離れたる○楞嚴經に世尊頂放百寶無畏光明とあり美人の限あるをいふなり

延ぶる御有様ごもを。また他にかゝる比類はたはしましふんやとぞ思ひ候ふを。今この姫君は。いづくか劣り玉はん。物は限あるものなれば。いかに。勝れ玉へりて。佛のやうに。頂を離れたる光明やはたはする。唯紫上やこの姫君をこそ。勝れたりとは申すべきふめれ。と打笑みて見奉れば。乳母も嬉しと思ふ。

(乳) かゝる御様を。殆怪しき所に沈め奉りぬべかりしに。いと惜しく悲しく。家寵をも捨て。男女の頼むべき子どもにも引き別れてぞ。故郷ふがらも却て知らぬ世の心地する京に詣で來りし。吾御許早く善き様に導き申し玉へ。高貴き宮仕し玉ふ其方は。自然内大臣殿の方

にも行き交りたる使ものし玉ふらん。されば父大臣聞召され。その御
子に數まへられ玉ふべき謀計。思し構へよ。

といふ。姫君は耻しく覺えて。後向き玉へり。

(右) いでや妾。身こそ數ふらねど。大殿も御前近く召し使はせ玉へ
ば。物の折毎に。姫君はいかにふらせ玉ひにけんぞ申し出るを。殿聞召
し置きて。吾はいかにして尋ね申さんと思ふを。聞き出で奉りたらば。
直に告げよと言はする。

といへば。

(乳) 大殿はめてなくおはしますとも。然る貴き御妻どもおはします

右近談往事

ふといふに。右近はかの某院にての有様ふと語り出て。

(右) 殿は世に忘れ難く悲しきことぞ思として。姫君をば彼君の御
代りに見奉らん。子も寡きが寂しきに。吾兒を尋ね出でたる人には
知らせて。尋ね參らば。其昔より言ふあり。されど妾は。當時心も稚
くて。萬事に物慎ましかりし程にて。え尋ねも申せど過ぐし程に。
其方の夫君。少貳にふり玉へる由は。御名にて知りなき。拜辭に殿に參
り玉ひし日。微見奉りしが。其事もえ申せど止みにき。とりこも姫
君をば任所までは具し奉らで。かのありし五條の家に留め玉ふふらん

いぞ思ひし。もしもか知り候はんには。あふいみじや。田舎人にてはおは
しちかきしよ。

ふと打語らひつゝ。終日昔物語。念誦ふどしつゝ。參詣り集ふ人の有様ど
も見下さるゝ方あり。前より行く水をば初瀬川といふふりけり。右近

(右歌) 二本の杉のたちごを尋ねずば。布留川の邊に君を見まじや。

嬉しき瀬にも

と申す。女君。

二本の〇初
瀬に詣てず
ばいうで再
會し奉らん
となり古今
集に初瀬河
布留川の邊
に二本ある
杉年を経て

(女歌) 初瀬川はやくのことは知らねども。今日の逢瀬に身とへ流れ
ぬ。

又逢ひ見
んどあり
嬉しき云々
〇細流抄所
りつゝ、頼と
そ渡る初瀬
川うれしき
瀬にも流れ
逢ふやと
初瀬川〇今
日右近に逢
ひて昔の事
を聞けば身
も涙に流れ
ぬとて淺と
こそ袖はひ

と打泣きておはする様。いと目安し。容貌はいとかくめてたく清けおむら。
田舎びてこちとくしくおはせましかば。いかに玉の瑕あらまじ。いであはれ。
いひでかく美しくは生ひ出て玉ひけん。と乳母の養育方を右近は嬉し
く辱く思ふ。とて母君は唯いと若やかに大様にて。柔々と畏和ぎ玉へり
しが。姫君は氣高く。持成ふと耻しげに由緒めき玉へり。とては筑紫とい
ふ所は。人の能く成り立つ所にや。と心にく思ひ成すに。これまて筑紫
人にて見し人け。皆里びにたるを。右近は心得がたくを思ひける。暮るれ
ば女君どもは御堂に上りて。翌日も行法ひ暮らし玉ふ。秋風谷より遙に
吹き上りて。いと肌寒きに。物いと哀ふる心どもには。萬事思ひ續けられて。

つらめ涙川の古歌によりていへり

右近歸參六條院

今まで人並々ふらんこは。こても有り難きこと思ひ沈みつるを。右近の物語の序に。内大臣頭中の御有様。腹々の何ともあるまじき御子ども。皆物めかし成し立て玉ふを聞けば。かゝる下種も。頼もしくぞ思ひふりぬる。何時とても互に宿る所も問ひ交して。もし昔のやうに。又も追ひ惑はしならん時は。いかゞはせん。と危く思ひけり。右近が家は六條院近き邊ありければ。女君は程遠からで言ひ交すも。便出て來ぬる心地しける。右近は大殿に歸り參りぬ。この事を探め申す序もやあらん。とて急ぐふりけり。車をば御門へ挽き入るより。氣容特別に廣々として。出入の車多く轢り迷ふ。右近は數ふらで立ち出るも。目はゆき心地する瑤の臺ふり。その

夜は紫上の御前にも參らで。かの姫君の事を思ひ臥したり。翌日。昨夜里より歸り參れる上臈若人ごものの中に。紫上は取り別きて右近を召出づれば。右近は面起だしく覺ゆ。源氏も御覽して。

(源) 何とて里居は久しく爲つる。例ならず寡婦の引き違ひまがへるやうもやありし。面白きことありしらん。

ふご例のむつかしく戯言ふご言ふ。

(右) 退出で七日を過ぎ候ひぬれど。面白きことは候ひ難くぞ候ふ。唯初瀬の邊。山踏し候ふて。哀ふる人を見附け奉りたりし。

ご申す。

あまがへる
○萬葉集に
朝露のはや
すき吾身老
ぬともまた
こまがへり
君をし待た
んとわりあ
まりへりは
若反る意な
り

(源) そは何人ぞ。

と問ひ玉ふ。右近は申し出でんも。また紫の上に聞かせ奉らで。殿にはかり取り別き申したらんを。後に上の聞き玉ひては。吾の隔て申しけるや思さん。ふと思ひ亂れて。

(右) 今申し上げ候はん。

といふ程に。人々参れば。申しさしつ。御燈臺ふと参りて。源氏は紫上と打解け並びおはします御有様ども。いと見るかひ多かり。さて紫上は廿七八歳にふり玉ひぬらん。盛りに清らに壯び勝り玉へり。少と間經て見奉るに。またその間にこそ。容納加はり玉ひにけれと見ゆ。かの姫君を。

いとめてたく劣らざと見奉りしがごと。思ひ成しにや。尚こよふくめてたき中にも。幸福のあることふさこの隔絶あるべき業かふ。源氏は御寝ること。右近をば御脚撫摩に召す。

(源) 若きものは。かゝる事苦しごと。面倒がるめり。されば尚年經ぬる同志こそ。心交して睦びよかりけれ。

と言へば。侍ふ女房ども。忍びて笑ふ。

(女) それよ。君の使ひ馴らし玉はんをば。誰か面倒がり奉らん。うるさき戯言ふぞ。言ひ懸り玉ふ煩はしき。苦しむにぞ候ふ。

ふと言ひ合へり。君は紫の上に。

(源) 其方も。餘り年經ぬる同志。打解け過ふは。又腹立ち玉はんや。
と戯れて言へば。紫、上げ。

(紫) 君の御心。然るまじきと見れば。危く候ふ。

ふと右近に語りて笑ひ玉ふ。いと愛敬づき。美しき氣さへ添ひ玉へり。源
氏は今は太政大臣にて。朝廷に仕へ。繁忙しき御有様にもあらぬ御身に
て。世の中長閑やかに思さるまじに。唯果ふき御戯言を言ひ。面白く人
の心を見玉ふ餘りに。かゝる右近のやうふる。老女をさへぞ戯れ玉ふ。

(源) かの尋ね出たりけんは。何様の人ぞ。尊き修行者語りて率て
來たるか。

太政大臣○
太政大臣は
則闕の官と
て職掌なき
なり

と問ひ玉へば。

(右) あふ見苦しや。果ふく消え玉ひし。夕顔の露の御所縁をぞ。見
附けたるにて候ふ。

と申す。

(源) そは實に哀ふりけることか。今までは。何處におはせしぞ。

と言へば。右近はありのまゝには申しにくくて。

(右) 賤しき山里にぞ。昔の女房なども。半分は變らて候ひければ。當
時の物語爲出て候ひて。堪へ難く思ひ候ひし。

ふと申し居たり。

(源) よし心知らぬ邊に迎へ参らせよ。

と秘し申し玉へば紫、上げ。

(紫) 上の煩はし。妾は睡たきに聞き入るべくもあらぬものを。

とて御袖して御耳塞ぎ玉ひつ。

(源) 容貌などはかの昔の母夕顔と劣らざや。

と申し玉へば。

(右) 必しもいひでかものし玉はん。と思ひ候ひしを姫君の方こそ。

とふらう生ひ勝りて見え玉ひし。

と申す。

(源) 美しのこや。誰程か思ふ。この君上紫とはいづれ。

と申し玉へば。

(右) いひでかそれ程までば。

と申す。

(源) 其方は爲たり顔にこそ思ふべけれ。我に似たらば後安し。

と親めきて言ふ。かく聞き初めて後は右近をば他所に召し離しつ。

(源) さらばその姫君。この邊に渡し奉らん。年頃物の序殊に口惜し

く。行邊打惑はしつることを思ひ出づるにいと嬉しく聞き出てふむ

ら。音信せぬはいとかひなきことなり。父大臣頭中には何か知られん彼

源氏欲迎玉
葛

大臣は子どもいと數多持て騒がるめるに。姫君の數ふらで。今初めて立ち交りたらんが。却て心苦しきことあらめ。我も子どもふく物寂しき。思も寄らぬ子尋ね出したる言はん。好色者どもの心盡する種子にて。いと甚く持成さん。

ふと語らひ玉へば。右近はわづ〜いと嬉しく思ひつ。

(右) 唯御心に任せ奉らん。内府に知らせ奉らんことも誰かは傳へ微言し玉はん。母君をば徒に空しく爲玉ひと代りには。姫君をともかくも引き扶けさせ玉はん。いこそは。罪輕ませ玉はめ。

と申す。

(源) 甚くも託ち成すひふ。

と舍笑みあがら。涙催み玉へり。

(源) 哀に果ふかりける契こそ。年頃思ひ渡る。かくて數多集へたる方々の中に。かの折の志ばかり。思ひ留むる人ふかりしを。命長くて。我心長をも。見果つる類多かめる中に。彼君はいふかひふくて。其方ばかりを形見に見るは。口惜しくぞある。思ひ忘るゝ時ふきに。とてその遺孤を。吾子にもものこふは。いとこそ本意は協ふ心地すべけれ。

とて姫君の方へ御消息奉り玉ふ。かの末摘花の。心劣りていふかひふかりしを思し出つれば。さやうに田舎に沈みて生ひ出たらん姫君の有様。

源氏消息玉
葛

後めたくて。まつ文の氣色見まほしく思さるゝふりけり。物眞實やかにあ
るべかしく書き玉ひて。端に。

(源文) かく申すを。知らずとも尋ねて知らん。三島江に。生ふる三
稜の筋は絶えトを。

知らずとも
○其方には
知らむとも
眞の縁は絶
えまじとな
り三稜は水
草にて筋と
いはん爲の
詞なり

ごぞありける。御文をば。右近自退出て。君の言ふ様ふご傳へ申す。贈り玉
へる御装束。人々の料ふご様々あり。紫ノ上にも語りひ申し玉へるふるべ
し。御匣殿ふごにも。儲けの物召集めて。色合織様ふご。特別あるを。撰ら
せ玉へれば。人々田舎びたる目ごもには。まして珍しきまてぞ思ひける。女
君は唯少しばかりにても。實の親の御氣容ふらは。こぞ嬉しからめ。いかに

か知らぬ人の御邊には交らはん。と苦しげに思したれど。右近はあるべき
様を申し知らせ。人々も。

(人々) 大殿の方にて。御立身もあらば。御父大臣も。自然尋ね申し
玉ひふん。親子の御契は。絶えて已まぬものあり。右近が數にも候はで。
いかに御覽ごつけられんと思ひ候ひしに。神佛の御引導は候ひき。
まして誰もく。平安におはしまさば。何時かは御父君に逢ひ奉ら
やば。

ご皆申し慰む。まつ御返事をと迫めて書かせ奉る。女君は心に。いとよ
ふく田舎びたらんものを。耻しく思ひたり。唐の紙のいと香ばしきを取

玉葛強返歌
源氏

り出て、書かせ奉る。

數ならぬ〇
如何なる縁
ありてうか
く淤泥に身
を留めけん
とて身を三
稜にうけた
りうきは深
泥をいふ

(源歌) 數ならぬみくりや何の筋ふれば、うきはしもかく根を留めけ
ん。
こほのかに書き成したり。源氏は見玉ひて。手跡は果ふく確ふらねど。貴
はかにて口惜しかられば。御心安堵にけり。かくて君は女君の住み玉ふべ
き御方御覽するに。南の町には徒ふる對ごもふごもふし。紫、上の勢特別
に住み充ち玉へれば。顯證に入繫くもあるべし。中宮のまします坤の町
は。わやうの姫君も住みぬべく長閑やかふれど。とては宮に待ふ人の列にや
聞き成さんと思して。少し埋没れたれど。良の町の西の對の文殿にてあ

源氏ト玉葛
曹司

文殿〇仙院

大臣家など
には必ある
ものなり
源氏告玉葛
事於紫上

るを。別方に移して此處に住ませんと思す。相住の花散里も。忍びやかに
心善くものし玉ふ御方ふれば。女君の履歴打語らひてもありふん。と思
し置きつ。紫、上にも。今ぞ初めてかのありし昔の世の物語申し出て玉
ふげる。紫、上は。今まかく君の御心に籠め玉ふことありけるを。恨み申
し玉ふ。

(源) 恨み玉ふはわりふしや。世に在る人の上とて。いかで不問語は申
し出でむ。かゝる序に隔心ふく語るこそ。其方をば他人には特別に思
ひ申すふれ。

とてかの夕顔を。いと哀げに思し出たり。

(又) 人の上にても數多見しに。いと思ふ中も思はぬ中も。女といふもの心深きを。數多見聞さしかば。更に好色々々とき心は使はトこそ思ひしを自然然るまどき女をも數多見し中に。只管にあはれに可愛き方は。かの夕顔ぞまた比類なく思ひ出てらる。世に在らましかば。北の町にもする明石、上の列には。ふごか見ごらまじ。人の有様とりとふるが。彼女は角々とう美しき筋ふとは後れたりしが。も。貴はかに可愛くもありしかる。

ふごか言ふ。紫、上は

(紫) かりとも明石、上の列には。立ち並べ玉は

と言ひて。尚明石、上をは。自覺しと心置き玉へり。それと姫君のいと美しげにて。何心もふく聞き玉ふが可愛ければ。君の明石、上を捨て難く思すも。また道理ぞかし。と思し返さる。かくいふは九月のこころけり。女君の渡り玉はんこと。いかでか早速にもあらん。美き童。若人ふと求めす。筑紫にては口惜しからの女房ども。京より散りばひ來たるふとを。便につけて呼び集めふととして侍はせしも。俄に國を惑ひ出て玉ひし騒動に。皆後に残してげれば。又人もふし。京は自然廣き所ふれば。市女ふとやうのもの。いと能く求めつ、率て來。さて女君をば誰人の御子ふと。は知らせざりけり。まづ右近が里の。五條の家忍びて渡して。女房ども撰り整へ。装

玉葛移六條院

東調へおごして。十一月にぞ。六條院には渡り玉ふ。君は東の御方里に申し玉ふ。

源氏屬玉葛
於花散里

(源) あはれと思ひし人の。物倦くて。果ふき山里に隠れ居にけるを。幼き兒のありしが。年頃も人知れず尋ね候ひしが。ともえ聞き出で、女にふるまで過ぎにけるを。覺えぬ方より聞きつけたる時に。だにとて。此方に移るはし候ふふり。母も亡ふりにけり。中將霧をば其方に申し預けたるに。悪くもあらねば。この女君をば。同くやうに後見玉へ。山賤めきて生ひ出たれば。鄙びたること多からん。然るべく事に觸れて教へ玉へ。いと委細に申し玉ふ。

中將〇夕霧
此間に侍従
より中將に
なりしなり

(花) 實にかゝる人のおはしけるを。つゆ知り申さざりけるよ。たゞ姫君一人をもとし玉ふが。寂しき。そは。いふ。いふ。いふ。

と大様に言ふ。

(源) かの母ふりし人は。心ぞ世に有りがたきまで善かりし。其方の御心も。後実く思ひ申せば。預け奉るに心安からん。

ふい言ふ。

(花) 身に似合しう後見む人ふ。とも事多からず。徒然に候ふを。姫君を後見候ふては。嬉しがるべき。いふ。いふ。候ふ。

と言ふ。殿の内の人々は。

(入々) 御女ども知らず。また何人を探ね出て玉へるあらんむつかしき
吉物扱ひかふ。

と言ひけり。御車三輛ばかりして。女君の姿ごもふ。右近あれば田舎び
ず爲立て。西の對に移るひたり。源氏よりは綾ふど何くれと奉り玉へり。
其夜やびて大臣渡り玉へり。昔光源氏ふといふ名は聞き渡り奉りしが
ど。田舎にては。年頃の疎々しき。せうも思ひ聞えとりけるを。微なる御
燈に。几帳の綻より。乳母ごもは鏡に見奉るに。いごぞ恐しくへぞ覺ゆる
や。さて大臣の渡り玉ふ方の妻戸を。右近掻い放てば。

(源) この戸口に入るべき人は。心特別にこそ持て成せぬ。

と打笑ひ玉ひて。扇ふる御座に。跪居玉ひて。

(又) 火こそいと懸想びたる心地すれ。親の顔はあかしきものこそ聞
け。せうも思ひぬ。

さて几帳を少し推遣り玉ふ。女君はわりなく耻しければ。側視ておはす
る様体ふ。いと美しく見ゆれば。君は嬉しくて。

(又) 今少し光見せんや。微にて餘り心にくし。

と言へば。右近燈挑げて。少し寄す。

(又) いと耻しがる人や。

と少し笑ひ玉ふ。さて實に覺ゆる御目つきの耻しきあり。君はいとわ

も他人（ひと）として。隔（へた）てある様（さま）にも言（のたま）ひ成（な）せず。いみづく親（おや）めまで。

（又）年頃（とと）御行邊（おんゆきへ）も知らず。心（こころ）に懸（か）けぬ隙（ひま）ふく歎（なげ）き候（まを）ふを。かくて見（み）奉（たま）るにつけても。夢（ゆめ）の心地（こころ）して。過（ま）ぎにし方（かた）の事（こと）ども取（とり）添（そ）へ忍（しの）び難（がた）きに。何事（なに）もえ申（まを）されりける。

とて。御目押（おんめおしぬく）拭（ぬぐ）ひ玉（たま）ひて。母君（ははきみ）のこと。眞實（まこと）に悲（かな）しく思（おぼ）し出（で）てらる。御年（おんとし）の程（ほど）數（かず）へ玉（たま）ひて。

（又）親子（おやこ）の中（なか）かく久（ひさ）しく年經（としへ）たる比類（たぐひ）は。またあらうものを前（まへ）世（よ）の契約（ちぎり）。つらくもありけるか。今は初々（はつはつ）しく若（わか）び玉（たま）ふべき御年（おんとし）の程（ほど）にもあらうを。年頃（とと）の御物語（おんものがたり）も申（まを）さし候（まを）し。何（なに）もわらうに

覺束（おぼつか）ふくは持成（もて）し玉（たま）ふ。

と恨（うら）み玉（たま）ふに。女君（おんなきみ）は申（まを）せん言（こと）もふく。耻（はづか）しければ。

（女）足立（あした）たず沈（しづ）み初（はつ）め候（まを）ひにける後（のち）。何事（なに）も有（あ）り無（な）かりてぞ。年月（としつき）を過（と）し候（まを）ふ。

とほのかに申（まを）し玉（たま）ふ聲（こゑ）ぞ。昔（むかし）の夕顔（ゆづり）にいと能（よ）く似（に）て。若（わか）びたりける。君（きみ）は含（ほ）笑（え）みて。

（源）沈（しづ）み玉（たま）へりけるを。今はまた誰（たれ）かは哀（あはれ）と見奉（まを）るべき。

とて。女君（おんなきみ）の心（こころ）はへ。いふかひふくはあらぬ御返答（おんいらへ）と思（おぼ）す。右近（みぎきみ）にあるべきこと言（のたま）はせて。大臣（おとぎ）は返（かへ）り玉（たま）ひぬ。女君（おんなきみ）の美（うつく）しくものし玉（たま）ふを。君（きみ）は嬉（うれ）しく

足立す云々
〇三歳（さんさい）り程（ほど）
をいふ河海（かかい）
抄（しやう）、父母（ふぼ）は
いかにあは
れと思（おも）ふら
ん三歳（さんさい）にな
りぬ足立（あした）た
ずして

思^{おも}ひて。紫、上にも語り申し玉ふ。

(源) かの女君の。然る山賤の中に年経たれば。容姿ごもいかに氣の毒
びからん。心輕蔑りしを却て心耻しきまほせ見ゆる。かゝるものあり。い
かで世人に知らせて。兵部卿、宮おど。この家の内好色まこく爲玉ふ
心亂に爲む。好色者ごもの。いと端正たちばかりこの邊に見ゆるも
かゝるもの、種子のふければふり。されば、この女君甚う持成してごむ。
尚最初より端正からぬ人達の。氣色見集めん。

の言^{ことば}は。

(紫) 怪しの人の親や。まづ好色者の心勵まらんことを思すは。怪し

の言^{ことば}。

の言^{ことば}。

(源) ま、まに今の心おさまさば。其方をいそぎやうに持て成して。
人の心をも亂りて見つばかりけれ。いと無心に爲成してし業ぞかし。

とて笑ひ玉ふに。紫、上は面赤みておはする。いと若く美しげあり。君は硯
引き寄せ玉ひて。手習い。

(源歌) 戀ひ渡る身はそれながら玉葛。いかふる筋を尋ね來つらん。

あはれ。

とやびて獨言ち玉へば。紫、上は。實に君は深く思しける人の名残あめり。

戀ひ渡る○
母夕顔を戀
ひ渡る我身
は同じ身な
がら實の父

ならぬに如何なる縁をたよりて來しとなり玉

葛は筋の縁語なり
中將依父命訪玉葛

と見玉ふ。中將、君にも。

(源) かくる人を尋ね出てたるを。兄弟の用意して。睡び訪へよ。

と言ひければ。中將西の對に詣で玉ひて。

(夕) 人數ふらすとも。かくる中のもの候ふ。まづ召寄すべく候ひける。御移徙の程にも參り奉仕らざりける。と云ふ。

と實の兄弟と思ひて。眞實々々しく申し玉へば。心知れる人は。傍痛

さまで氣の毒に思ふ。乳母ごもは。筑紫にて心の限り盡し待きたりし御

住居も。今この殿にてはかの住居の淺ましく。田舎びたりしも。譬へん方

ふくと思ひ比べらるゝや。御修飾より始めて。何事も今めかしく氣高くて

大臣も中將も。親兄弟と睦び申し玉ふ。女君の御様容貌より始め。目も

あやに覺ゆるに。今ぞ三條も。筑紫の大貳を輕蔑はしく思ひける。まして

かの監の氣調氣容。思ひ出るも忌々しく限ふし。豊後、介の心ばへを。世

に有り難きものに。女君も思し知り。右近も思ふ。外様のものは。事を執る

にも怠りぬべしとて。女君の家司ごも定め。其他あるべき。いふもを授て

せ玉ふ。豊後、介も家司にありぬ。介は年頃田舎び沈みたりし心地。俄に

名残ふく。いかに假にも立出て見るべき因故ふく覺えし大殿の内を。

朝夕に出入り馴らし。人を從へ事を行ふ身ごふれるは。いみじき面目ご

思ひけり。大臣殿の御心控の續密に有り難くおはしますと云ふ。いと辱ふ

定玉葛家司
豊後介爲家司

し。

源氏配與春衣

細長〇貴婦人の着るものなり

年の暮には女君の御修飾のこと。方々の装束ふご。尊き列に思し控たり。さて様体こそ美かれ。装束ふごの方は尚田合びたることもやあらん。と山賤の方に輕蔑り推測り申し玉ひて。特別に調製たるも奉り玉ふ序に。我もくく手を盡して織りつゝ持て參れる。細長小袿の種々様々ふるを。君は御覽するに。

(源) いご多かりけるものごもかふ。方々に恨ふくこそものすべかりけれ。

と。申し玉へば。紫、上げ。御匣殿の奉仕れるも。我物にせとせ玉へるも。皆取出てとせ玉へり。紫、上げかゝる筋もまたいと勝れて世にあき色合を染め

打殿〇衣を打つ所なり

つけ玉へば。君は世にも有がたしと思ひ申し玉ふ。此處彼處の打殿より參れるものごもは。皆御覽に比べて。濃き赤さふご。様々を撰らせ玉ひつゝ。御衣櫃衣篋ごもに入れさせ玉ひて。大人びたる上臈ごも侍ひて。これは。これは。ご色合取具しつゝ入る。紫、上も見玉ひて。

(紫) いづれ劣り優る差別も見えぬものごもふめるを。着玉はん人の御容貌に思ひよそへつゝ奉り玉へ。着たるものゝ人の様に似合ぬは隣々しくもありかし。

と言へば。大臣打笑ひて。

(源) 知らぬ顔して。人の容貌推測らん御心ふめりふ。さては其方

はいづれを着玉ふべきぞ。

と申し玉へば。

(紫) 我身も鏡ばかりにては。いかに知らん。

葡萄染〇表
蘇方にて裏
花田なり
櫻の細長〇
表白く裏荷
葡萄染なり
掻練〇薄紅
の綾の張り
たるなり
海賦〇大波

と。とすがに耻らひておはす。紅梅の紋。いと浮きたる葡萄染の御小袷。今様色のいと勝れたるこは。この紫、上の御料。櫻の細長に艶やかふる掻練取り添へては。姫君の御料とす。浅縹の海賦の織物。織様艶めきたれど。匂やかふるぬに。いと濃き掻練具として。花散里の方に奉り。曇ふく赤きに。山吹の花の細長は。かの女君の方に奉り玉へるを。紫、上は見ぬやうにて。さてはかの女君は。實父内大臣の花やかに。あふ清げとは見えながら。艶め

に梅松や貝
などの紋を
織りたるな
り
山吹〇表朽
葉にて裏紅
梅なり

かしく見えたる方の交らぬに似たるふめり。と思し合せて。實にせやうに推量らるるを。顔色には出し玉はれど。大臣は其顔見遣り玉へるに。尋常ふらず。

(源) いてこの容貌のよそへは。人腹立ちぬべきことあり。物の色は善し。とても限あり。人の容貌は悪きも。またふほ底あるものを。

柳の織物〇
表白に裏青
なり

とて。かの末摘花の御料には。柳の織物の由緒ある唐草を。亂れ織れるもいと艶めきたれば。人知れず含笑まれ玉ふ。梅の折枝。蝶鳥飛び違ひ。磨めきたる白き小袷に。紫の濃きが艶やかふる重ねて。明石、上の方に奉り玉ふ。思ひ遣り氣高きを。紫、上は目覺しと見玉ふ。空蟬の尾君には。青飽

禁色○薄紅
なり

の織物。いと心ばせあるを見つけ玉ひて。御料に奉る。梔子の御衣。禁色ふ
る添へて。元日に着るべき由。方々に御消息申し廻し玉ふ。いづれも實に
似合ひたりとも見んの御心ふりけり。皆御返事ども尋常ならず。御使の
祿もまた心々ふるに。末摘花は東院におはすれば。他の方々は違ひて。
御使への祿ふども。今少し差し離れ艶ふるべきを。端正しくものし玉ふ
人にて。式とあるべきことは。違ひ玉はず。山吹の袿の袖口。甚く煤けたる
を。一重にて打掛け玉へり。御返事には。いと香ばしき陸奥紙の。少し年
経て厚きが黄ばみたるに。

末摘花返詞

着て見れば

(末文) いでや。數に入れ玉へるは。嬉しきものながら。ふかくいこそ。

着て見れば。うらみられけり唐衣。かへしやりてん袖を濡して。

御手跡の筋も。書ける詞にいと能く相應たり。君は御覽して。いと甚く
含笑み玉ひて。頓にも下に打置き玉はねば。紫、上は。

(紫) 上。何事あらん。

と見越せ玉へり。君には末摘花よりの纏頭を。いと詫しく傍痛しと思し
て。御氣色悪しければ。御使はすべり退出ぬ。女房どもは。おのく私語
き笑ひにけり。末摘花の。かやうにわりなく古めかしく。傍痛き所の附き
玉へるを。君はさかしらに持て煩ひぬべく思して。耻しき御氣色あり。

(源) 古代の歌人は。唐衣。袂濡るふと。託言こそ離れぬ。予も其列

○着て見れ
はなかく
に恨めしき
により返し
奉らんとて
源氏の問絶
を恨またる
なりうらみ
かへしなど
皆衣の縁に
よれり

まどる○古
今集思ふと
ちまとむせ
る夜は唐錦
たゝなく惜
しきもの
に
ずありける

和歌の髓腦

ぞかし。更に吾生來の一風に纏はれて。今めきたる言の葉に動き玉は
ぬこそ。口惜しきことふれ。折節御前ふご事更に召されたる歌人の中
にて。人の中ふることを詠むに。まごぬふといふ三文字を。やゝもすれば放
たず詠むぞかし。昔の懸想ならなる挑みには。あだびこといふ五文字を。
中の休句に打置きて。詞の續き便ある心地すべかり。

ふご言ひて笑ひ玉ふ万の草子。歌枕を能く案内知り見盡して。其中の
詞を取り出るに。詠み續きたる筋こそは。強うはかはらざるべけれ。常陸ノ宮
の書き置き玉へりける。紙屋紙の草子をこそ見玉へよ。とて末摘花より。源
氏の方へ越せ玉へりしが。和歌の髓腦いと所狭く。病避るべき所多かり

○髓腦は法
則なり河海
抄に有五家
髓腦又演成
式舉七病喜
撰式有四病
孫姫髓腦有
八病是等也
とあり又公
任の新撰髓
腦あり

しかば。元よりの姫君の歌道に後れたるに。いと却て一格のみ守りて。
動くべくも見えざりしかば。むづかしくて君は返し玉ひて。

(源) 能く案内知り玉へる人の口調にては。珍しくもあらず。

とて可笑しく思しける様ぞいと惜しきや。紫、上はいと眞實やかにて。

(紫) 何とて返し玉ひけん。書き留めて。姫君にも見せ奉るべかりける
ものを。此方にも髓腦。文庫の中ふりしも。虫皆害ひてければ。見ぬ人は
また心特別にこそは。疎遠かりけれ。

と言ふ。

(源) 姫君の學問には。いと無用ふらん。凡て女は一事を取立て好め

ること。また故意と設けて身に入るは。善からぬことあり。何事も押通
して心得ざらんば。口惜しからん。唯心の筋を漂はしからず持て鎮め
置きて。平穩ふらんばわりぞ見安かるべかりける。

ふ言ひて。末摘花の御返事は。思しも懸ければ。

(紫) 彼方の御歌に。返しやりてんごあめるに。此方より押返歌し玉
はざらんば。僻々しからん。

と勧誘し申し玉ふ。君は情捨て玉はぬ御心にて書き玉ふ。いと心安げふ
り。

(源歌) 返さんといふにつけても片敷の。夜の衣を思ひこそ遣れ。 道

返さんど○

理や。

とぞあめる。

吾を夢にだ
に見んと思
ひ玉ふか問
絶の恨は道
理なりとて
返却の詞を
いとせめて
戀しき時は
烏羽玉のよ
るの衣を返
してすぬる
といふ古歌
の意に翻し
てよめるな
り

此帖は源氏
三十六歳の
春なり

六條院春殿
光景

第廿三帖 初音

年立ち返る朝の空の景色。名残なく陰らぬ麗うけには。數ふらぬ垣根
 の内さへ。雪間の草若やかに色着き初め。いつしかと景色たつ霞に。木
 芽も打煙り。自然人の心も暢らかにぞ見ゆるかし。まして六條院のいと
 珠を敷ける御前は。庭より始め見所多く。磨き増し玉へる四町の御方
 々の有様。學び書き立てんも詞足るまじくふん。さて春の御方上紫の御前
 取り別けて梅の香も。御簾の内の匂に吹きまがひて。生ける佛の御國と
 覺ゆ。とはいへとすがに打解けて安らかに住み成し玉へり。伺候ふ女房と
 も。若やかに勝れたるを。姫君明石の御方に撰り侍らせ玉ひて。少し大人

齒固式
齒固の祝
元三に行ふ
式なり
千年の影
古今集に近
江のや鏡の
山を立てた
ればうねて
ぞ見ゆる君
が千歳をど
あり

びたる限り。却て由緒々々しく。装束有様より始めて。美しく持て附けて。此處彼處に群れ居つ。齒固の祝して。餅鏡をさへ。取り寄せて。千年の影に著き年の内の祝言どもして。戯れ合へるに。大臣差覗き玉へれば女房ども懐手引き直しつ。

(女房) いとはしたふさ業かふ。

と詫び合へり。

(源) いと壯重なる目の祝言どもかふ。皆各祝ひ思ふことの道々あらん。少し聴かせよや。我壽詞させん。

と打笑ひ玉へる御有様を。年の始の榮に見奉る。我こそはと思ひ上れる

女房中將 君ぞ。

(中) 兼てぞ見ゆるふごころ。鏡の影にも語らひ候へつれ。私の祈願は何ばかりの事をかせん。

ふご申す。元日の程は。人々年賀に参り込みて。物騒がしかりけるを。夕方君は御方々の参座し玉はんとて。心特別に引き修ひ假粧し玉ふ御影こそ。實に見るかひあめれ。とて紫上。

(源) 今朝かの女房達の。戯れ交しつる齒固の祝。いと羨ましく見えつるを。其方には我見せ奉らん。

とて。亂れたるごころも少し打混せつ。祝ひ申し玉ふ。

兼てぞ見ゆる
○前に舉
けたる古今
集の歌によ
り
元日

薄氷○新年
に吾と君と
影を並ふる
とて鏡は齒
固の餅鏡に
よそへてい
へるなり

(源歌) 薄氷解けぬる池の鏡には。世にたぐひふき影ぞ並べら
實にめてたき御抗儷ごもふり。

(紫歌) 曇ふき池の鏡に萬代を。すむべき影ぞ著く見えける。

曇なき○新
殿のめてた
き様を述て
源氏を祝ひ
たるなり
子日
千歳の春云
々○花鳥余
情にめつら

何事につけても末遠き御契を。あらまほしく申し交し玉ふ。今日け子
の日ふり。實に千歳の春をわけて祝はむに。道理なる日あり。君は姫君の
御方に渡り玉へれば。童下使ふご。御前の山の小松引き遊ぶ。若き女房
ごもの心地ごも。興に入りて置き所ふく見ゆ。北の御方上。明石より。故意ご
がましく為集めたる鬚籠ごも。檜破籠ふご奉り玉へり。えからぬ五葉の枝
に作り附けたる鶯も。思ふ心あらんかし。

しき千世の
初めの子の
日にはまつ
けふをこそ
引くべかり
けれどあり
河海抄に十
節記云正月
子日引小松
延假年と見
えたり

(明歌) 年月をまつに引かれてふる人に。今日鶯の初音きかせよ。音
せの里の。

と申し玉へるを。君は見玉ひて。實にあはれと思し知る。今日は元日ふれ
ど。おはしの哀せいに。言忌も為玉はぬ氣色ふり。姫君に。

(源) この御返歌は。自申し玉へ。初音惜しみ玉ふべき方にもあらず。

と御硯取りまかふひて。書かせ奉らせ玉ふ。さて姫君のかく美しげにて。
明暮見奉る人だに。飽かず思ひ申す御有様を。母君の今まで。覺束ふき
年月の隔たりけるも。君は罪獲がましく。氣の毒に思す。

(姫歌) 引き別れ年は経れども鶯の。巢立ちし松の根を忘れめや。

明石上消息
姫君
年月を○久
く手放した
る其方よ吾

に初音だに
聞かせよと
て待に松を
りけたり
音せぬ里の
○河海抄け
ふだにも初
音さうせよ
驚の音せぬ
里は住むう
ひもなし
姫君返歌明
石上
引き別れ○
久しく離れ
奉れと母上

稚き御心に任せて。くだくしくぞあめる。
夏の御方里花散の御住居を見れば。時節ふらぬ氣にや。いと静に見えて故
意と好まじきこともあはれ。貴やかに住み成し玉へる氣容見え渡る。年月
に添へて。御心の隔もあはれなる御交情あり。君は今強に近やあ
る御有様にも待遇し申し玉はごりけり。いと睦しく。またと有りがたから
ん夫婦の御契ばかりを。申し交し玉ふ。御几帳隔てたれど。君は少し推
遣り玉へば。花散里はまたそのまににおはす。縹は實に風韻多からぬあはひ
にて。御髪ふとも甚く盛過ぎにけり。優しき方にはあらねど。蒲萄髪して
ぞ修ひ玉ふべき。我にあらざらん人は。見醒めしめべき御有様を。我心の

の御恩は忘
れ申さざと
なり
夏殿光景
蒲萄蔓○往
古伊井諾尊
髪を投げ玉
へければ蒲
萄となるそ
れより髪を
えびかつら
といふ
西對玉葛有
様

らでかく見るこそ。嬉しく本意ふれ。輕き人の列にて。我に背き玉へま
しかば。いかに苦しからん。ふと君は御對面の折々には。まつ我御心の長
さも。花散里の御心の重きをも。嬉しく思ふやうふりと思しけり。さて委
細に舊年の御物語ふと懐しく申し玉ひて。西の對に渡り玉ふ。
西の對ふる筑紫の姫君玉葛君は。また甚くも住み馴れ玉はぬ程よりは
氣容美しく為成して。美しげなる女童の姿艶めかし。人影の數多
して萬事の修飾不自由ふれども。些細なる御調度は。またいと整備へ
玉はぬを。然る方に物清げにぞ住み成し玉へる。さて本人もあふ美しげと
ふと見えて。山吹の御衣に持てはやし玉へる御容貌ふと。いと花やかに。此

所に曇れると見ゆる所なく。隈なく容韻きらしく。委しく見まほ
 しき様ぞし玉へる。田舎にて物思に沈み玉へる間の爲業にや。髪の裾少
 し細りて。さらけに懸れるも。いと物清げに。此處彼處いとけぞやむふる
 様し玉へるを。君は我物にしても見ましかばと思すにつけては。えも見過
 し玉ふまじくやあらん。かく君は吾子として。いと隔てふく見馴れ玉へ
 ど。尚他人の子と思ふに。何となく隔たり多く怪しきや。現の心地もし
 玉はねば。真帆からず待遇し玉へるも。いとをかし。

(源) 此方に迎へ奉りてより。はや年頃にふりぬる心地して見奉るも。
 心安く本意協ひぬるを。腹藏ふく持て成し玉ひて。春の方ふども

渡り玉へ。幼稚き初琴習ふ姫君もあるを。其方も諸共に聞き馴し玉へ。
 後めなく悪き心持たる人ふき所あり。

と申し玉へば。

(玉) 言はんまにこそは爲候はめ。

と申し玉ふ。然もあるべきことぞかし。

冬殿光景

暮方に冬の御方上明石に渡り玉ふ。近き渡殿の戸推開くるより。御簾の内
 の追風。艶めかしく吹き匂はして。物より殊に氣高く思さる。本人は見
 えず。いつらにぞと見廻し玉ふに。現の邊脈はしく。草子ども取り散した
 るを。取り包み居玉ふ。唐の東京錦の。ことごとしき縁取りたる茵に。を

唐の東京錦

○唐の東京にて織る錦なり
衣被香○麝香の異名なり

珍しや○紫上の方に養はれたる姫君の吾許を訪ひし珍しとなり河

かしげふる琴打置き。故意ごめき由緒ある火鉢に侍従香を薫らわして。物毎に染めたる衣被香の香のまがへる。いと艶ふり。手習ごもの亂れ打解けたるも。筋變り由緒ある書き様ふり。ことごとく草書がらふごにも才がらず。見安く書きすさびたり。姫君の小松の御返歌を珍しと見けるまに。哀ふる故事ごも書き混ぜて。

(明歌) 珍しや花のねぐらに本傳へて。谷の舊業を訪へる鶯。聲待ち

出てたる。

ふごもあり。咲ける岡邊に家しあれば。ふご引き返し慰めたる筋ふご。書き交せつゝあるを。君は手に取りて見玉ひつゝ。含笑み玉へるも。明石、上げ。い

海抄に人知れず待ちしも志るく鶯の聲珍しき今日にもあるかなどあり
咲ける岡邊に○河海抄、梅花咲ける岡邊に家しあれば、之しくもあらず鶯の聲源氏宿明石上方

と耻しげふり。君は筆差濡して。書きすさみ玉ふ程に。明石、上げ。膝行り出て。君への會釋は。さすびに自畏まり置きて。見安き用意ふる待遇を。君は尚他人よりは特別ふりと思す。白き浮紋の衣に。けごやわふる髪の懸りの。少しさはらわふる程に薄らぎにけるも。いと艶めかしと添ひて懐しければ。新しき年の始の御騒がれもやあらん。と慎ましけれど。終に此方に宿り玉ひぬ。かれば明石、上げ。尚御寵愛特別ふり。と方々には心置きて思ふ。紫、上の方に。まよして目覺しがる人々あり。
また曙の程に。君は紫、上の方に渡り玉ひぬ。明石、上げ。かやうに夜深く歸り玉はずごもと思ふに。名殘も尋常ならずあはれに思ふ。紫、上げ。待ち

源氏曉歸

取り玉へる。はた生煩はしと思すべめる心の内。推量られ玉ひて。

(源) 怪しき轉寢をして。若々しかりける睡たを。さうも驚かし玉
はて。

臨時客

臨時客○正月二日三日の間に攝關の家上客を饗應するなり

と御機嫌を取り玉ふも美しく見ゆ。紫、上は格別ふる御返答もふければ。君は煩はしめて空眠をしつ。日高く御寝り起きたり。今日は臨時客のことに紛はして紫、上に面隠し玉ふ。親王公卿など。例の殘なく参り玉へり。御樂遊ありて。引出物。祿など。他に似るものふし。御邊集ひ玉へる公達。我も劣らんと装束ぎ持成し玉へる中にも。少し君に擬似ひたりと思ふ人だに見え玉はぬものか。別に一人つゝ取り放ちては。右族多

此殿○催馬樂に、此殿はむべも富みけりささくさのおはれ三枝の花、ささくさの三

くものし玉ふ頃ふれど。君の御前にては。いづれも消壓され玉ふも悪しかし。何の數ふらぬ下部ともふらぬ。この六條院に参るには。心遣ひ特別あり。まして若やかふる上達部などは。玉葛などいふ若人もおはせば。思ふ心などものし玉ひて。すろに心懸想し玉ひつ。常の年よりも特別あり。花の香誘ふ夕風。長閑に打吹きたるに。御前の梅やうゝ繡きて。誰彼時ふるに。音樂の調ごと面白く。此殿打謠ひたる拍子。いと花やかあり。大臣も時々聲打添ひ玉へる。三枝の末方。いと懐しくめてたく聞ゆ。何事にも手を添へ玉ふ御光に嘩されて。色をも音をも増す差別。殊にぞ分れける。かく騒ぐ馬車の音をも。物隔て、聞き玉ふ町々の方々は。蓮華の

葉四葉に殿
つくりせり
や殿つくり
せりやどあ
り
世の憂き目
○古今集世
の憂目見え
ぬ山路に入
らんには思
ふ入こそほ
たしなりけ
れ
東院景况
源氏訪末摘
花

中の世界に。また開けざらん心地も。かくや心疾ましげふり。まして東院に離れ玉へる方々は。年月に添へてつれづれの數のみ勝れど。世の憂き目見えぬ山路に思ひ擬へて。つれなき君の御心をば。何ごかは見奉り咎めん。君を見奉らぬ淋しきより外はふければ。行法の方に心寄する空蟬、尾は。その間切なく勤行め。萬の假字の草子の學問心に入れ玉はん末摘花は。またその志願に従ひて。君はいづれも物眞實やかに。はかしくしき掟も唯各心の願に従ひにたる住居ふり。
騒がしき日頃過して。君は東院に渡り玉へり。末摘花は人柄におはせば。氣の毒に思して。人目の外飾ばかりはいと善く待遇し申し玉ふ。昔盛

龍の淀み○
古今集おち
たきつ龍の
みなりみ年
つもり老に
けらしな黒
き筋なし

と見えし御若髪も。年頃に衰へ行き。龍の淀み耻しげふる御側目ぶごを。君はいとほしと思せば。正面にも向ひ玉はず。柳の御衣は。實にいそ似つかはしからざりけれ。と見ゆるも。着成し玉へる人からふるべし。光澤もふく黒き搔練の。とや、しとく張りたる一重。然る織物の袿を着玉へる。いと寒げに氣の毒ふり。重の袿ぶごは。いかに爲成したるにかあらん。御鼻の色ばかり。霞にも紛るまどく。赤く花やかふるに。君は御心にもあらず打歎かれて。事更に御几帳引き修ひ隔て玉ふ。女君の方にては。却てさうも思しならず。今はかく君のあはれに長き御心の程を。心安きものに打解け頼み申し玉へる御様あはれふり。かゝる方も普通の人ふらず。氣の毒に悲しき

人の御様と思せば。君はあはれに思して。吾だに見捨てばこそは。と御心留め玉へるも。有り難き御心ぞかし。とて末摘花は。御聲ふども。いと寒げに打慄ひつゝ。語らひ申し玉ふ。君は見煩ひ玉ひて。

(源) 御衣ごもの事。後見申す人は候ふや。かく心安き御住居は。唯いと打解けたる様に。ふくみ萎えたる御衣こそ善けれ。表面ばかり修飾りたる御装飾は。あいふく候ふ。

と申し玉へば。女君はちとくしく。とすがに笑ひ玉ひて。

(末) 醍醐の阿闍梨。君の御装束を取扱ひ候ふて。吾衣ごも。え縫ひ候はでぞ。表をへ取られし後は。寒く候ふ。

と申し玉ふ。この阿闍梨は。いと鼻赤き御兄ふりけり。女君い有様。心潔白こはいひながら。餘り打解け過ぎたり。と君は思せど。この女君いと眞寶に木強人にておはず。

(源) 衣を。兄君に進ませたるはいとよし。山伏の身の代衣に譲り玉ひて相當ふん。このいたはりあき白妙の衣は。あどか七重にも重ね着玉はせらん。然るべき折々は。此方より贈り参らせんことを。打忘れたらん。とて注意し玉へかし。元より愚々しく油断き心の怠に。まして方々の紛らはしき勢に。自然忘るゝことも候はん。

と言ひて。向ひの院の御倉開けさせて。絹綾ふと奉らせ玉ふ。とて荒れたる

山伏の云々
○河海抄山
里は草葉の
露も繁うら
んみのしる
衣たえせと
も着よ
白妙の衣○

湖月抄、雛鶴の白妙、衣今日より、は千歳の秋に、たちやかさね

故里の〇久しふりにて、世人と異なる末摘花の方に訪ひ來しとて、花を鼻にかけた
源氏訪空蟬

所もふけれど。住み玉はぬ所の氣容は閑静にて。御前の木立ばかりぞいと面白く。紅梅の咲き出でたる匂ふと見はやす人もふきを。君は見渡し玉ひて。

(源歌)

故里の春の梢に尋ね來て。世の常ならぬはふを見るか。

と獨言ち玉へ。と。末摘花は聞き知り玉はざりけんかし。

君はまた空蟬、尼の方にも差覗き玉へり。我物顔にはあらず。かごやかに局ね住み成して。佛ばかりに所得とせ奉りて。行ひ勤めける様あはれに見えて。經佛の裝飾。果ふく爲成したる閑伽の具ふども。面白げに艶めかしく。尼にふりても尚心ばせありと見ゆる人の氣容あり。青鈍の几帳。心ば

松が浦島〇

後撰集に音にさく松が浦島けふぞ見るむべ心ある蟻も住みけりとあり蟻を尾に取成して色情を思ひ止むべきことにいへり

面白きに。甚く居隠れて。袖口ばかりぞ色特別ふるも懐しければ。君は涙催み玉ひて。松が浦島を遙に思ひてぞ。止みぬべかりける。

(源)

昔より心憂かりける御契か。其方の吾につれふかりけるも。とす

かにわばかりの睦びは絶やまじかりけるよ。

ふと言ふ。尼君も物哀ふる氣容にて。

(空)

かゝる方に頼み申さするも。宿因淺くはあらず思ひ知られ候ひける。

と申す。

(源)

常に折々吾懸想より。重ねて其方の心惑はし玉ひし世の應

報ふ。佛に懺悔申す。心苦しけれ。其方は思し知るや。吾のかく
 い。賢直にもあらぬものを。其方は心に思ひ合せ玉ふ。心もあらぬや
 はこそ思ふ。

言ふに。空蟬は心中に。君は心の紀伊守の浅間とかりし世の古事を。
 聞き置き玉へるふり。愧しく。

(空) みる浅間とき有様を。御覽。果てらるより外の應報は何處
 にか候はん。

とて眞實に打泣きぬ。古より物深く耻しげと勝りて。終にかく持て離
 れて尻にまでふりたること。思すも。見放ち難く思さるれど。果なき戯言を

も言ひ懸くべくもあらず。大方の昔今の物語を爲玉ひて。常陸の姫君に
 はむかりのいふむひだにあれかし。と末摘花の方を見遣り玉ふ。やうに
 ても君の御蔭に隠れたる人々尚多かり。皆一々差覗き渡し玉ひて。さて
 其人々に。

(源) 覺束ふく問絶ゆる日敷。積る折々あれど。心の中は怠らす。あ
 る。限ある途の別ばかりこそ後めたけれ。命ぞ知らぬ。

ふ。懐しく言ふに。何れをも分限に附て。愛憐と思したり。今は天下を掌
 に入れて。吾はと思し上りぬべき御身の分際あれど。心もくくしく
 持て成し玉はず。所につけ。人の分限につけつ。普く懐しくおはしませ

限ある○細
 流抄、限ある
 別のみこそ
 悲しけれ誰
 も命は空に
 しらねど
 命を○河海

抄なりらへ

は命予知ら

ぬ忘れじと

思ふ心はつ

きそはりつ

男踏歌

男踏歌○あ

の事末摘花

の帖に注す

ば。唯わばかりの御蔭に隠れて。多くの入々年月を経ける。

今年に男踏歌あり。内裏より朱雀院に参りて。この六條院に参る。道の

程遠くて。夜の明け方にふりにけり。月の曇りふく澄み勝りて。薄雪少し

降れる庭のえふらぬに。殿上人ふども。音楽の上手多かる頃にて。笛の音

もいと面白く吹き立て。この源氏の御前は。特別に心遣ひしたり。御方

々物見に渡り玉ふべく。君よりは豫て御消息ありければ。左右の對。渡殿

ふごに。御局しつおはす。玉葛君は寢殿の南の方に渡り玉ひて。明石の

姫君に。御對面ありけり。紫上も一所におはしませば。御几帳ばかり隔て

。物申し玉ふ。さて踏歌は。朱雀院。弘徽殿太后宮の御方ふと廻りけ

水驛○踏歌

の人々所々

を廻るを驛

路にたどへ

ふれを饗應

するを旅客

によそへて

水驛といふ

なりさてそ

の酒肴ばう

りを水驛と

いひ膳を用

ゐるを飯驛

といふとず

頭神の綿○

踏歌の人綿

る間に。夜も漸々明け行けば。水驛にて事省がせたまふべきを。例あること

より外に。様特別に事加へて。いみじく持て離させ玉ふ。影凄まじき曉月

夜に。雪は漸降り積む。松風木高く吹き下し。物凄まじくもありぬべき

程に。舞人は青色の菱はめるに。白重の色合。何の裝飾かは見ゆる。頭挿

の綿は。風韻もふき物ふれど。所からにや。面白く心往き。命延ふる程ふ

り。殿の中將。君。霧。内府の公達。多人の中に勝れて。美しく花やかあり。

空はのどと明け行くに。雪や散りて。そら寒きに。竹川謠ひて曲れる

姿。懐しき聲々の。繪にも書き留め難からんこそ口惜しけれ。御方々いつ

れもく。劣らぬ袖口ども。御簾より溢れ出たることたぞ。物の色合ふご

の造花をも
て冠の額に
さすこれを
高巾子とい
ふ

竹川〇催馬
樂に竹川の
橋の詰なる
や花園に花
園に我をば
はなて我を
ははなてや
めざしたぐ
へてとあり
春の錦〇孟
津抄見渡せ

も。曙の空に。春の錦裁ち出にける霞の中かと思渡さる。奇妙く心往く見物にぞありける。然るは高巾子の見馴れぬ様。壽詞の亂りがはしき。癡愚めきたることも。こころしく執り成したる。却て何ばかりの面白かるべき拍子も聞えぬものよ。例の綿纏頭ぎ渡りて退出でぬ。夜明け果てぬれば。物見の御方々。各歸り渡り玉ひぬ。大臣は少し御寝りて。日高くありて起き玉へり。

(源) 中將の聲は。辨少將におさし劣らざるは。奇妙しく有識ども生ひ出る頃にこそあれ。古の人は政治ふこの方や。勝れたることも多かりけん。風流なつ筋は。今世の人に。え優らざりけんかし。この中將

は柳櫻をこ
きませて都
そ春の錦な
りける

萬春樂〇お
れは八句の
詩を漢音に
て唱ふなり
後宴〇踏歌
の後宴は弓
の結ありま
は私の後
宴にて女樂

ふごをば實直しき政事家に為成してん。こぞ思ひ置きてし。こぞ我身の遊蕩はみたる頑固しとは。持て離れよと思ひしがど。尚下心には少しは風流ある筋の心をこそ留むべかれ。表面ばかり實直に持て鎮めたるは煩はしわめりふごぞ思ひたりし。ふご言ひて。中將、君をばいと可愛と思したり。さて君は萬春樂を御口吟に言ひて。

(源) 御方々の此方に集ひ玉へる序に。いかに女樂試てしがあ。私の後宴あるべし。

こぞ御琴どもの。美麗しき袋どもに入れて秘藏かせ玉へるを。皆引き出で押拭ひて。緩める緒を調へさせ玉ひふごす。御方々甚く心遣しつ。心懸

あるをいふ

想を盡し玉ふらんかし。

第廿四帖 胡蝶

此帖は源氏三十六歳の三四月なり

六條院春遊

三月やよひの廿餘日はつかあまりの頃ころ。春はるの御方おんかたの有様ありさま。平生つねより特別ことごとに盡つくして匂にはふ花はなの色いろ。鳥とりの聲こゑ。他ほかの里はらにはまた經よりぬにや。と珍うづらしく見みえ聞きこゆ。山やまの木立こだち。中なか島しまの邊あたり。色いろ勝まさる苔こけの景色けしきふど。若わかき女房にようぼうどもの眺遠ながとほくて心こころもこふく思おもふべからぬに。唐からめきたる船造ふねつくりらせ玉たまひける。急いそぎ装束さうそくがせ玉たまひて。池いけに下くだり乗り始めのりはじめさせ玉たまひは。雅樂寮うたがさの伶人ひなごめ召よめして。舟ふねの樂がくせらる。親王公卿みこかんがらめふど。數多あまた參り玉まゐり。秋好あきよし、中宮ちゆうぐうこの頃里邸ころなとにおはします。春待はるまつ園そのはと勵はげまし申し玉たまへりし御返事おんかへじも紫むらさ、上かみは此頃このころやと思おもひ。大臣おとども。いかでこの花はなの折ひらを中宮ちゆうぐうに御覺ごらんせさせんと思おもひ言いへど。序ついでふくて中宮ちゆうぐうの輕かろらかに

春の日の

うらゝに

さして

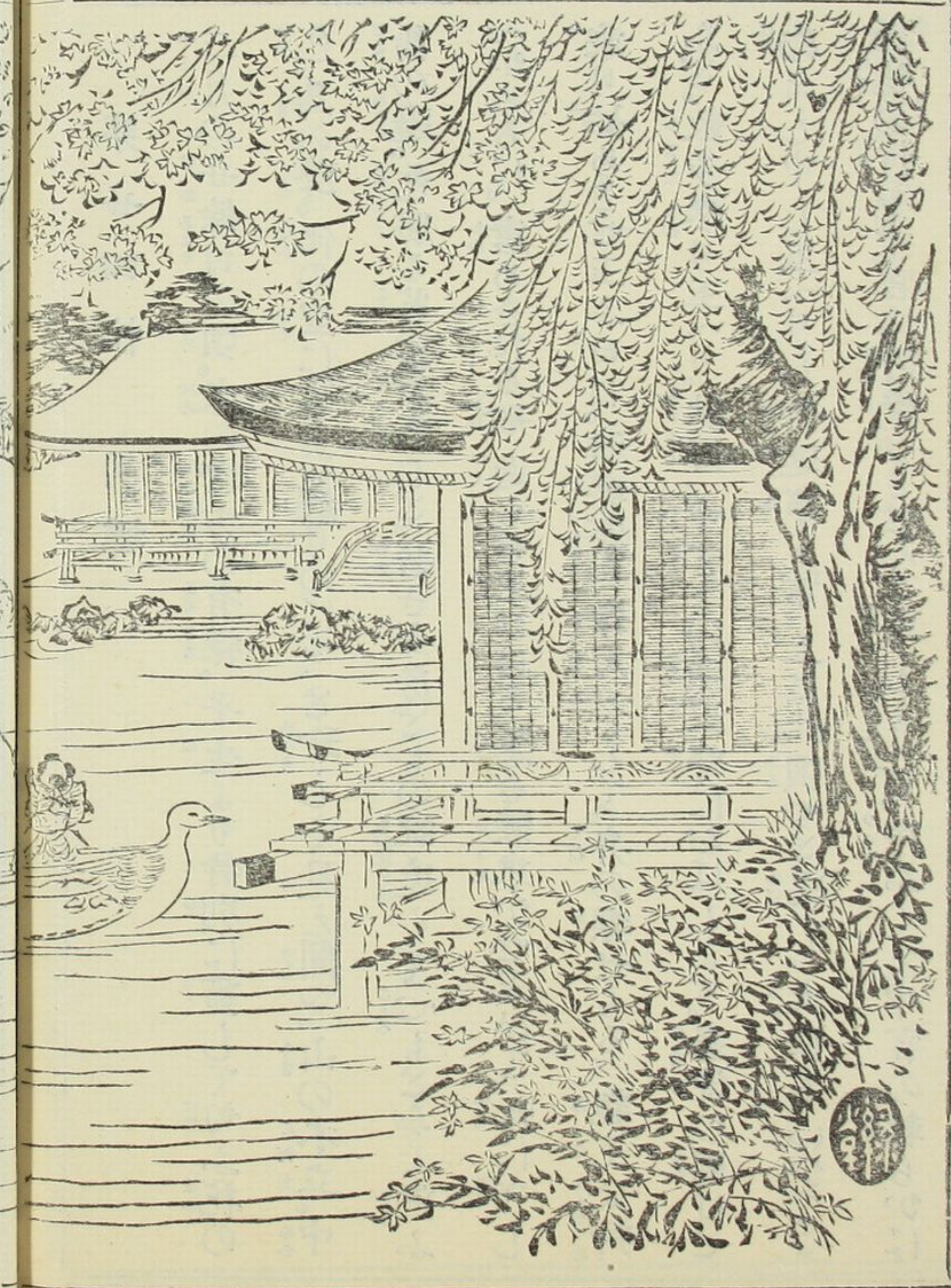
行く

舟は

棹の雫も

花を

散ける



龜の上の

山を尋

ねし

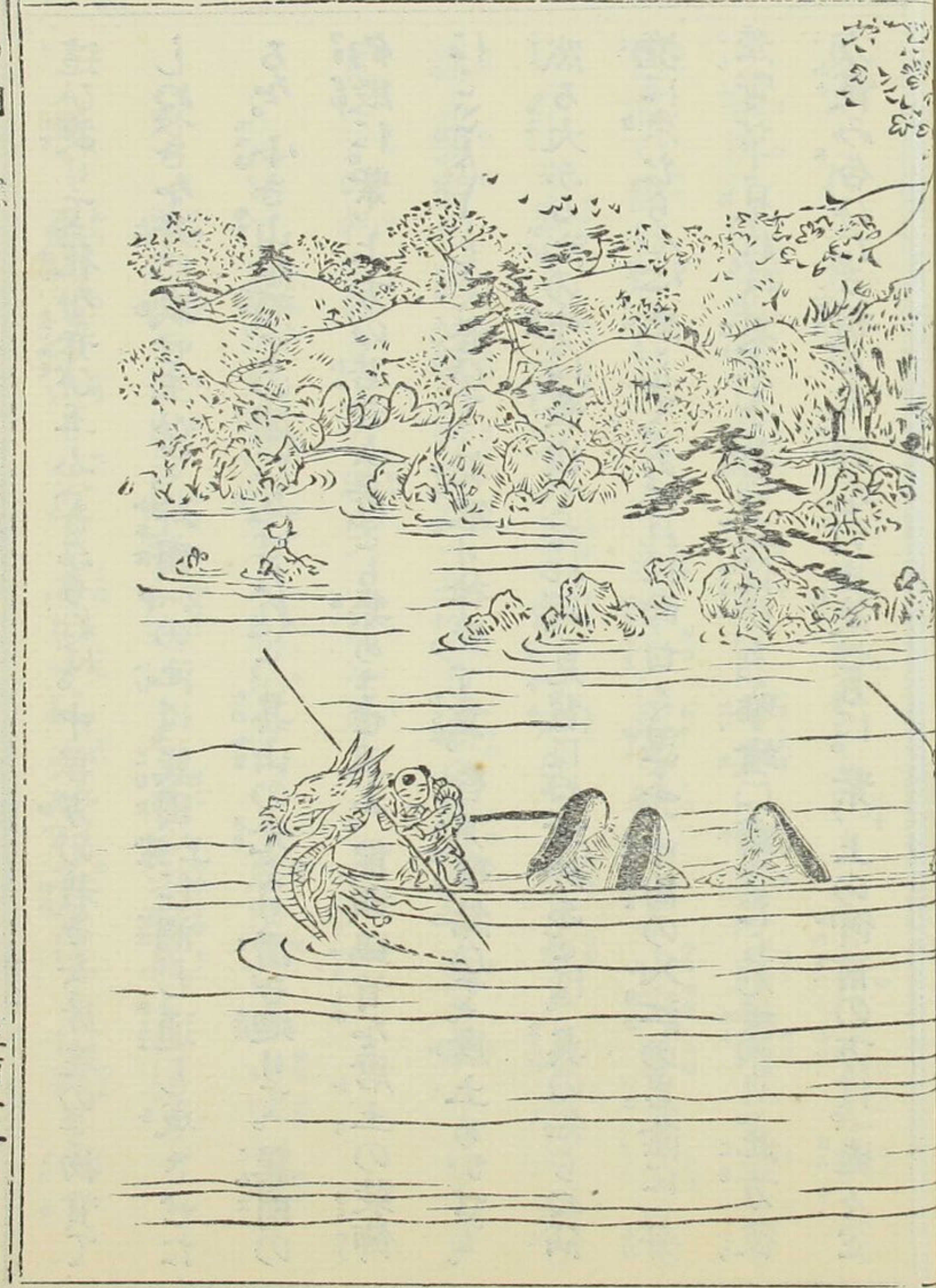
舟の中に

老せぬ

名をは

よゝに

残さん



這こゝひ渡りて。花はなを弄もてあそび玉たまふべきふらねば。中なか宮みや方かたの若わかき女によ房ぼう達たちの。物もの賞あづかりてしぬべきを舟ふねに載のせ玉たまひて。坤か園た中なかの池いけは。巽こなた園た上うへに洞ほらと通かよし成なさせたるを。小ちひき山やまを隔へだての關せきに見みせたれど。其その山やまの先さきより漕こぎ廻まりて。巽こなた園たの釣つり殿どのに。紫むら、上うへ方かたの若わかき女によ房ぼうども集あり玉たまふ。龍りゆう頭がし鷓し首しゆを唐から土ちの装さう飾じやくに。こゝろとしく修しゆひて。梶かぢ取とり棹さ差さす童わらわ。皆みな角みづら髪かみ結ゆひて。唐から土ちめひせて。然さる大おほき池いけの中なかに差さ出してたれば。見み習ならはぬ女によ房ぼうどもは。真まことの知しらぬ仙境せんじやうに來きたらん心こゝろ地ちして。あはれに面おも白しろく思おもふ。中なか島たの入い江やの岩いわ陰かげに舟ふね差さ寄よせて見みれば。果はかふき石いしの立た住まひも。唯ただ繪ゑに畫かきたらん様やうふり。此こゝ方かた彼かた方かた霞かきみ合あひたる梢せせきども。錦にしきを引ひき渡わたせるに。紫むら、上うへの御おん前まへの方かたは。遙はる々と

見み渡わたされて。色いろを増ましたる柳やなぎ。枝えだを垂たれたる花はなも。えも言いはぬ句くを散ちり。他ほか所かには盛さかり過ぎたる櫻さくらも。此こゝ處たには今いま盛さかりに舍は笑やみ。廊ろうを廻めぐれる藤ふ花ぢも色いろ濃こく開ひらけ行いきけり。まして池いけの水みづに影かげを映うつしたる山やま吹ふき。峯みねより溢こぼれていみじき盛さかり。水みづ禽とりどもの番つがひを離はなれず遊あそびつ。細ほそき枝えだどもを食くひて飛とび違ちがふ駕が鴨あひの。波なみの綾あやに紋もんを交まじへたるふど。物ものの繪ゑ様やうにも畫かき取とらまほしき。真まことに斧きの柄へらも朽くきづべく思おもひつ。日ひを暮くらす。

(六房歌) 風かぜ吹ふけば浪なみの花はなさへ色いろ見みえて。こや名なに立たてる山やま吹ふきの崎さき

(同) 春はるの池いけや井い出での川かは瀬せに通かよふらん。岸きしの山やま吹ふき底そこにもほへる。

(同) 龜かめの上うへの山やまも尋たづね舟ふねの中うちに。老おいせぬ名なをばこゝに残のこるん。

山吹の崎○
近江の名所
なり
井出○山城
にて山吹の

名所なり
龜の上の山
○蓬萊山を
いふ白氏文
集に見蓬
萊山不載歸
童男卅女舟
中老どあり
皇慶○平調
なり

(同) 春の日のうらたにそして行く舟は。棹の棹も花ぞ散りける。

ふとやうの果あき歌どもを。我心々に言ひ交しつ。行く方も歸らん里も
忘れぬべく。若き人々の心をうつすに。道理ふる水の面にふんありける。暮
れかゝる程に皇慶といふ樂面白く聞ゆるに。女房どもは心にもあらず釣
殿に舟差寄せられて下りぬ。此處の修飾いと事省きたる様に艶めかし
きに。中宮方の若き女房ども、我も劣らざと盡したる装束容貌。花を扱
き交せたる錦に劣らず見え渡る。世に目馴れず珍かふる樂ども奉仕る舞
人あご。心特別に撰ばせ玉ひて。人の心行くべき秘曲の限りを盡させ玉
ふ。夜に入りぬれば。いと飽かぬ地心して。御前の庭に篝火どもして。御階

安名尊○乙
女の帖に出
つ

喜春樂○黄
鐘調なり
青柳(雀)の
樂に青柳を
片糸により

の下の苔の上に樂人召して。親王上達部達も。皆各彈物吹物とり
とくに爲玉ふ。樂師ども特別に勝れたる限り。雙調吹き立て。堂上に
待ち取る御琴どもの。調いと花やかに扱き立て。安名尊遊び玉ふ程。生
けるかひあり。と何の綾目も知らぬ賤の男も。御門の邊隙ふき馬車の立
所に混りて。笑み榮え聴きけり。空の色。音樂の音も。春の調響は。いと特
別に勝りける差別を。人々思し分くらんかし。終夜遊び明し玉ふ。反
音に喜春樂立ち添ひて。兵部卿、宮青柳折り返し面白く謠ひ玉ふ。主
人の大臣も言加へ玉ふ。夜も明けぬ。朝曙の鳥の囀りを。中宮は物隔て。
妬く聴召しけり。

ておけや鶯
のおけや玉
ふといふ笠
はおけや梅
の花笠やと
あり

中の思○河
海抄いざれ
石の中に思
はありなか
ら打出るこ
とのさまか
たきかな

いつも春の光を籠め玉へる大殿ふれど。紫、上には御腹に。また御子もおはせぬを。飽かぬ事に思ふ人々もありけるに。玉葛、君瑕もふき御有様ふるに。大臣も故意と思し崇め申し玉ふ御氣色ふど。皆世に聞え出で。この君を思ひ玉ふも著く。心靡かし玉ふ人多かるべし。我身とばかりと思ひ上り玉ふ分際の人こそ。便につけつ。特別に氣色ばみ申し玉ふもありけれ。えも打出でぬ中の思に燃えぬべき若公達ふどもあるべし。玉葛の事情を知らず。内府の子の中將ふどは。好色々々しく言ひ懸りぬべかめり。兵部卿、宮はまた年頃おはしける北方も亡せ玉ひて。この三年ばかり獨住にて詫び玉へば。我こそはと思ひて。今は玉葛、君に氣色ばみ玉ふ。今朝も

いと甚く空酔して。藤の花を頭挿して。裏和び懸想し玉へる御様いとをかし。大臣も兼ねて思し、様協ふと下には思せど。強ひて知らず顔を爲り玉ふ。御盃の序に。宮はいみじく持て惱み玉ひて。

(兵) 思ふ心候はずば。退り遁げあまじ。いと堪へ難しや。
と争ひ玉ふ。

(兵歌) 紫のちゑに心をまめたれば。ふちに身投げん名やは惜けき。
とて。大臣に。

(兵) 同じ頭挿を。
とて盃奉り玉ふ。大臣いと甚く含笑み玉ひて。

紫の○玉葛
を源氏の御
女と心得け
れは吾姪に
當れるをも
て紫の縁と
はいへり藤

を淵に通はし玉葛に甚く心を懸けたる由をほのめりしたるなど

同し頭神と○河海抄我宿とたのむ吉野に君入らば同しかざしをさしこそはせめふちに身○其深き志を

(源歌) ふちに身を投げつべしやこの春は。花のあたりを立ち去らで見よ。

と切に留め玉へば。宮はえ立ち別れ玉はで。今朝の御樂遊。昨日よりは。ましていと面白く爲玉ふ。今日は中宮の御讀經の始ふりけり。即退出で玉はで。休所取りつ。晝の御装束に着替へ玉ふ人々も多かり。但故障ある人達ぞ退出ふも玉ふ。午の時はかりに。皆中宮の方に參り玉ふ。大臣を始め奉りて。皆附き渡り玉ふ。殿上人ふども残りふく參る。多くは大の御勢に待遇され玉ひて。中宮は尊く嚴しき御有様あり。春の上の御志に。佛に花奉らせ玉ふ。鳥蝶に装束ぎ分けたる童八人。容貌ふ

もて暫く待ち玉へとて未俄に玉葛を許し玉はぬ意なり中宮讀經始御讀經始○季御讀經とて春秋二季に大般若經を講讀する式なり紫上奉花於宮佛事鳥蝶○鳥樂蝶樂の舞人

と特別に整へさせ玉ひて。鳥の方には。白銀の花瓶に櫻を挿し。蝶の方は黄金の花瓶に山吹を挿して。同じき花の房も。嚴重めしく世にふき匂を盡させ玉へり。異園の御前の山際より漕ぎ出て。中宮の御前に入る程風吹きて。瓶の櫻少し打散りまがふ。いと麗かに晴れて。霞の間より鳥蝶の童の立ち出てたるは。いとあはれに艶めきて見ゆ。事更に平張ふとも移されず。御前に渡れる廊を樂屋の様にして。假に胡床どもを召したり。童ども御階の下に寄りて花ども奉る。行香の人々取次ぎて。閑伽にかへさせ玉ふ。御消息。中將君霧として申し玉へり。

(紫歌)

花園の胡蝶をこへや下草に。秋待つ虫は疎く見るらん。

なり鳥樂は
伽陵頻にて
蝶樂は日本
樂など

花園の○君
は秋を待ち
玉へは春の
物は疎く見
玉ふならん
となり

中宮はかの紅葉の御返歌ふりけり。ご含笑みて御覽す。昨日の舟に乗り
たる女房達も。

(女) 實に春色は。秋色よりも。え賤させ玉ふまじかりけり。

と花に折れつ。申し合へり。鶯の麗かふる音に。鳥の樂花やかに聞き渡さ
れて。池の水禽も。そこはかどふく囀り渡るに。鳥樂の急に成り終る程。飽
かず面白し。蝶樂は。まして果ふき様に飛び立ちて。山吹の籬の下に咲
き溢れたる花の蔭に舞ひ出る。中宮、亮を始めて。然るべき宮人ども。祿取
り續ぎて。舞童に給ふ。鳥の方には櫻の細長。蝶の方には山吹重の細長
給はる。樂師どもには。白絹一重。腰差ふご次々に給ふ。中將、君には藤

の細長添へて。女の装束纏頭け玉ふ。中宮の御返事。

(中文) 昨日は音に泣きぬぐこそは。胡蝶にも誘はれまほし心あ

りて。八重山吹を隔てどりせば。

ごぞありける。世に勝れたる上臈といへども。かやうの歌ふごは。堪へぬにやあ
りけん。思ふ様にも見えぬ御口つぎごもふめれ。まよやかの物見の女房
達。中宮のには。紫、上の方より皆氣色ある贈物ごもせさせ玉ひけり。ごや
うの物くだぐしければ書き載するにむつかし。さて六條院には。明暮
につけても。かやうの果ふき御樂遊繁く。心を遣りて過し玉へば。伺候ふ
人も自然物思ひふき心地して。此方彼方にも申し交し玉ふ。

音に泣きぬ
○細流抄、吾
宿の梅のは
つえに鶯の
ねになきつ
べき戀もす
るうな
胡蝶にも○
隔て玉はず
は其方の春
の方に、夢
らましどな
り

入々懸想玉
葛君

玉葛君はかの踏歌の折の御對面の後は。紫、上の方にも申し交し玉ふ。深き御用意やいかに浅くもあらん。氣色いと勞あり。懐き心はへん見え。人の心隔つべくもものし玉はぬ人の様ふれば。何方にも皆心寄せ申し玉へり。さればこの君に申し玉ふ人いと數多ものし玉ふ。されど大臣はこの婿君おぼろげに思し定むべくもあらず。吾御心にも健固に親がり果つまじき御心や添ふらん。父内府にも知らせやしてまし。おぼし思し寄る折々もあり。中將は少し氣近く。御簾の下ふごにも寄りて。御返答自申し玉ふごするも。玉葛は慎ましく思せご。眞の兄弟の程ご。人々も知り申しなれば。中將はすぐくしくして。好色の筋ふごは思ひも寄ら

ず。内府の君達はこの中將に引かれて。万事に懸想ばみ詫び歩くを。玉葛は其方のあはれにはあらで。下に心苦しく。實の親にとも知られ奉りにしがふ。と人知れず心に懸け玉へれご。大臣へはとやうにも漏し申し玉はず。單に打解け頼み申し玉ふ心向けふご。可愛げに若やかあり。似るごはふけれど。尚母君の氣容に。いと能くおぼえて。この玉葛の方は角めきたる所添ひたり。

更衣の今めかしく改まれる頃。空の氣色ふごごへ。怪しくそごはむごふく面白きを。大臣は長閑におはしませば。万事の御樂遊にぞ過し玉ふに。玉葛の方に。人々の豊書繁く成り行くを。大臣はさればこそごをかし

源氏渡西對
閨各人艶書

く思おもして。ごもすれば西にし對たいへ渡わたり玉たまひつゝ御覽ごらんんじ。然さるべき艶書えんしよには、御返事ごんかへり勸誘そんごうし申し玉たまひふごするを。玉たま葛くわは打解うちとけず苦くるしきごに思おもひたり。兵部卿へいぶけい宮みやの言ことふより程ほどふく心こころ入いられがまじき託言たくげんごもを。書かき集あつめ玉たまへる御文ごんぶんを。大臣おんちんは御覽ごらんじつけて。濃こまやかに笑わらひ玉たまふ。

(源) 早はやうより。隔へたつることふく。數多あまたの皇子みこ達の御中ごんちかに。この君きみをぞ互たがひに取別とりわきて睦むつしく思おもひしに。唯ただやうの好色すきたる筋せきの事ことぞ今いままでいみどう隔へたて隠かくし玉たまひて止やみにしを。世よの末すえにかく好色すき玉たまへる心こころはべを見るみが。をかしうもあはれにも覺おぼゆるかふ。尚なほ御返事ごんかへりご申し玉たまへ。少せとし由緒よしあらん女むすめの言ことの葉交はかすべき人ひとこそ。かの皇子みこより外ほかにはまたご

世よに覺おぼえぬ。かの皇子みこはいと氣色けしきある人の御様ごんさまぞや。

ご若わかき人は賞あで玉たまひぬべく申し知らせ玉たまへご。玉たま葛くわは慎つましくばかり覺おぼえたり。

(又) 右大將みぎだいしやうの。いと眞實まごつとやかに。ごごごしき様さましたる人の戀こひの山やまには孔子くわんせいの什學たふれがらびつべき氣色けしきに愁うれへたるも。然さる方かたにをかし。

ご艶書えんしよごも皆見みなみ比くらべ玉たまふ中に。唐からの縹はるかたの紙かみのいと懐あつかしく。董物たきもの染しみ深ふかく匂におへるを。いと細ほそく小ちひく結むすびたる艶書えんしよあり。

(又) これは如何いかふれば。かく結むすばれたるにかあらん。ごで引ひき披あけ玉たまへり。手跡てあといと面白おもしろくて。

孔子の什たふれがらの龍りゆうの蹟あと、河伯かはくの河流がわといふが如ごとし

思ふとも○
色に見えね
ばかり思ふ
とも君は知
るまじとな
り

(岩歌) 思ふとも君は知らずあ湧き返り。岩漏る水に色し見えれば
書き様いひめしくぞぼれたり。

(源) これはいひふるぞ。

と問ひ申し玉へぞ。玉葛ははかどくしく物も申し玉はず。

(又) 右近召し出て。かやうに音信れ申さん人をば。人撰して返答
ふぶはせさせよ。好色々々しうあざれむまじき今様のことの。便あき
こ爲出てあざするは。男の咎にしもあらぬふり。我思ひこし。あふ無
情。恨めしうも。と其折にこそ無心に思へ。立返りて能く思へばこしも
あらず。又やほらふらぬ人の。事の外に思ひ上らんもけやけく覚えけり。

男の故意と深切からで。花蝶につけたる便言は。女の返事心妬う持
あびたる。却て心立ち思ひ慕ふもあり。またそのまに。男の忘れぬるは。
女の方には何の咎かはあらん。物の便ばかりの等閑言に。口疾く返事
したる。然らでもありぬむりける。これは後の難とありぬべき業あり。凡
て女の物をせず。心のまに物のあはれも知り顔作り。面白き言をも
を見知らんぞ其極味氣あかるべき。兵部卿、宮右大將は決して等閑言
打出たまふべきもあらず。さればこの二人には。餘り物の程度も知
らぬやうに待遇せんも。其方の御有様に違へり。この分際より下の人々
には。其志の赴に従ひて。あはれをも弁へ。勞をも敷へ玉ひて。とて返事

は爲玉へ。

瞿麥の細長
○表紅梅に
て裏青なり

ふと申し玉へば。玉葛は打背面きておはする側目。いと美しげふり。瞿麥の細長に。此頃の花の色ふる御小袿。色合氣近く今めきて持成ふとも。さはいへ田舎び玉へりし餘波こそ。唯ありのまに大様ある方にはかりは見え玉ひけれ。かくて玉葛、君は住み馴れて。人の有様を見知り玉ふまゝに。いと様能く畏和びかに假粧ふとも心して持てつけ玉へれば。いと飽かぬ所なく花やかに美しげふり。君は他人と見成さんはいと口惜しむるべく思さる。右近も打笑みつゝ見奉りて。君を親と申さんには似氣なく若くおはしますめり。御夫婦として差雙び玉へらんは。配偶めてたしかし。

と思ひ居たり。

(右) 人の御息消ふとは姫君には更に申し傳ふるも候はず。先々も知召し御覽なる三四は。引き返しはしたため申さんも。いかにて。御文ばかり取り入れふと候へど。御返事は。君の勧誘し玉ひし折はかりぞ爲玉ふ。それとへ姫君には苦しさもいふを思ひたる。

と申す。

(源) さてこの若やかに結ばれたる艶書は。誰のぞ。いと甚う書き列ねたる氣色かふ。

と含笑みて御覽すれば。

(右) 彼は度々返却したるを。使者ぞとふねく留めて歸りにけるにこそ。内大臣殿の御子の中將の。この侍ふ小女房見子を。元來見知り玉へりける傳にて申入れ候ひける。この見子の外には。また見入るゝ人も候はざりしにこそ候へ。

と申せば。

(源) いと可愛きことか。下臈ありとも。かの中將をば。いかういふや。いははしためん。公卿といへど。この人の威望には必しも雙ふまじきこそ多かれ。内府の子の中にも。彼はいと沈着りたる人あり。其まじに爲置きても。彼は自然かの同胞ふることを。思ひ合す世もこそあれ。されば

源氏説諭結
縁於玉葛

かの中を。揭馬にはあらでこそ言ひ紛らさめ。見所ある文書か。

ふと頼にも下に打置き玉はず。さて玉葛に。

(源) かうふにやみやと申すをも。其方は御心に思す所やあらん。と心疾ましきを。かの父大臣に知られ奉り玉はんことも。またかう若々しう何とも世に馴れ玉はぬ程に。久しく年經たる數多の兄弟の中に。俄に差出て玉はんことは。いかうと思ひ廻し候ふ。尚然るべき人の方に御身を定めてこそは。然るべき序をもて父君の方には知らせ玉はめと思ふを。兵部卿。宮は獨身にてものし玉ふやうふれど。人柄いと甚う仇めきて。通ひ玉ふ所數多聞え。妾この憎げふる名告する人ともぞ數多く聞

ゆる。とやうからんことは憎氣ふくて見直し玉はん人は。いとよう平穩
 に持て消してん。少し心に嫉妬の癖ありては。人に飽かれぬべきことぞ。
 自然出て來ぬべきを。その御心遣ぞあるべき。右大將は年經たる北方
 の甚う壯び過ぎたるを厭ひがてらにて。更に求むふれど。それも傍の人
 々むつかしう言ふふり。實に然もあるべきことふれば。様々にぞ人知れず
 思ひ定め兼ね候ふ。かゝる縁談ふれば。親ふごにも分明に我思ふ様こそ
 語り出て難きことふれど。やばひりの御齡にもあらず。今はふごか何事を
 も御心には分別き玉はごらん。予を昔様に擬へて。母君と思ひ成し玉
 へ。御心に満足ごらん。こは心苦しく候ふ。

ふごいこ眞實やむにて申し玉へば。玉葛は苦しくして。御返答申せんことも
 覺えず。よりして返答せぬもいと若々しく。うたて覺えて。

(玉) 何事も思ひ知り候はごりける程より。親ふごは見ぬものに習ひ
 候ふて。ごもかくも思ひ候はれず候ふ。

ご申し玉ふ様の。いと大様ふれば。君は實にと思して。

(源) さうらば世の譬の繼父を。それと思し。愚ふらぬ吾志の程も。見顯
 し果て玉ひてんや。

ふご打語らひ玉ふ。さて君は玉葛をば吾物にと思す様の。こはまはゆけれ
 ば。え打出て玉はず。これと氣色ある詞は時々打交せ玉へど。玉葛は見知

らぬ様ふれば。君はすゝろに打敷かれて。彼方に渡り玉ふ。御前近き呉竹のいゝ若やかに生ひ立ちて。風に打靡く様の。懐しきに立留り玉ひて。

(源歌) 籬の内に根深く植ゑし竹の子の。おのがよにや生ひ別るべき。思へば惚めしかるべきとぞかし。

と御簾を引き上げて申し玉へは。玉葛、君膝行り出て。

(玉歌) 今更にいかふらん世の若竹の。生ひ始めけん根をば尋ねん。

ふかしくいゝ候はめ。

と申し玉ふを。君はいゝおはれと思しけり。さるは玉葛の心の中には、おも思はずかし。如何ふらん折。吾實父には申し出てんとすらん。心も

籬の内○我家に養育したる其方の他人のものになるは憾めしとなり今更に○今更いりて實父をば尋ねんとて前のおのがよといへるを

實父に取成していへりなりく○今更實父を尋ねては却て悲しきおとやあらんとなり

源氏語玉葛事於紫上

ふく哀ふれど。この大臣の心はへの。いゝ世に有り難きを。實父と申すも。元より見馴れ玉はねば。この大臣のやうにもえ深切ふらずや。昔物語を見るにも。漸人の有様。世中のあるやうを見知り玉へば。玉葛はいと慎ましく。實父に逢ひ奉らんこと。吾心よりと知られ奉らんは。少し難かるべく思す。大臣はいと可愛しと思ひ申し玉ひて。紫上にも語り申し玉ふ。

(源) かの玉葛、君よ。怪しう懐しき有様にもあるひふ。かの母君は餘り大様過ぎてぞありし。この君は物の有様も見知りぬべく。氣近き心様添ひて。後めたからずこそ見ゆれ。

ふと譽め玉ふ。紫、上げ君の尋常にも思すまじき御心様を見知り玉へれば、それと思し寄りて。

(紫) かの君のさやうに物の心得つべくはものし玉ふめるを。君の後めなき御心をも知らず。裏心ふくも打解け頼み申し玉ふらんこと。氣の毒あれ。

と言へば

(源) 何ぞて吾の頼もこげふへやはあるべき。

と申し玉ふ。

(紫) いでや妾にても。最初は女のやうに思召したれど。また忍び難う

物思はしき折々ありし御心様の思ひ出てらるる節々ふくやはある。

と舍笑みて申し玉へば。君はあふ心利と思して。

(源) うたても思し寄るか。吾に然る心あらば。彼君いひで見知らざらん。

とて煩しければ言ひをして。さて心の中に。人のかうも推側り玉ふにも。いひばあるべからん。と思し亂れ。且は僻々しく怪しからぬ我心の程も。思ひ知られ玉ひにけり。

かくて君は心に懸れるまに。屢玉葛の方に渡り玉ひつゝ見奉り玉ふ。雨の打降りたる名残のいと物志めやかふる夕方。御前の若楓。柏木ふどの。

源氏復渡西
對

青やかに茂り合ひたるが。何となく快げふる空を。君は見出し玉ひて。

(源) 和且清

和且清○白
氏文集四月
天氣和且清
綠槐陰合沙
堤平

と誦し玉ふて。玉葛の御様の風韻やかさを思し出てられて例の忍びやかに渡り玉へり。玉葛の手習ふごとして。打解け玉へりけるを。起き上りて耻らひ玉へる顔の色合いと美し。婀娜やかふる氣容のふと昔の夕顔を思し出てらるゝにも。君は忍び難くて。

(源) 其方を見初め奉りし折は。いごかうも母君には似玉はずと思ひしを奇しう唯それかと思ひまがへらるゝ折々こそあれ。あはれある業ぶりけり。中將の更に母葵、上の風容にも見えの習慣に。人は母親には

せうも似ぬものと思ふに。かゝる其方のやうふる。似たる子もものし玉ひげる。

こゝて涙催み玉へり。筥の蓋ふる御菓子の中に。橘のあるを手探りて。

(源歌) 橘の馨りし袖にふそふれば。更れる身ごもれもほえぬわが。母

君の世と共の心に懸けて忘れ難きに慰むいふふくて過さつる年頃を。かくて其方を見奉るは。夢にや。とばかり思ひ成すを。えこそ忍ぶまうけれ。思し疎むふよ。

こゝて御手を執へ玉へれば。玉葛は今までかやうにも習慣ひ玉はせりつるを。いごかうたゞ覺ゆれど。大様ふる様にてものし玉ふ。

橘の○其方は母君夕顔と別人とも思はずとなり

袖の香を○
母に擬へ玉
ふ故に吾も
やがて果な
くなるべし
とあり
源氏竊戀想
玉葛

(玉歌) 袖の香をよそふるからに橘の實をへ果ふくふりてとすれ。
むつわしと思ひて俯伏し玉へる様。いみづく懐しく。手つきのつづく
と肥え玉へる。身ふり肌つきの。濃やかに美しげふるに。君はふかしくふる
物思ひ添ふ心地し玉ひて。今日は少し御心に思ふと申し知らせ玉
ひける。玉葛は心憂く。いかにせんと思ひて。慄はるゝ氣色も著けれい。

(源) 何かひく疎ましとは思ひたる。いと能く持て秘して。世人に咎
めらるべくもあらぬ程に心を交して。然りげなく相思ひ玉へよ。今また
淺くも思ひ申すの志に。尚また一層志を添ふべければ。世に比類あ
るまどき心地ぞするを。かの音信れ申す兵部卿宮。右大將ぶごよりは。

風の竹に生
る程云々○
白氏文集、
風生竹夜窓
間臥月照松
時臺上行こ
れは和且清
の末句なり

思し賤すべくやはある。拙者の如き。いとかう深き心ある人は。世に有り
がたかるべき業ふれば。他の人達は何れも後めたくばかりこそあるべけれ。
と言ふ。いとこわかしらふる御親心あり。雨は歌みて。風の竹に生る程。花や
かに差出でたる月影。面白き夜の様もあめやあふるに。女房ごもは濃やか
ふる御物語に畏まり置て。氣近くも侍はず。さて君は玉葛。君ごは常に
見奉り玉ふ御中ふれど。かく好き折もあり難ければ。言に出て玉へる序の
生憎ふる御心にや。玉葛の懐しき程ふる御衣ごも。ごかく引き滑らし玉
ひて。近やかに。伏し玉へば。玉葛はいと心憂く。他人の思はんことも珍か
にいみづく覺ゆ。實の親の御邊からましかば。疎略には見放ちたまふごも

斯様の憂き心はあらたしき。悲しき。色むすれど。涙溢れ出て。いかに苦しき氣色あらはし。

(源) かく思す。さつらけれ。女の習慣として。志あれば更に持て離れて知らぬ人にも。世の道理にて皆許す業あるを。かく年経ぬる睦しき。かくばわり見え奉るや。何の疎ましくあるべきぞ。是より無理ある心はよもや見せ奉らど。唯おぼろげに。忍ぶに餘る心を慰むるまじきぞ。

さて憐げに懐しく申し玉ふ。多かり。まして玉葛のひやうふる氣容は。唯昔の夕顔の心地して。いみじくあはれあり。されど我御心おびらも。卒爾に思遣なき。いと思し知らるれば。いと能く思し返しつ。人も奇怪と

思ふべければ。甚く夜も更も出て玉ひぬ。

(源) 思ひ疎み玉は。いと心憂く。こゝろあるべけれ。餘所の人ばかり惚々しくはあらぬものぞ。吾は限なく底知らぬ深き志ふれば。人の答むべき様にはよもあらざ。唯昔の母君の戀しき慰めに果なきも申さん。その母君の同じ心に返答なきし玉へ。

いと委細に申し玉へ。玉葛は我にもあらぬ様して。いと憂しと覺えなれば。

(又) いかにうづに疎み玉はん。ばわりには見奉らぬ御心ば。いかにふふくも憎み玉ふ。むめるむ。

底知らぬ○古今集、底ぬなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にまそわた波はたて

と歎き玉ひて。

(又) ゆめ人に怪しまる氣色見せ玉ひそよ。

とて。歸り玉ひぬ。玉葛は年齢こそ過し玉ひにたる程ふれ。また世間を知り玉はぬ中にも。少し世馴れたる人の有様をだに見知り玉はれば。男女の交際今宵より氣近き様は思ひも寄らず。意外にもありける世むか。と歎かしき。いと氣色も悪しければ。女房ども。姫君には御心地惱ましげに見え玉ふとて。持て騒ぎ申す。兵部卿。宮ふとは。君の下心を知り玉はれば。

(兵) 殿の御氣色の濃やかに。辱くもればしますか。實の御親と申すことも。更にかくばかり思し寄らぬ。いふふかくは待遇と申し玉は。

源氏消息玉葛

ふと忍びて申すにつけて。玉葛はいと。思はずに心づきふき君の御心の有様を。疎ましく思ひ果て玉ふにも我身ぞ心憂かりける。翌朝大臣の方より御文疾くあり。玉葛は惱ましがりて伏し玉へれど。女房ども御硯ふと参りて。御返事疾くと申せば。玉葛は去ぶくに御文見玉ふ。白き紙の表面は大椽に。實直しきに。いとめてたく書き玉へり。

(源文) 比類ふかりし御氣色こそつらきも忘れ難く候ふ人いかに見奉りけん。打解けて寝も見ぬものを共草の。ことありかほに結ばるらん。幼稚くこそものし玉ひけれ。

ことすがに親がりたる御詞も。玉葛はいと憎しと見玉ひて御返事申せ。

打解けて○
また肌も交
はさぬに憂
へ玉ふは幼
稚なりと本

り
人も人目怪しければ。ふくよかふる陸奥紙に。たふ

(玉文) 承りぬ。妾心地の悪しう候へば。御返歌も申さぬ。

とばかりあるに。彼は母には似たるもの。かやうの氣色はさすがに硬直あり。と君は含笑みて。恨み所ある心地し玉ふも。うたてある御心か。さて君は色に出し玉ひて後は。大田の松のと思はせたることふくむづかしく申し玉ふこと多ければ。玉葛はいと所狭き心地して。我身も置き所なき物思つきて。いと惱ましくそぞ爲玉ふ。かくて事の心知る人は寡くて。疎きも親しきも。大臣をば無下の親様に思ひ申したるを。君のかやうの氣色の世に漏り出せば。いみじく人嗤笑に。憂き名にもあるべきか。

大田の松○
細流抄戀ひ
わびぬ大田
の松の大方
は色に出て
、や逢はん
といはまし

實父大臣ふどの。尋ね知り玉ふにても。眞實々々しき御心はへにもあらざらんものから。ましてあはしくしく待ち聞き思さんこと。萬事に心安けなく思し亂る。兵部卿宮。右大將ふどは。吾々を殿の玉葛に許可し玉ふ御氣色を微聞き玉ひて。いと懇懇に申し玉ふ。かの岩漏中將も。大臣の御許可を見てこそ。一方に傳聞きて。眞實の系統をば知らず。只偏に嬉しくて。居起返事のおきを恨み申し惑ひ歩くめり。

岩漏中將○
前に岩漏る
水にの歌を
詠むたる人
にて内府の
長子乙女帖
に左少將若
菜帖に右衛
門督とある
あれなり

